大正六年九月十四日 第三種郵便物認可 • 昭和十六年七月廿五日 印刷納本 • 昭和十六年八月一日 發行（毎月一回一日發行）

建築と社會

8

一部金拾錢

日本建築協會

第24輯第8號
昭和16年8月1日

㊣ ルーフイング・フエルト公定價格　昭和15年10月15日

種別＼要項	重量	面積	製造業者販賣價格	卸賣業者販賣價格	小賣業者販賣價格
			圓	圓	圓
アスファルトルーヒング	20瓩	21平方米	4.70	5.20	5.70
	25瓩	〃	5.85	6.45	7.10
	30瓩	〃	7.05	7.75	8.50
アスファルトフエルト	10瓩	〃	3.15	3.47	3.80
タールフエルト	10瓩	42平方米	2.85	3.14	3.45

イ、本表價格ハ、ストレートアスファルト又ハコールタールノ浸透量原紙重量ノ80%以上ノモノノ價格トス

ロ、製造業者及卸賣業者販賣價格ハ買主店先渡價格トス
但シ樺太、朝鮮、臺灣、南洋群島、關東洲、滿洲又ハ支那向ノ場合ニ於テハ賣主最寄港船積渡價格トス

ハ、包裝費及荷造費ハ賣主負擔トス

（砂付便利瓦及特許ギルソイド共從來通り）

三星印

三星印砂付便利瓦・三星印ルーフイング及フエルト
專賣特許ギルソイド防水工事責任施工（陸屋根地下室）
アスファルト應用各種加工品・床舖工事三星サイドリユーム
耐火・耐熱・防音・保溫・　—石綿代用品—　三星岩綿各製品

大阪田島應用化工株式會社

營業所　大阪市北區中之島五丁目三〇　電話土佐堀 1323 5682 6221 7294

田島應用化工株式會社　日本岩綿工業株式會社　日本木材化學工業株式會社
三星產業株式會社　三星セメント工業株式會社　合資會社宮城アスファルト研究所

菖蒲池・厚生住宅展・設計圖案懸賞募集規程

1. 設計の要旨

本協會は創立25年記念事業の一として、關西急行鐵道、菖蒲池停留所に近き形勝の地に住宅展覽會を開催し、20數戸の模範的厚生住宅を建設せんとす。

樣式の實實なる、平面の利便なる、設備の快適なる、構造の安全なるは言を俟たざるところ、現下の國際情勢に對應し、資材不足勝の折柄、容易に入手し得べき材料を用ひ、100 平方米迄の比較的餘裕ある國民住宅の理想案を望むこと切なり。

2. 應募設計要件

（イ）敷地　別揭の敷地區劃圖內の敷地を撰定すること、本敷地は概ね平坦にして、尙電氣、上水道の設備あるも、瓦斯はなし。

（ロ）建築面積　延 80平方米—100平方米とす

（ハ）家族構成及び所要室　任意とす

（ニ）樣式、材料、構造、設備、任意とするも資材不足勝の折柄、創意工夫の出づるを望む

（ホ）本設計は市街地建築物法に準據するものとす

3. 所要圖面及び設計說明

（イ）平面圖、各階、縮尺 100 分の 1（圖面上方をほゞ北となし、敷地をも圖示し建物配置をも示すこと）

（ロ）立面圖　4 面　縮尺100分の1

（ハ）透視圖、外部

（ホ）設計說明はその概要を簡明に圖面の餘白に記入すべし

4. 入賞者の人數並に賞金

入賞　3 名　賞牌及び賞金　200圓宛

佳作　5 名　賞牌及び賞金　50圓宛

（賞金の一部は公債を以て充つ）

5　締切期日　昭和16年8月30日（土）午後3時

6. 入賞者發表　本人に通知をなすと共に審査の結果を「建築と社會」10月號に發表す

7. 審査　審査は住宅展覽會幹事會に於いて行ふ

8. 應募心得

（イ）圖面は大きさ天地50糎、左右70糎の白色畫用紙1枚に取纏めに墨書し、陰影又は色彩を施すべからず、透視圖は此の限りにあらず

（ロ）圖面には暗號を附し、別に暗號並に住所、氏名、職業（勤務先）を記せる紙片を密封し、封書の表面には前記暗號を記すべし

（ハ）審査の結果に對して說明を求め、又は異議を申し立つることを得す

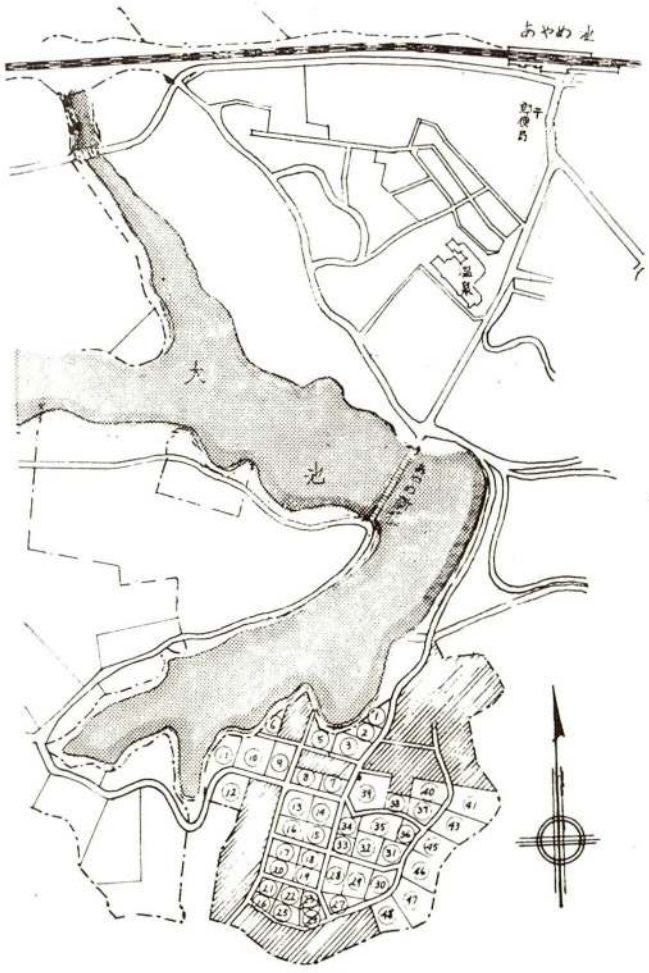
（ニ）應募圖案に關する一切の權利は本會に歸屬するものとす

（ホ）應募圖案は一切之を還附せず

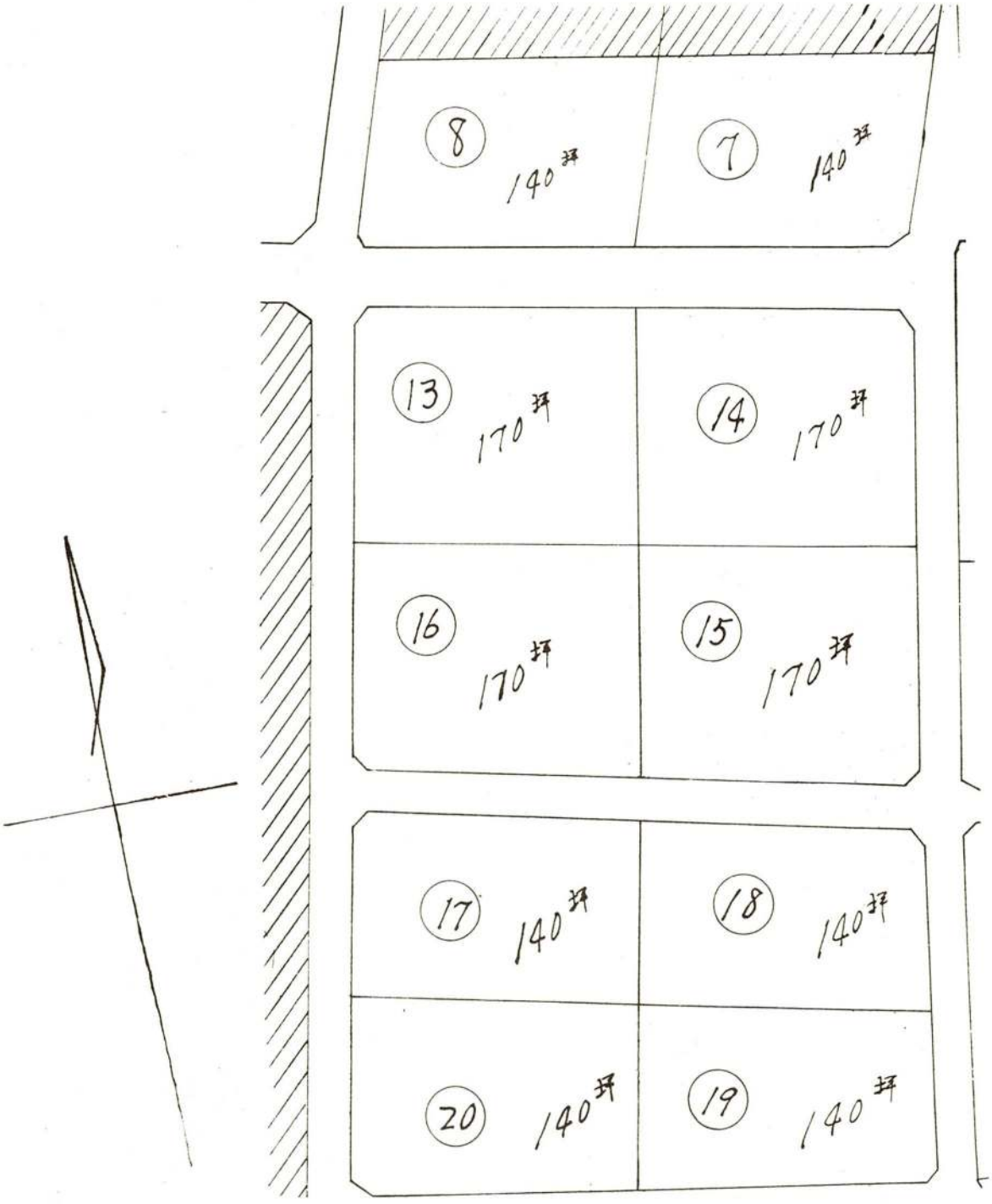
（ヘ）應募圖案發送先

大阪市北區中之島 3 の 3 朝日ビル內

日 本 建 築 協 會 宛



下掲の敷地區劃圖より、任意に敷地を撰定すること（縮尺1：600）



建築と社會

第24輯　第8號　　昭和16年8月發行

八月號

目　　次

内南洋の建築……森田慶……(1)

南方共榮圈内の建築設計に就いて……東畑謙三…(8)

南洋方面の建築事情……島之夫…(14)

佛印建築物瞥見……武藤彪…(20)

南支の民家……太田傳太郎…(22)

城郭と國防……古川重春…(32)

規格統制に補足を提唱する……古塚正治…(41)

大和路の茶室・3・……慈光院の不昧室と中の坊の茶席……岡田孝男…(37)

☆紫　煙　室☆

洋家具の話(第二)……平尾敏也…(44)

ブック・レビュー……堀口甚吉…(47)

科學振興にのる二題……西山卯三…(48)

☆寫　眞　欄☆

南洋方面の建築事情…(佛印、蘭領印度、フイリッピン、印度)　大和路の茶室…(岡田)

會　　報……(50)

菖蒲池・厚生住宅展・設計圖案懸賞募集規程

會　　告

講演會開催通知

曩に會告を以て豫報仕候通り夏期見學休止致居候に就ては時局柄目下非常に關心を有するところの「ヂベル」工法の一般につき下記の通り講演會を開催致候間何卒御繰合せ御來聽下され度此段御通知申上候

1. **時　8月18日（月）午後六時開會**
1. 所　協會倶樂部室（朝日ビル四階）
1. 講師ト演題

「ヂベル」工法及大梁間建築に就て

織本道三郎氏

◎出席御希望の方は片ハガキにて八月十日までに御申込のこと

昭和16年8月1日

會勢幹事會幹事長　**谷　民　藏**

會員倍加お願ひ

豫而お願ひの一人一名新入會者御紹介の儀は、是非御協力被下度特に願上候

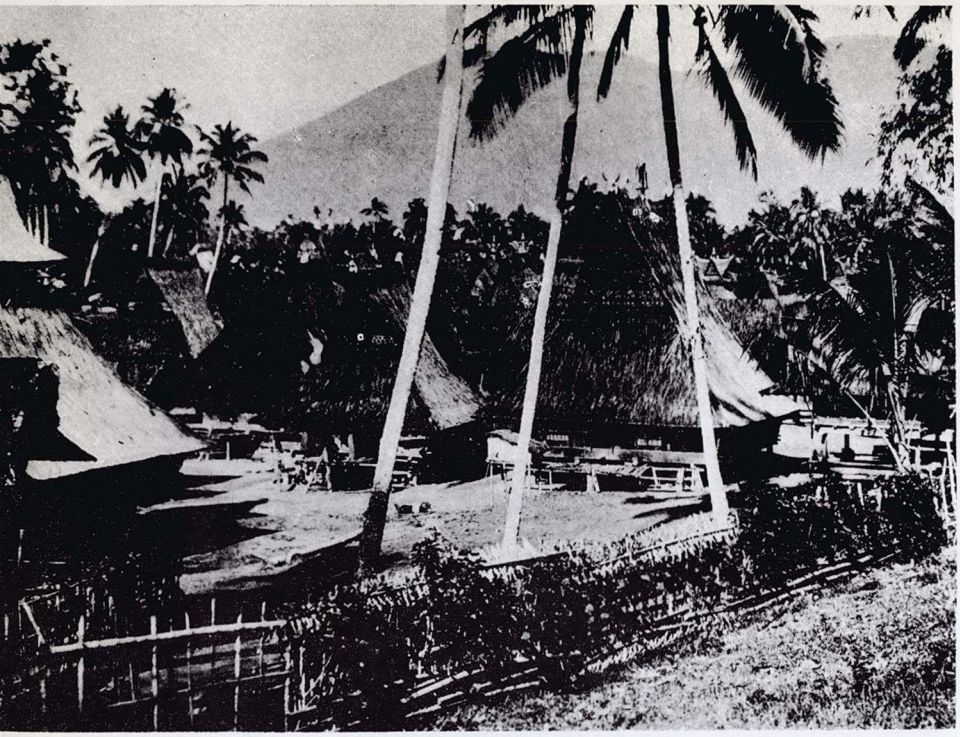
會勢幹事會幹事長　谷　民　藏



1. **バタツク族の最も古い民家**（寫眞・宮武精道氏藏）

スマトラ

（蘭領印度）



2.バタツク族の部落

スマトラのトバ湖附近に住んで居る、このバタツク族だけ宗教は回教だけでなく、キリスト教を信奉して居る。

（外南洋の現勢より）



3.バタツク族の家の模型

（寫眞・宮武精道氏藏）



4.千年も保つ建物

スマトラの土人バタツク族の住家である。その建築術から言つても實に堂々たるもので建築も一千年は裕に保つと言はれて居るが、此れが土人の建物とは思へない位、立派なものだ。然し、この立派な家に入る土人は無知其のものでとてもお話にならぬ程原始生活をつゞけてゐる。



5.バタツク族の女

回教徒では豚を食べる事を嚴禁されてるが、この種族だけは平氣で豚を喫ふ。これがそのモダンガール。



6.バタツク女の米搗き

スマトラ土人中でもバタツク族は一番その生活は珍奇である。勿論知的の程度はお話にならぬ程低級で時間的觀念のない彼等は鼻唄を唄ひながら、こんな長い棒をもつてゴツトンゴツトン米搗きをやつて居る°（外南洋の現勢より）

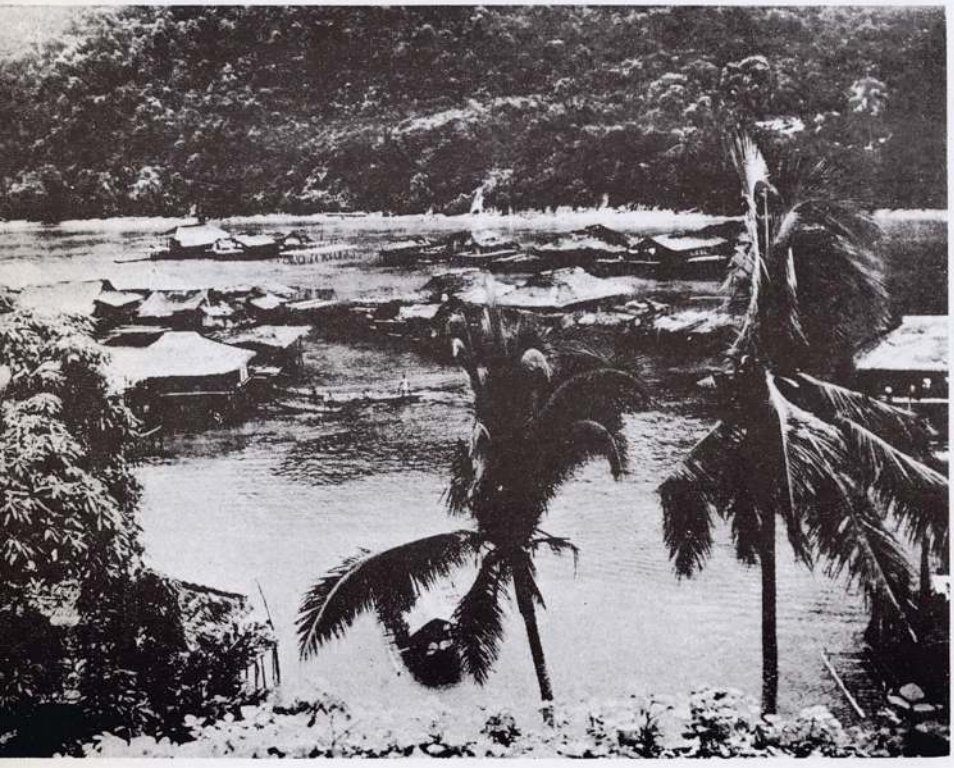


フイリツピン

（米國領）

7.モロ族の住家

フイリツピンの統治で最も手をやいたのがモロ族で彼等は勇猛慓悍である。アメリカは1913年にやつと彼等を納得させて武裝解除を行つたので、今では秩序を守る住民となつた。住居は概して海濱に面した處に建てる風習がある、これは漁をするにも、敵を防禦するにも便利だからである。



ニユーギニヤ

（蘭領印度）

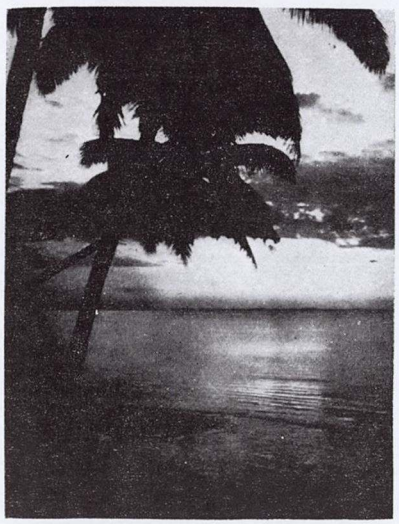
8.土人の水生活

蘭領ニユーギニヤに在住する20餘萬のパプア族は、文化圏とは餘り緣遠い原始生活を續けて居る。彼等は依然として裸と裸足の生活である。水邊に近いところでは大底水上生活を營んで居る。それは彼等の生活上何かにつけて便利だからである。



9. 簡單な土人家屋

土人達の家屋は簡單だ。雨露さへ凌げば其れで家屋としての使命は達せられてゐる。(外南洋の現勢より)



10. 南洋の夜明け

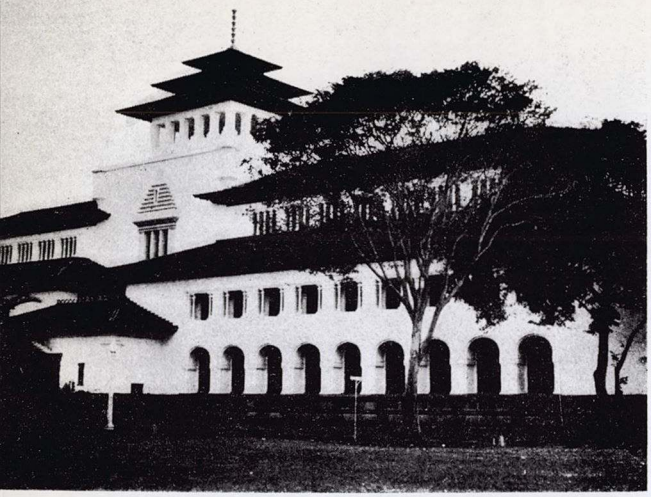
南洋の風景はすべてが雄大で大な中にロマンチックな香が多分に含まれてゐる空は透明でコバルト色の海も亦美しい。海水で洗ひ清められた白砂の波打ち際に背高く伸びた椰子の木が海面に向つて生へて居るのも南國的な情趣を一入そゝる。

(外南洋の現勢より)



11. 土人の家屋と建築

彼等の家屋は床が高い、いや床などと言ふものは無く物凄い高い柱の上に小屋を建て猛獸や毒蛇の襲來を防ぐためである。



12. 蘭印陸軍省

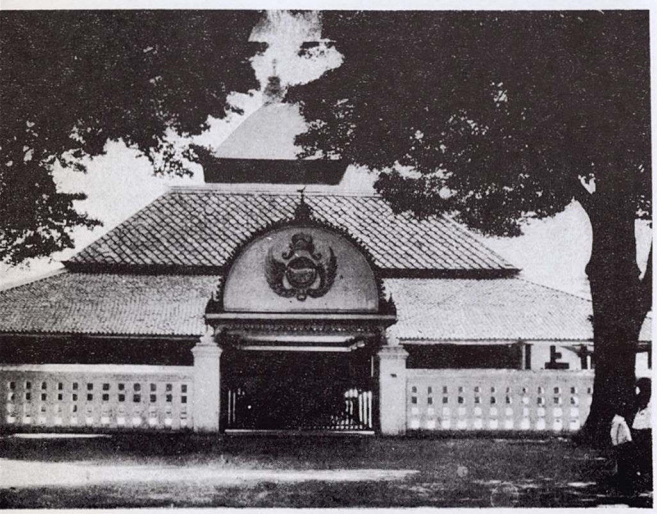
複雑多岐な國際新情勢に對處するために最近に於ける蘭印の國防充實振りは實に目まぐるしいほどである。勿論これは假裝敵國あつての充實である。その軍備も英、米を頼つての他力本願的軍備である。

バンドンにある陸軍省は全蘭印防備の總元締である。



13. トコ千代田

ジヤワでトコ千代田と言つたら日本人は勿論土人、馬來人の中でも知らぬ者が無い。このトコ千代田の主人は以前A・Kから蘭印生活之25年と題して放送した事のある岡野繁藏氏である。氏は競走激甚なジヤワの商業界に在つて白人や華僑を向ふに廻して堂々と商戰を續けて居る。



14. 蘭印の回教

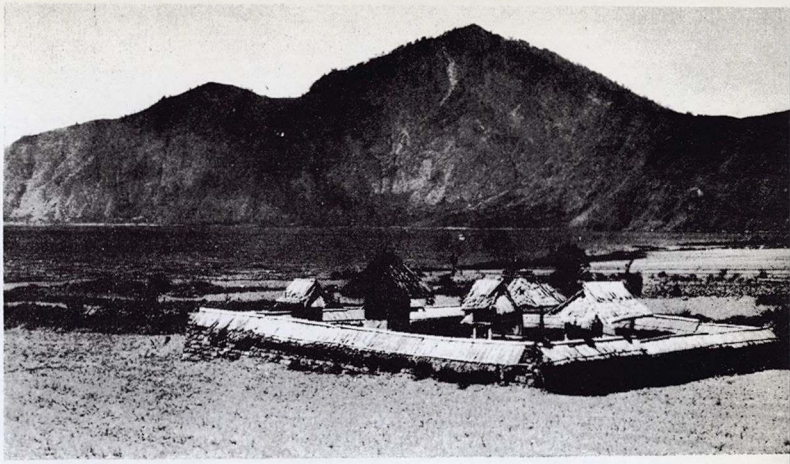
蘭印住民の約9割は回教徒である。ジヤワスマトラの兩島を其の分布中心とする回教は14世紀の初葉卽ちマレー半島、スマトラ北部のアラビヤ商人等により傳播され商業文化と共にジヤワに侵入し遂に印度教、佛教を驅逐し次第に勢力を得たものである。ジヤワを歩いて目につくものは各村々にこの回教寺院が建てられてあることである。

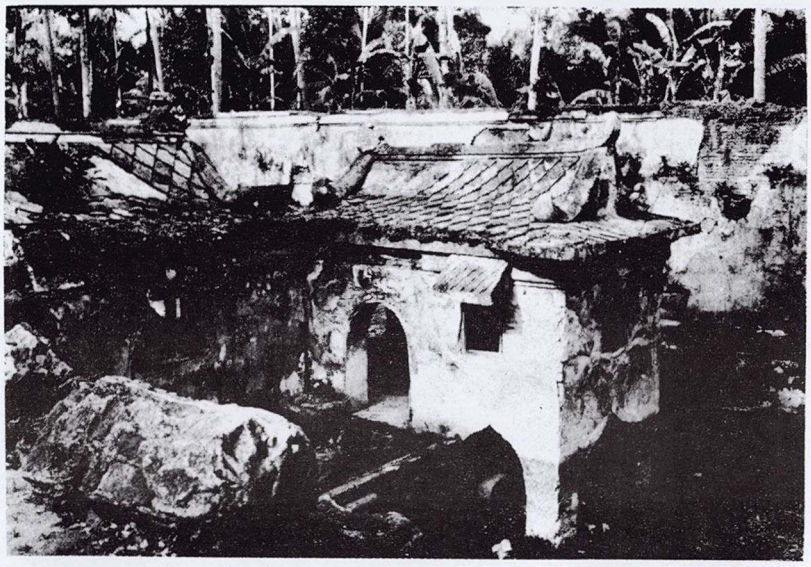
ジ　ヤ　ワ（蘭領印度）

1.バ　リ　嶋

島に保存されて居る原始的な建物で、何か信仰の對象となつてをるのではないか、神社に似た印象を受けたと宮武精道氏は語る。

蘭領印度方面の建物
宮武精道氏寫眞藏

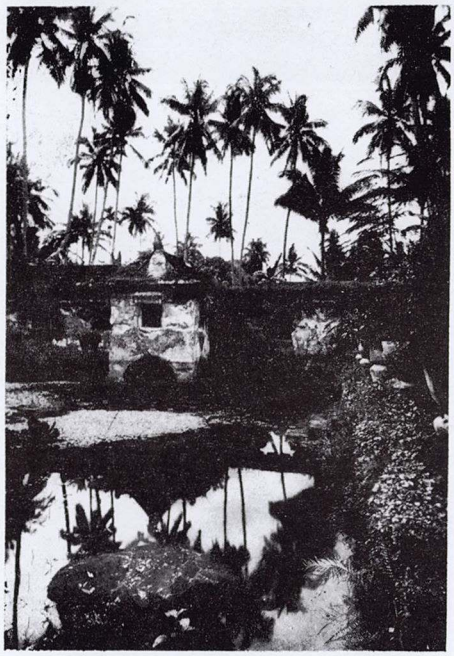




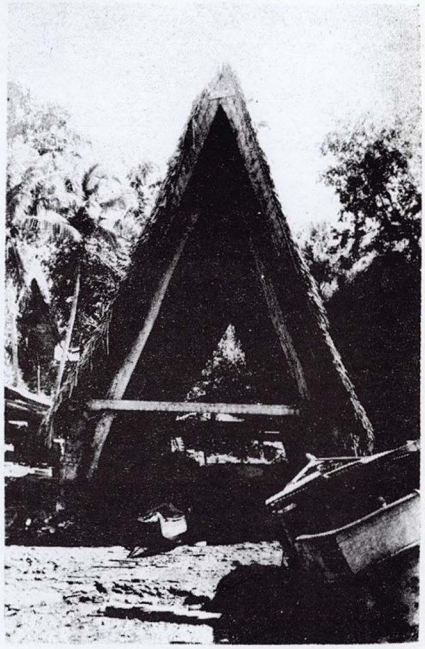
2.ジヤバ島

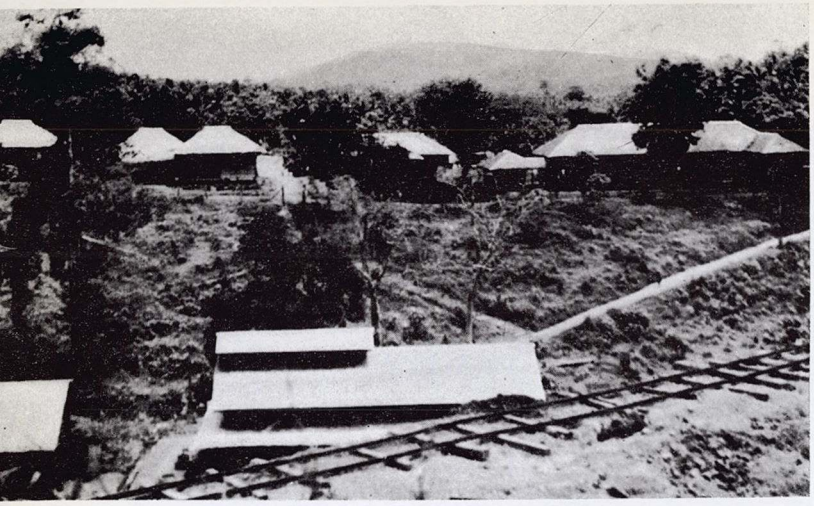
Bataviaの近郊ジョクジヤにある王候の城跡土地ではこれをタマン・サリ(花の庭と言つて居る。

4.バラオ島の舟小屋



3.タマンサリの遠望





ヒリツピンの日本家屋
石原産業・夏刈鐵夫氏撮影

ヒリツピン
（米　領）

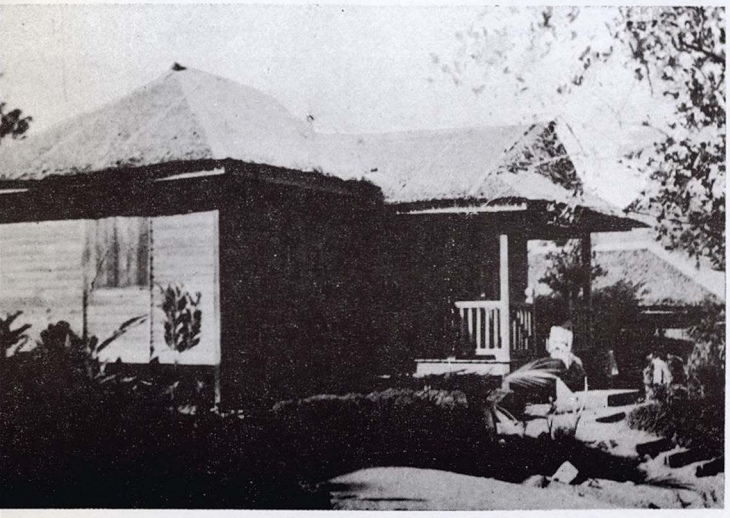
1.ヒリピンの日本人家屋

石原產業經營の社員用住居其の他の集團建築である。氣候風土と土地の衞生課の許可標準に合致させたもので殆んど内地の建物と外觀は似て居るが細部に就いては土地の風土に合致した構法が採られて居る。



2.會社の鐵山事務所の一部

内部は床面に混凝土を打つたあたり内と同樣なるも週圍に於ける葺下の部分の大なる事は炎暑とスコールに對する自然の要求からである。



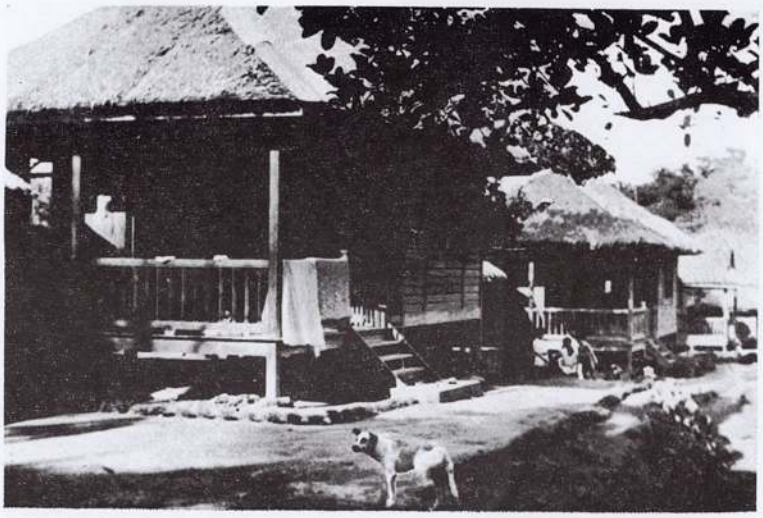
3.住家の標準型

濕氣と防虫等を考慮して床は總て高く作られ床下の通風を充分に考へられて居る。主要木材はチークの一種でグリン・チンカワン等と言ふ虫害を受けないものを使用する。浴室と便所は通常別棟にされて廊下で連絡されてゐる。窓は比較的小さく入口の右には應接があつて來客も家族の者も此處が團樂の中心である。



4.

屋根は方形小屋日本の棕梠の葉に似たアタツプ又はニツパと言ふものを編み内地の茅葺の様に葺上る。



5.

深い出軒、高い床そして外周に手摺を廻らし階段を利用して昇降等如何にも南國らしいのんびりした氣持が建物の上にも窺はれる。

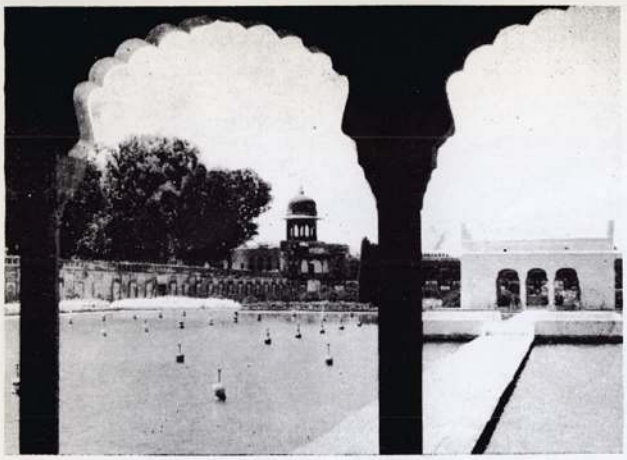


6.

極端に開放された窓、部屋の一部がベランダの役目を果して居る。

イ　ン　ド

日本の約九倍の面積を有するインドは國と言ふよりは寧ろ大陸に近い、そして緯度は28度間に亘つてゐるから唯暑い燒けつく樣な處のみと思つてゐるインドにも千古溶けざる氷雪に埋れてゐるところもあるし、春夏秋冬程よくめぐり來るところもある。然し旅行するのは殆んど暑い處である。



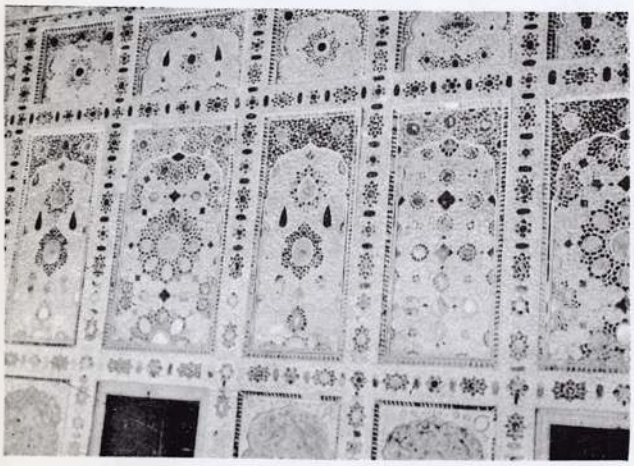
1. シヤラマー園



2. ワジルカーンモスクのミナシ



3. パトシヤイマスジツト

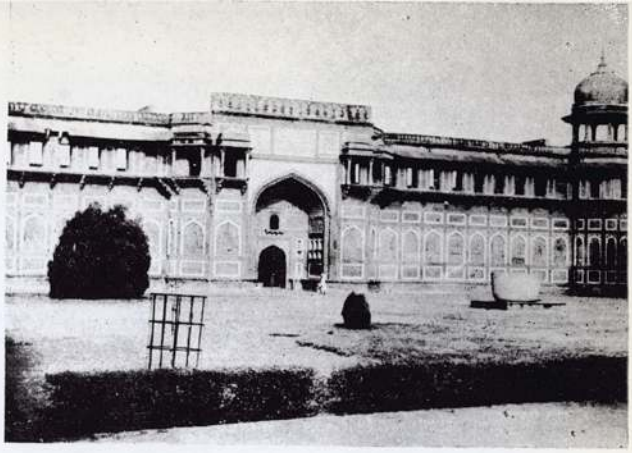


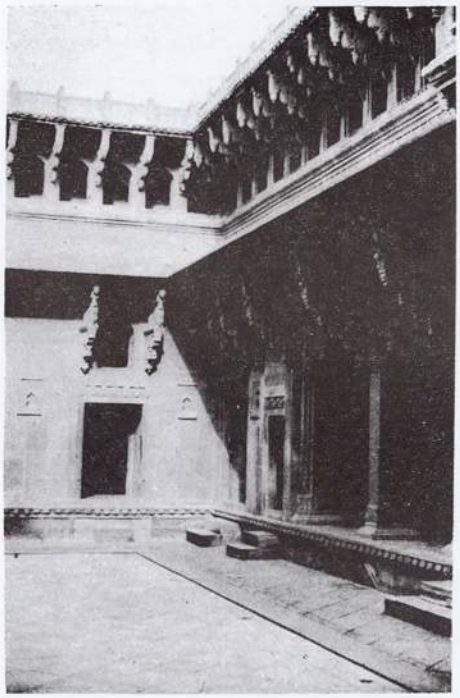
4. ラホール城内シツシマハールの壁面

北印度の建築について

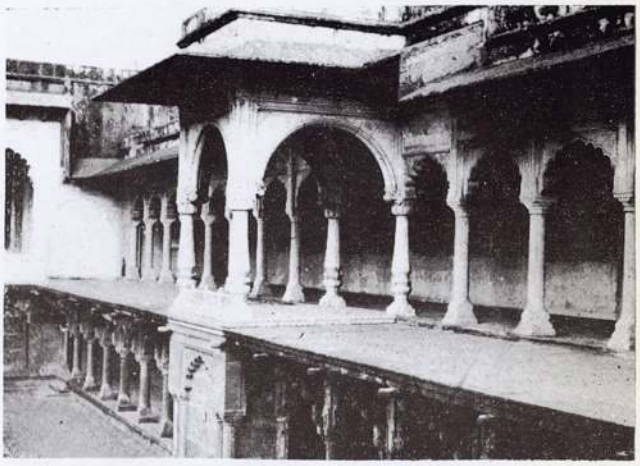
谷一東氏撮影

5. マ グ ラ 城



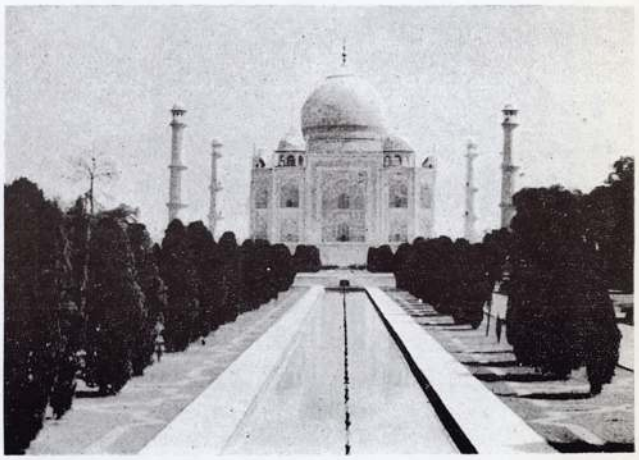


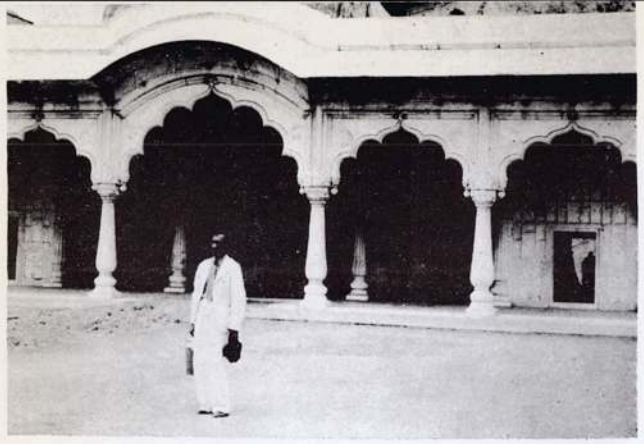
6. ジヤハンギリマハル



7. マチチバーワン

8. タジマハール

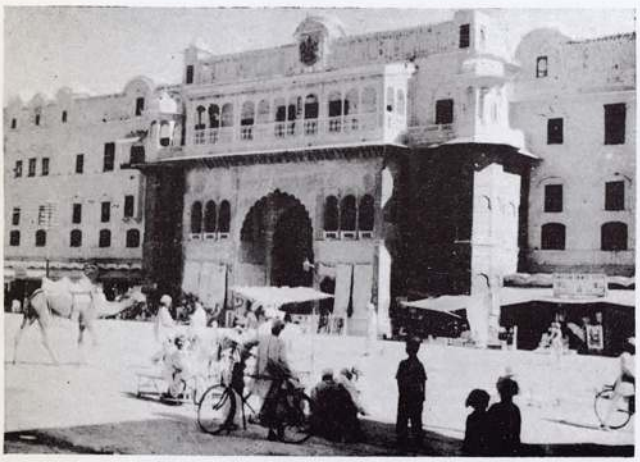




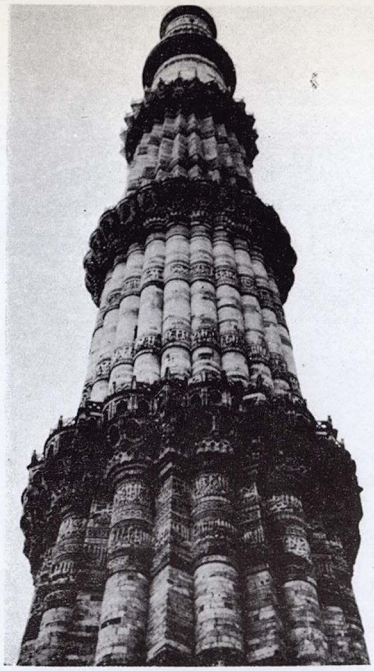
9. デリー城内の一部



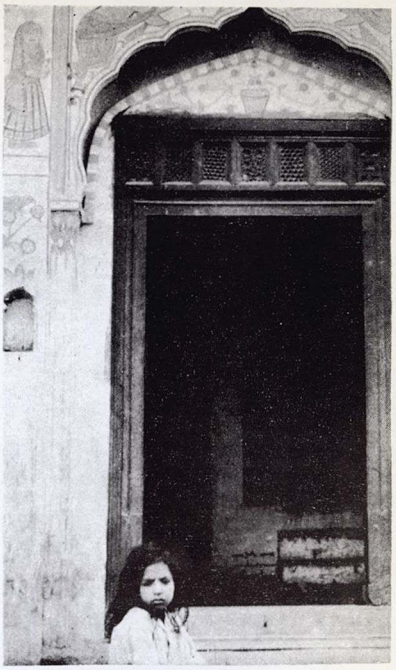
10. フマユン帝の廟



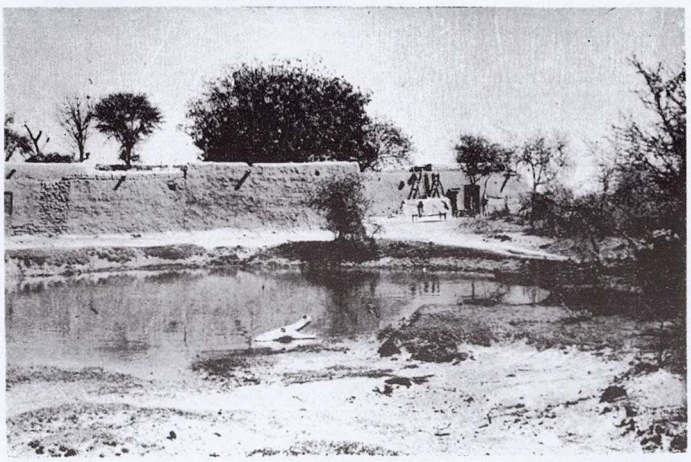
11. パテイアラの城



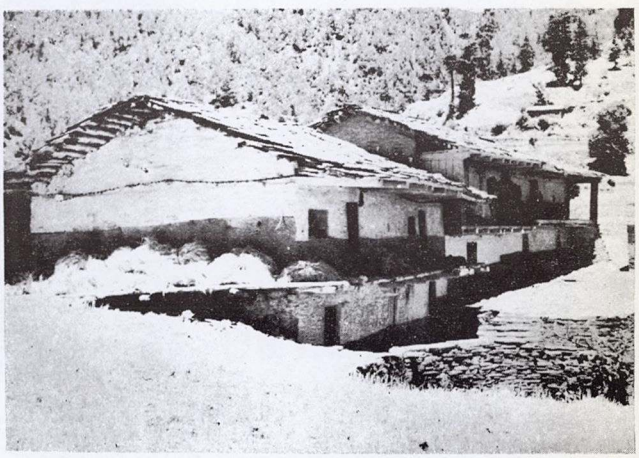
12. クタブミナール



13. 町中の住宅の人口



14. パテイアラの農村の民家



15. チヤイルの農家



寧樂屋家具裝飾店（ナラヤ）

大阪市西區南堀江通1丁目43番地
（木綿橋電停前）
電話堀川 ㊸ 2663・7932

専賣特許　便利な

ラス・モザイク

塗料化されたる
明日のタイル



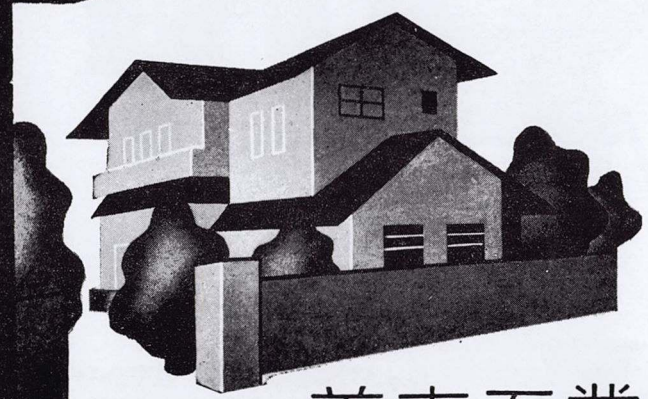
大阪・大鐵映畵劇場　食堂　ラスモザイク施工

日本陶織株式會社
大阪市東淀川區豊崎西通3丁目
電話豊崎㊲1388番カタログ贈呈

美素

新築住宅にお手入のいらぬ！
古い住宅も新築同様となる！

【カタログ贈呈】



新築家屋美素加工
新築落成と同時に本所獨特のビソ液にて洗淨し木材變色の原因となる樹液を取り，其の上をビソにて仕上の加工をすると完全なる變色防止加工となり，優美な艶を有しフキコミの勞を省き頗る經濟的です。

古家屋新裝美素加工
古家もビソ液で洗淨すると新築同樣となり其の上を新築美素加工と同樣の加工をすると前者同樣の結果となる。
（特種技術を要しますから弊所の請負加工と致して居ります）

美素工業所

大阪市天王寺區東平野町四丁目二一
電話天王寺(77)四〇〇三番

ノボ アルミナセメント

超高級　耐鹹 耐寒 耐火

六時間コンクリート

大阪窯業セメント株式會社

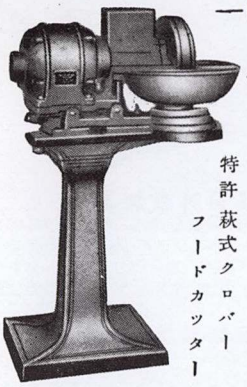
6 HOURS CONCRETE

1:2:4 水比 65 6時間 217kg/cm² 28日 410kg/cm²
1:2:4 水比 45 6時間 300kg/cm² 28日 580kg/cm²

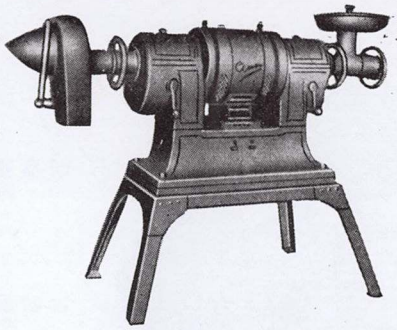
施工6時間後
完全使用が
出來ます

厨房設備ノ合理化ニ
クロバー調理機械器具ヲ

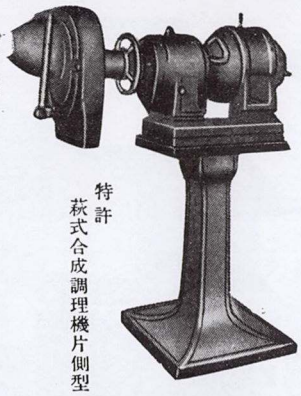
—(團體炊事用)—



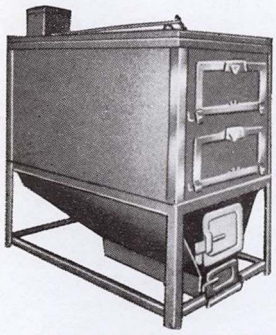
特許萩式クロバーフードカッター



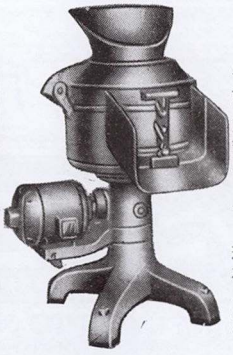
特許 萩式兩側型合成調理機



特許萩式合成調理機片側型



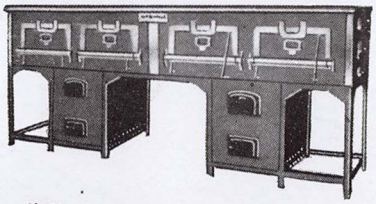
特許 萩式魚燒器(木炭焚)



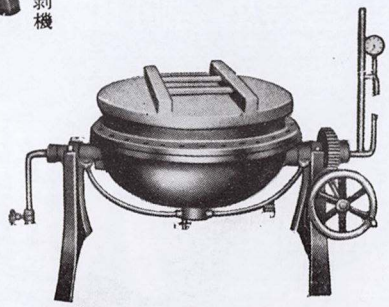
特許萩式クロバー球根皮剝機



特許 萩式クロバーフライヤー
石炭焚



特許 萩式魚燒器(石炭焚)



特許 蒸汽煮炊釜

萩工業貿易株式會社

本　社　東京市京橋区銀座西 七ノ五　電話(銀座) 1692・4695・5418 / 7439・8343・6465
出張所　大阪市南区順慶町通 三ノ二八　電話(船場) 2572・5251
工　場　東京市大森区堤方町 一八七　電話(大森) 7779・9439



9　パラパット部落のペパイ

内南洋と云ふのは、蘭印や佛印やフヰリツピンを外南洋といふのに對して、我が南洋委任領諸島を指すのであつて、赤道から北緯22°、東經130°から175°に渉る南太平洋の廣い水域に散在し、普通ミクロネシアと呼ばれて居る通り、極めて細かい島々の集りで、島の數600餘を合せても面積で東京府に漸く匹敵する程度である。この內北部にあるものをマリアナ群島、南部の東にあるものをマーシヤル群島、南部の中程から西にあるものをカロリン群島と云つて居る。

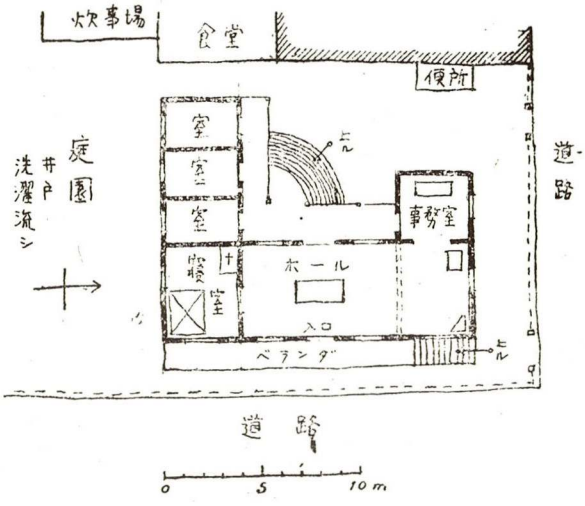
私は昭和13年夏、これ等群島の內マリアナ群島中のサイパン島、西カロリン群島中のヤツプ島パラオ島を訪れたことがあるので、內南洋の建築と云つてもたゞ上記三島の建築的見聞を記して參考に供し得るに過ぎない。

サイパン島の建築

この島は群島中北に位し最も內地に近い關係上著しく內地化されてゐるが、尙島民固有の建築も見ることが出來る。島民は大部分所謂チヤモロ族に屬し、その生活程度も所謂カナカ族に比して高く、遠くイスパニヤ領有時代イスパニヤ人の血を享けたものが多いと云はれてゐるので、その生活樣式、建築樣式も上流は勿論中流でも歐風を思はせるものが多い。（南洋群島の島民を便宜上二つに分けてチヤモロ族とカナカ族とにするが、人種學上の根據によるものではない）。

第1圖はガラパンの町にある上流に屬する住宅のプランで、先づ道路から門を入るも東向正面一ぱいにベランダあり。そこからホールに入る。こゝは居間兼客室で廣さ約5m×8m。壁紙貼り。天井同じく紙貼り。中央に大机一つ。この室は右の間仕切壁を打拔いて擴げられ、そこに大型ラヂオ一臺、三角飾棚一つを備ふ。この部分は一般には主人事務室に當てられるのであるが、この家では事務室は右翼に增築されてゐる。ホールの左に主人、夫婦寢室あり。寢臺一つ、隅に聖壇あり聖母像を祀る。裏に廊下あり。右翼の3室に連絡する。これは息子夫婦及家族の寢室に充てられてゐる。食堂及び炊事場は裏庭に別棟になり內地式の木造バラツクである。

本屋の構造は大體木骨コンクリート造で、まづ鐵木と呼ばれてゐるチークにも比すべき良材で軸部架構を造り、床は地面より150cm乃至200cmの高さに鐵木の厚さ5cm乃至6cmのものを張り、床下は開放して空氣の流通をよくし、物置、水浴場等に使用す。壁はこの木造骨組を心にして、厚さ約60cmか70cm位に珊瑚礁石灰岩塊と石灰モルタ



1チヤモロ族上流住宅の一例

※ 筆者は工學博士京都帝國大學教授

ルとの粗製コンクリートを打つて造るから一見建物全體は煉瓦造かコンクリート造のように見える。この壁面はベランダによつて日光の直射を避けてゐるので室内は比較的涼しいやうに思はれるが、幾分吸濕性又は露を保つ性質を有するのであらう、馴れない内地人が住ふと風邪を引き易いと云ふことである。屋根は簡單な小屋組に比較的緩傾斜（4寸勾配位）の亜鉛引鋼波板葺の四注屋根である。出入口、窓は蝶番式開放機構のもので、その他の細部は大體粗末なコロニアル風である。

第2圖は中流のチヤモロ族住宅。中央にホールあり、その左右に小室をとること一般の形式の通り、右小室は夫妻寝室、左小室は壁をはづしてホールの延長とす。この家の特色はベランダの一部を改造して食堂炊事場とせることで、大きな進歩である。構造は前述のものと殆ど同様。

第3圖は下流住宅の一見本で、木造板張（但し軸部主材な鐵木で非常に立派である）。タコの葉葺屋根の簡單な建物である。床も低い。こゝに主人夫婦、老母、娘二人住ふ。

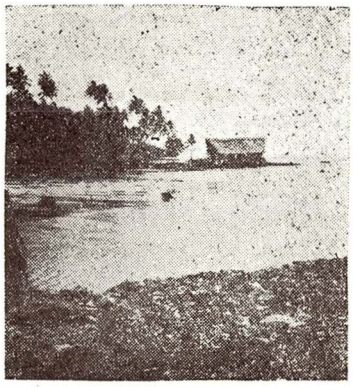
尙ガラパン町の海岸には島固有のカヌー小屋も殘つて居るが説明は省略する。

ヤツブ島の建築

ヤツブ島民は所謂カナカ族で、群島中最も内地化が遲れてゐるので、島固有の建築技術もよく保存されてゐる。社會生活が簡單であるから、建築の種類は極めて少ない。即ち、タビナウと呼ばれる住宅と、ペバイ及びファリウと呼ばれる男子集會用の建物とが全てである云へる。



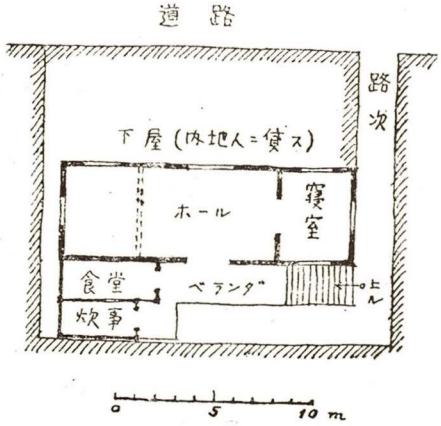
4、サイパン島民上流家屋の玄關



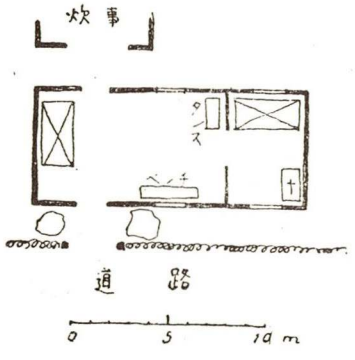
5、ウギリ村オネアン部落のファリウ遠望

住宅に就ては既に「建築學研究」第92號に「ヤツプの家」と題して紹介して置いたから、こゝには省略して、ペバイ及ファリウに就て述べよう。

ペバイとファリウは共に男子の集會用の建物であるが、その區別は必ずしも明瞭ではない。自分の見聞では、大體ペバイは各部落の長の會合や長老連の社交場に用ひられ、ファリウは集團的沖漁業に從事する若者連の爲に設けられてゐたものゝやうである。それでファリウは直接海に接するか或は海中に突出した珊瑚礁基壇の上に建てられるのが普通であるが、ペバイは屢々海から離れた所々も建てられる（第5圖）。從つてファリウは風當りが強いので普通住宅に見るような軒下の濡縁部分がなく基壇の端の軒受柱に壁を付けて風を防いでゐるが、ペバイは普通外壁がなく開け放しのものが多いのである。

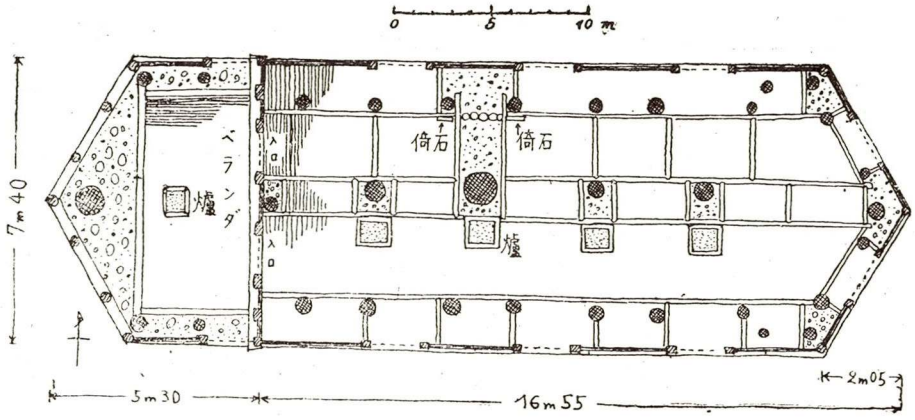


2、チヤモロ族中流家屋一例



3、チヤモロ族下流家屋一例

先づファリウに就て、ウルゝ村オロオのものを例にとつて記さう。第6圖はその平面圖で全體が龜甲形六角形をなす迄は住宅と同じである。先づ珊瑚礁、石灰岩の壇があつて、その端に沿つて外壁がある。このオロオのファリウには前面にベラ

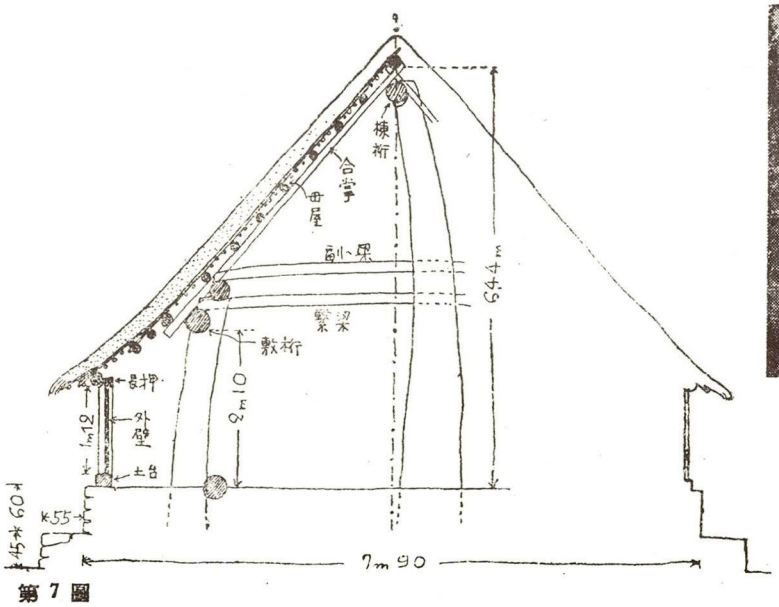


第 6 圖

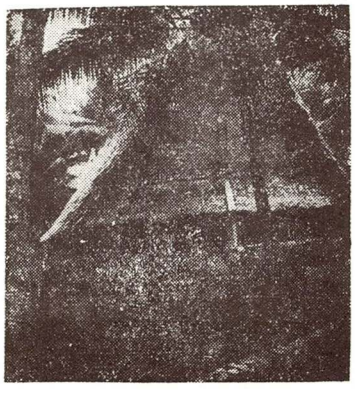
ンダが設けてあるが、これは特別の例で一般にはベランダは住宅にだけ用ひられる。内部は間仕切のない廣間で、床は長軸に平行に檳榔樹の丸太を置いて五つの帶狀の部分に分たれる。そして大部分檳榔樹の丸身板で敷かれ、柱のある部分は砂利敷である。爐が内部に4箇、ベランダに1箇何れも大さ40～50cm角位である。

構造は大體住宅と同じで、荷受柱はすべて掘立てであり、壁をつける柱と軒を受ける柱だけが土臺の上に立つ。中心軸線に近く位置する一列の柱の頭に棟桁が取付けられ、兩側、壁の線より少し後退して、それぞれ一列に並ぶ側柱の上部には敷桁が取り付けられ片側の敷桁から他の側の敷桁へ繋梁が架けられ連絡される。取付けは柱を少し缺き取つて梁を嵌め込み、椰子繩を卷き付けて結ぶのである。この椰子繩は極めて美しく模様に卷かれ、重要な裝飾になつてゐる。この棟桁から敷桁に合掌が取付けられ、その上に母屋棰か取付けられる。柱の材は「たまな」桁はコヽ椰子丸太、合掌はマングローブが普通で、母屋は細竹を數本、棰は3本を束ねたものを用ひる。この上をタコの葉（普通はニツパ椰子の葉）で葺き上げる。

外觀は大きな配匂の急な單一な屋根がかぶさつて、壁が低いからまるで屋根の建築である。妻はこのファリウでは簡單にタコの葉で蓋つてあるが中には檳榔樹の細枝を編んだ組紐で美しく蓋つた



第 7 圖

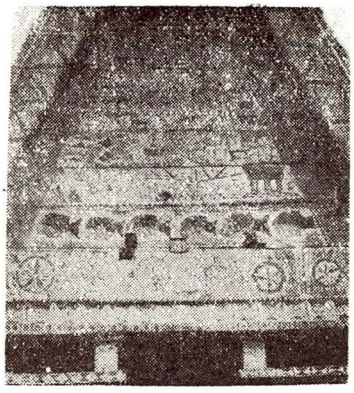

8、オカオ村クガイ部落のベバイ、妻桁に模樣裝飾が見える



10、マツプ村ウエロ部落フアリウの破壊した姿、堀立の荷受柱だけが殘る。



12、アルコロン村マガラン部落のアバイ外觀。妻の壁面に見へる二つの突起は女身像を取付ける臺



13、アイライ村アイライ部落アバイ東側妻の裝飾

ものあり、庇上の桁や破風に簡明な幾何摸樣の彩色彫刻を施したものもある。その摸樣の幾つかには舊獨逸領時代の香も感じられる。

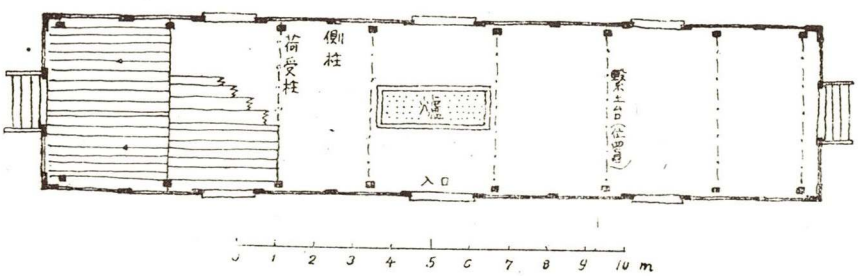
ペバイは同一部落の中では一般にフアリウより大きいが、構造や平面に於てはフアリウと同じだと云へる。ウルル村ヴラヴツトのものは島內最大のもので、その妻に窓を有つてゐる等は全く異例である°（第9圖）

これ等の建物は今でも島民の集會や晝寢やお喋舌の場に利用されてゐるが、保存を構することもしないし、新築されることも少ないので、全島いたる處の海岸に傷々しい殘骸が見られる。

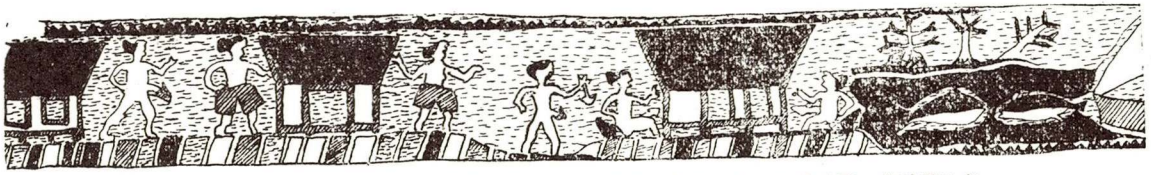
パラオ島の建築

パラオ本島は位置は西南の端にあるが、南洋廳の所在地で群島中ではサイパンに次いで內地の影響を受けることが著しいので、島固有の建築の如きも年々廢滅に歸するものが多い有樣である。この島の土着民もやはりカナカ族に屬するが、その建築型式はヤツプと同じではない。島固有の建築の主なものは、ブライと呼ばれる住宅、バイと呼ばれる集會所（普通接頭語？　をつけてア・バイと云ふ）ブルル・ア・カリヅと呼ばれる神祠、デイアンゲルと呼ばれる舟小屋である。先づ集會所の建築を見よう。

アバイの平面は正しい短形で、大さはコロールやマルキヨクのような大部落のものでは5m×20mに近いものもあるが、小さいものになると3m50×14m30位のもある。內部は間仕切のない單一な廣間で、床は高く、幅の不揃な厚板を繫土臺から繫土臺へ張り渡して造る。所々に三角形の穴があつて、そこから地面へ唾をはいたり小便をしたりする。中央に爐が一つ（或は二つ）地面から基礎を築いて設けられる。設備としては爐の他に各荷受柱に簡單な棚が取付けてあるだけで、その棚にはアンペラや枕を置くのである。四周壁上に細長い明け放ちの窓が設けてあるから、ヤツプの集會所に比べると遙かに明るいが、それでも軒が低く垂れ下つてゐるので快い薄暗さを保つてゐる。

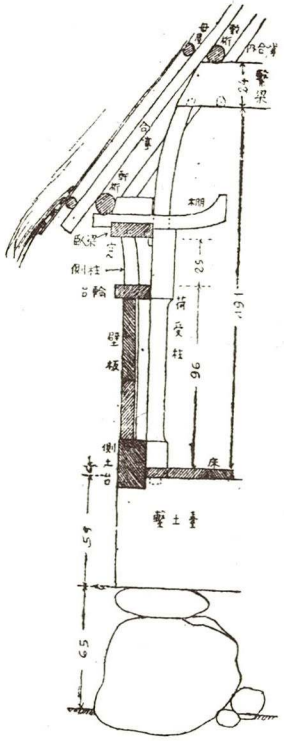


11、アバイ平面圖



15、オギワル部落アバイ裝梁側面の裝飾、繪、彩色、斜線は赤、黒塗は黒、白は黃土色

外觀はやはり屋根が支配的で、それは大きな單一な切妻屋根をなし、棟の長さは軒の長さよりも少し長く、やゝ中だるみになり、普通「たこのき」又はニツパ椰子 葉で葺き上げてある。床は1m20位の高さに上げられ、床下は吹き放ちになり、壁は1m位の低いもので、上部軒桁迄窓になつてゐる壁をつける柱は普通黒く塗つてあるが中にはそれに黃白赤の塗料で鷄等を畫いたものもある。兩妻は中央に高さ1mにも達しない入口があり（入口は側面に設けられる）妻の三角形の部分は横羽目板張になつてゐて、それに傳承說話が彩色浮彫で表してある。昔はこの入口の上部に女の丸彫裸像が置かれてゐたのであるが、獨逸時代に殆ど全部取外して今は殘つてゐない。破風板も折線横模様等で美しく裝飾されてゐる。



14、アバイ側面矩計

構造の大要、屋根は葺葉を 1m50位の長さの割竹に綴ぢつけた葺材料を垂木に密に括り付ける。垂木は2本の竹を束ねたもので、マングローブ丸太の母屋に取付き、母屋は合掌の丸太に椰子繩で取付けられる。合掌の下には屋根面に沿つて十文字に斜材を取付けて歪を防いでゐる。この合掌は下方で直接に敷桁に取付き、上方では棟桁の上に交叉する。この敷桁は外方に推し開かれないやうに直角に交る繫梁の上に固定される。繫梁は23cm×9cm前後の角材で兩側面の荷受柱の上に乘り、室の中で最も目立つ位置にある。それでその梁の側面には又傳承說話を彩色浮彫にして、室全體の裝飾効果を集中してゐる。第15圖はその梁繪の一例である。小屋組はこのようにして下部構造に結合されるのであるが、これだけでは未だ棟桁を支へるものがないし、小屋組もしつかりしないので普通合掌の下端に母屋に平行に內母屋を取付けそれを內合掌で受けて、小屋組全體を固め內合掌の交叉する上で棟桁を受ける。この內合掌の尻も亦敷桁に取付けられる。新しく建つものはこの內母屋內合掌を廢して棟桁を繫梁から立てた束で受けるものもある。（マルキヨク部落新アバイ）

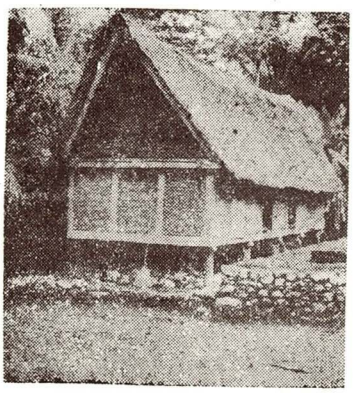
扨て軸部の構造になると、こゝもでヤツプに於ける如く、荷受柱と壁を付ける柱とが全く別になつてゐて、荷受柱は兩側面に平均 2m50 位の間隔を保ち、繫土臺の上に枘差にて立つ。この繫土臺は「たまな」の大材を用ひ、その寸法の一例は大きなもので 56cm×16cm（マルキヨク部落）、98cm×18cm（コロール部落）に達するものもある。そしてこの繫土臺が安山岩の玉石の基礎の上に乘つてゐるのである。荷受柱は上方で少し內方に彎曲し、前に述べたようにその頭は繫梁で相對する柱同志連結されてゐる。それであるから繫梁と二つの荷受柱と繫土臺とで一つの棟の線は直角な短形ラーメンを構成し、これが構造單位となつて幾つか（多くは7個）併列して室空間の骨組を造つてゐる。これ等のラーメンは互に直角の方向には、上方で敷桁によつて、下方で側土臺によつて連結されてゐる。こんな構造であるから大きな屋根面に少し強い風が當ると容易に倒されるので、今では外側から支柱を當てがつてゐるものが多い有樣である。



外壁は柱と柱の間に厚板を横に嵌め込んで、床から高さ1m足らずに達せしめる。この側壁は前述の荷受柱とは全く別で、繋土臺に端で直交する側土臺の上に立つ、間隔眞々1m50乃至1m90であるから、荷受柱と位置が一致しないのである。柱は上部で外方に轉び　壁の上端であたる所で大きな臺輪によつて互に連絡され、尙頭部も臺輪と同じような臥梁で固められてゐる。側面に入口が二箇又は三箇あり、その部分では臺輪が中斷されるが闕が、土臺から25cm位上るから、入口高さは結局1m位である。この外壁のシステムは下方で繋土臺の上に乘ると共に、上方では壁に直角な棚板が荷受柱に取付き、その外端が丁度臥梁に鉄き込んであるから、これだけで固定してゐる譯である。柱間の數は9乃至15で11のものが最も多い。妻の部分は3間である。

以上で建物としてのアバイの大要を知つていたゞいた事と思ふ。住宅に就いては述べる餘裕がなくなつたので、アバイと比較して要點だけを擧げて置かう。平面は矩形單一廣間で、床は一部分板張り、一部分は丸竹を敷きつめてある。構造のシステムは集會所のものと同じであるが、基礎は普通玉石を用ひず掘立の束建てである。各構材もすべて細くなる。壁のシステムに於ける柱間は5又は7(稀に9)で5間のものは入口が2箇、7間のものは3箇あり、何れも側面のみで妻には入口はない。壁は板ではなく、普通「たこのき」の葉を竹に綴ぢ付けたものを水平に積み重ねて、厚さ10cm以上にも切り揃へてあるから美事である。妻の三角壁の部分もこの壁を用ひてある。壁上に横長窓は取らない。採光通風は專ら入口のみによるのである。勿論夜は入口に戸を立てるが、それは竹を縦横に組んだ簡單なものである。屋根は集會所のものと同じであるが、小さいだけに構造は簡略にせられ、繋梁の裝飾等はなくなる。又棚板もない。裝飾らしい裝飾はたゞ妻に於て下部壁面と上部三角形壁面とを別つ梁に簡單な彫刻を施す位のものであるから、少々貧弱ではあるが清楚?でもある。

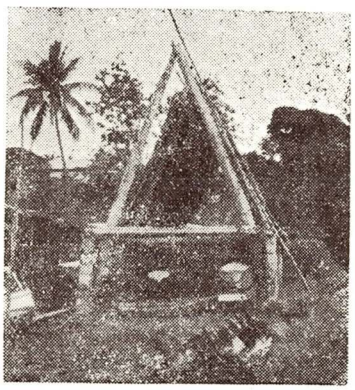
神祠は獨逸領時代に舊信仰を捨てたと同時に荒廢して今は全パラオ諸島中に僅かに二三を殘すのみである。極く小さいものでコロール村アラバケツ部落にある一例では1m80×2m50である。外觀や構造は、柱間正面三間側面二間で、窓がない點



16、アルマロン村マガンラン部落の一住宅、前庭に見えるは家族の墓である



17、ペリリウ島ガルドロゴ部落の神祠



18、コロール部落のカヌー小屋正面兩脇に人像柱を用ふ

を除けば建築的にはアバイとほゞ同様である。

カヌー小屋はパラオに於ては他の群島に比して大きく立派である。こゝでは寫眞でその一例を示して說明を省略する。構造は簡單であるが、二三種を數へることが出來る。

以上甚だ繁簡度を失した所が多いが、內南洋の建築に就てその外見上の事項を大要述べて來た。こう云ふ未開文化の建築はその外見上の、しかも粗雜な叙述だけでは意味をなさないことは明かである。詳細な記述には又別の稿を期待したい。

（昭和16年6月25日）

「建築學研究」續刊の辭

今回萬止むを得ない事情によつて日本建築協會は「建築學研究」の刊行を廢せられる事になりました。由來純學術研究雜誌の育たないと云はれる關西の地に於て、昭和8年（第69號）以來「建築學研究」誌を維持育成せられた日本建築協會の高邁な指導的精神には我々感謝致して居る次第であります。

我々この雜誌が昭和2年京都帝大建築學教室に生誕して以來最も深き精神的つながりを有する同志は再び志を堅くして、建築學研究會の名のもとに「建築學研究」を編輯刊行して行かうと致して居ります。

雜誌の內容は「建築學研究」の使命とした處の廣き視野を持つそして汎く開放されて研究發表機關にふさはしきものとし、又一面學苑と實務界との間の技術智識の交流に資すべき諸資料欄の再擴充並びに技術者の再教育を目ざす諸講座の開設により、我々はこの雜誌を通じて、日本の建築文化の發展、建築技術者の智識及技術水準の向上のために働きたいと考へて居るのであります。「建築學研究」をして少くとも關西に於ける建築學及技術の修練道場たらしめんとする我々の意圖は必ずや若き世代の建築技術人の共感を得るものと信ずるものであります。

京都帝國大學工學部建築學教室內
建築學研究會
（購誌希望者は建築學研究會へ直接御申込あれ）

南方共榮圈内の建築設計に就て

東畑謙三※

1

常夏の國には建築は發達せない。人の生活は總て自然にまかせ切りだから，自然の氣候はいつも人間の體溫より僅かにひくい位だから寒さを防ぐために家屋を設けて適當な屋内氣候を創る必要もなければ、更に進んで種々の衣裝を身につけて肉體を保護する必要もない。身に簡衣をまとふのみで一年中すごせる。よごれたら小川ですゝぎ强烈な太陽にあてれば僅かな時間で立派なクリーニングが出來る。家には衣裝をしまふ押入もタンスも無くて良い。山野には年輪のない草木が繁り何時でも美果が實る、食べたくなればいたるところヤシヤバセウの實があつて勞せずして食慾を滿してくれる。倉を造つて食糧を貯藏する必要もない、南洋にドリアンと云ふ豐熟な實がある。夏の頃熟して樹より落下した瞬間が最も美味である。その臭氣は一種特有のものでとても鼻持ちならぬものであるが、これになれるとゝてもわすれられぬ香となるそうである。土人は之れを天來の美果として珍重し、これが實る頃にはその樹下に簡單な屋根を創り數日をねころび熟して落下した瞬間をまちわびるのである。建築が自然に對する瞬間の防備組織であるならば、こんな常夏の國では發達しようがない。同じ文明のおくれた國でも蒙古の様な氣候の變化の著しきところ、滿目荒凉たるところでは少き物資を以てしてもあの建築學上高級な住居とも云ふべき蒙古苞が出來た。又萬年雪につゝまれるエスキモーにも土の保溫力を功に應用したドーム式の家がある。

建築は自然に對する防備組織であると同時に又人類の生活を豐富化する過程であらねばならぬ。常夏の國は同時に暑熱の國である。何の努力なしに生活出來るところであるかも知れぬが變化なき暑熱の中にあつても生活に一つの活動をもたらさなければならぬ。

支那事變も世界的な規模に迄擴大し事變の最終目的たる東亞共榮圈の確立の範圍も寒帶より熱帶に迄及んで來た。昔から文明國は熱帶には出來なかつた。したがつて文明の表象とも云ふべき建築も溫寒帶には燦然たるものがあるが、熱帶の建築には僅かに宗教的遺跡と民族的珍奇とこそあれ、近代建築の發達は今尚ほ初期にある様に思はれる。我國の梅雨より夏にかけての高溫多濕の氣候が世界いづれの文明國に比して南方の氣候とよく似てゐる事は、これに試練すみの日本人にとつて南方發展に都合良き事である。又暑熱に打ち勝ち生活の豐富さを創る適當な屋内氣候を得られる様な家屋を建てゝ住みよき常夏の國たらしめる事は我國建築技師の研究の新分野であらう。

私は10年ばかり前の5月中旬ふとした事からシンガポールに2週間滯在を餘儀なくされたが折よく同地は熱帶性氣候の最も特長ある時期であり、又當時は平和な同地方の建築をみてまわる機會を得た。南洋を知つてゐるのは唯だそれだけである僅かに机上に數種の資料があるのみであるが南方共榮圈の近代建築の資料については今迄餘り我國にも知られてゐないのでこゝに二三を紹介する事とした。

2

先づ南方共榮圈の氣候狀態についての統計をみると氣候の三要素とも云ふべき氣溫、濕度、風力、の中で一口に云へば高溫、多濕、無風、しかも四季を通じて、又終日變化がとぼしいと云ふのが特色である。これをその地方の代表的都市とも云ふべき蘭印のバタビヤと海狹植民地のシンガポールとについてみる。第1表はその兩都市の1年中に於ける月別の氣溫濕度の平均であり、第2表は1日中に於ける時間別の平均である。第1圖はバタビヤの氣候をグラフに表はしたものである。即ち1年中で言つてみれば平均氣溫 26°17°C と平均濕度 82.7% を中心として僅少の變化があるのみで氣溫の最低たる2月においてすらも 25,58°C でしかも

※ 東畑謙三建築事務所長

第　1　表

バタビヤ及びシスガポールに於ける一年中の平均氣溫並びに平均濕度

月	平均氣溫攝氏 バタビヤ	シンガポール	平均濕度 % バタビヤ	シンガポール
1月	25.60	24.89	86.5	86.4
2月	25.58	25.66	87.1	82.2
3月	26.01	25.89	85.5	85.3
4月	26.46	26.61	84.5	84.8
5月	26.57	27.22	83.6	84.0
6月	26.25	27.11	82.9	83.1
7月	26.03	27.22	80.5	82.0
8月	26.22	27.22	77.9	81.7
9月	26.56	26.83	77.5	83.0
10月	26.61	26.44	79.3	84.0
11月	26.33	25.78	82.0	85.9
12月	25.85	25.39	84.5	85.8
平均	26.17	26.35	82.7	84.0

第　2　表

バタビヤ及びシスガポールに於ける一日中の平均氣溫並びに平均濕度

時間	平均氣溫攝氏 バタビヤ	シンガポール	平均濕度 % バタビヤ	シンガポール
1時	24.31	24.94	91.2	90.9
2	24.08	24.83	91.8	91.1
3	23.87	24.66	92.2	91.7
4	23.67	24.55	92.6	92.1
5	23.49	24.50	92.9	92.4
6	23.34	24.39	93.2	92.5
7	23.72	24.28	92.0	92.6
8	24.96	24.72	87.2	92.6
9	26.50	26.05	80.3	87.8
10	27.77	27.50	74.2	80.0
11	28.70	28.39	70.1	75.9
12	29.26	29.00	68.3	73.0
13	29.47	29.17	68.3	71.7
14	29.42	29.22	69.0	71.7
15	29.15	28.89	70.1	72.3
16	28.67	28.50	72.1	73.5
17	28.02	28.00	75.1	77.0
18	27.23	27.33	79.1	77.4
19	26.49	26.44	82.8	81.6
20	25.94	25.94	85.4	84.8
21	25.51	25.61	87.2	86.7
22	25.15	25.33	88.5	88.0
23	24.84	25.17	89.6	89.2
24	24.57	25.05	90.5	89.9
平均	26.17	26.35	82.7	84.0

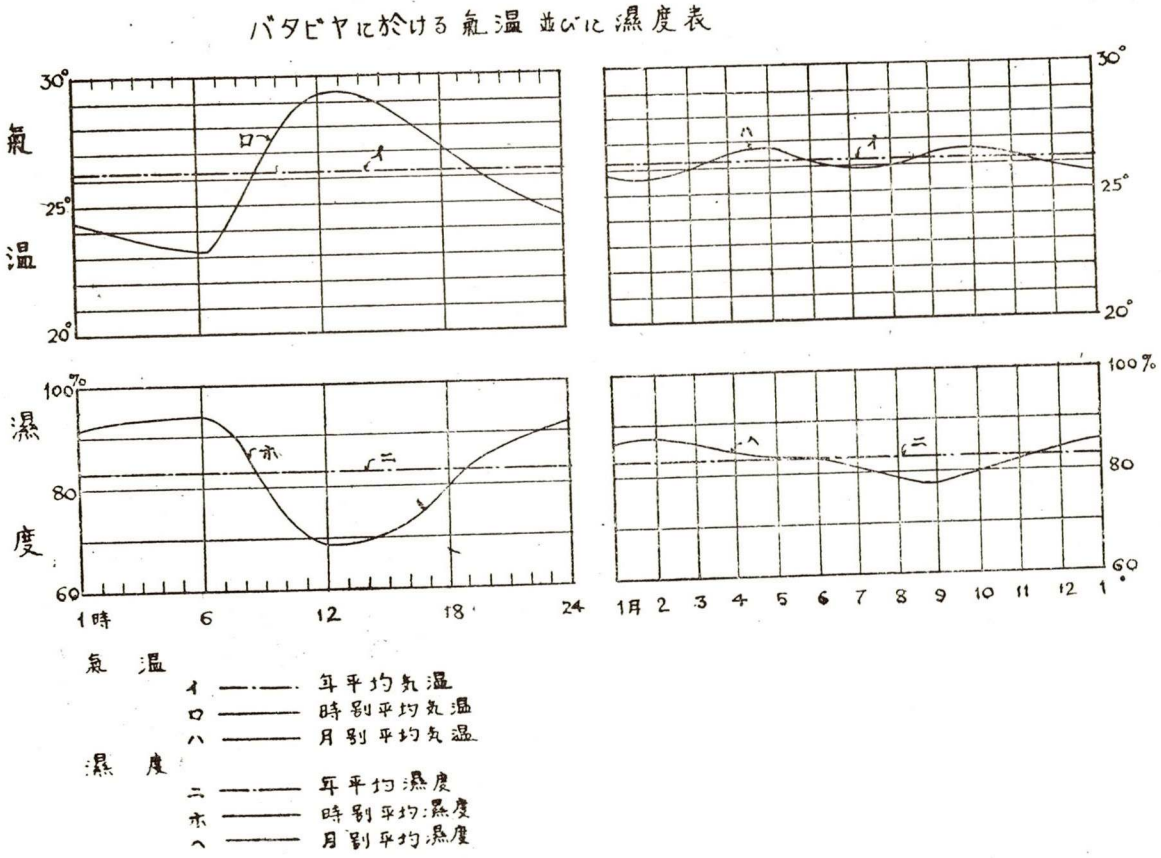
濕度は最高の87%に達し一方濕度の最低たる9月の77.5%のときには氣溫は最高に近く26.56°Cに達してゐて、結極所謂濕球濕度より言へば年中略んど無變化と言つてよい。換言すれば人間の皮膚に感ずる率は年中略ぼ變化がないのである。文字通り常夏の國である。

又一方1日中の平均氣溫をみると午後1時頃最高に達し29.47°Cになり濕度は68.3%になり我國内地で言へば7月中の水田の中を想ひ出す暑さである。午前6時頃には最低氣溫になるがそれでも23.34°Cで、しかもその時刻の濕度は最高の93.2%になる。即ち前にも言つた様に日中には氣溫には若干の變化はあるが人體にあつさを感ずる標準ともなるべき濕球溫度の上より言へば何等の變化もないわけである。即ち三伏の候が過ぎればやがて秋麗の候と云ふ希望もなければ、水邊の夕涼に一日の暑さをわすれると言ふ譯けにはゆかぬ。氣候の快感帶が無風狀態に於て21°C 55%と云はれるが之れに比して非常にかけへだたつた數字である。第3表は太陽が赤道直上を通る3月の完全に晴れた日に太陽光線の强さを光線と直角をなす完全なる黒色面上に於てはかつた毎分cal/cm²である。又第4表は同じく太陽が直上へ來た12時より13時迄の1時間中に於ける完全なる黒色體の水平面上に於ける太陽光線の强さの總和である、物をも燒きつくす暑さである。第1表、第2表に於て我國の内地の夏の日中の氣候35°C 近くに比して割合に低溫であるを思はせるが第3、4表に於てみれば直射光線の强さに於て、はるかに强烈な事がわかる。

次に第5表はバタビヤ及びシンガポールに於ける風向並びに無風狀態の割合である。即ちバタビヤについて言へば、年中常風として顯著なる方向なくしかも無風狀態が1年を通じて4分の1以上に達する。この暑さと、この濕氣の上に風がないのだから全くやりきれぬ。シンガポールはさすが地理的變化の多き場所柄季節風の影響をうけ11月より4月へかけては北東の常風をうけ、5月より10月へかけては南東の常風をうけしかも無風狀態はバタビヤに比してはるかに少るい。ことがわかる第6表は平均風速であるがこゝにもバタビヤはシンガポールに比して風のない事をあらはしてゐる

第 1 圖

バタビヤに於ける氣温濕度の變化グラフ



第 3 表

3月中の太陽光線に直角面に於ける强さ I (cal/cm² min)

太陽の位置(度)	20	25	30	35	40	45	50	55	60	65	70	75	80	85	90
光線の强さ(I)	0.975	0.977	1.033	1.099	1.169	1.183	1.240	1.264	1.323	1.309	1.338	1.344	1.377	1.374	1.366

第 4 表

12時より13時迄の太陽光線の水平面上に於ける强さの集計 (cal/cm²)

月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
强さの合計	86.0	85.7	83.7	79.7	73.8	71.3	71.5	75.8	78.8	78.3	83.6	81.7

3

氣候の大要は以上の様であるが之れを建築的にどう考へてゆくか。まづ屋根　第3、4表に明かな如く太陽光線は非常に强烈である故にその副射熱を屋根面に吸收さすわけにはゆかぬ。大體藥のかかつた白色陶器は30%吸收70%反射、又日本瓦の如きものは90%位迄吸收と云ふ事になつてゐる故に南洋方面の瓦は反射の多い藥かけ淺色葺が適當

第　5　表

バタビヤ（バ）及びシンガポール（シ）
に於ける風の方向並に無風狀態の割合

月	場合	風向								
		無風	北	北東	東	南東	南	南西	西	北西
1月	バ	26.5	12.0	4.7	2.1	4.·	7.2	8.4	17.1	17.(
	シ	1.4	7.9	74.6	4.0	0.8	2.3	0.7	3.1	5.2
2月	バ	30.1	12.9	4.97	2.7	4.7	6.7	7.3	13.3	7.(
	シ	1.9	5.9	71.6	9.9	2.2	2.2	1.3	2.3	2.7
3月	バ	28.3	11.4	7.1	5.2	7.5	8.(	8.3	12.·	11.2
	シ	2.0	7.2	58.6	13.3	2.6	3.'	2.4	5.6	5.'
4月	バ	29.0	9.8	14.1	11.2	10.8	10.5	5.2	5.1	4.3
	シ	11.1	6.6	27.8	11.5	8.5	7.5	7.9	13.(	5.5
5月	バ	30.0	9.0	16.3	15.1	12.4	8.1	3.1	3.5	2.5
	シ	8.(	5.7	10.(	8.5	16.2	20.1	11.(	15.1	3.6
6月	バ	30.0	9.4	17.2	16.0	13.8	8.2	2.2	1.7	1.5
	シ	8.4	4.5	3.4	5.3	23.9	29.4	0.9	10.·	3.8
7月	バ	26.3	10.4	18.2	16.·	15.0	8.7	2.0	1.·	1.(
	シ	3.5	1.4	1.1	4.5	40.·	36.(	6.4	4.7	1.·
8月	バ	22.9	12.5	19.7	15.6	14.(	9.9	2.1	1.1	1.(
	シ	4.2	2.(	3.0	8.6	38.0	23.9	8.0	4.1	2.(
9月	バ	23.5	16.9	10.3	12.2	2.9	11.3	2.(	1.7	2.6
	シ	6.5	2.3	2.3	2·.·	21.5	33.3	13.3	0.3	3.1
10月	バ	25.5	16.3	13.4	9.2	11.6	13.6	4.·	2.8	3.2
	シ	8.2	9.6	5.7	4.1	7.7	19.5	14.4	21.1	10.7
11月	バ	25.9	14.·	8.7	7.0	9.0	14.1	8.1	7.4	5.4
	シ	5.2	11.7	22.9	3.8	3.5	6.0	10.2	21.0	15.7
12月	バ	25.2	11.0	5.0	3.(	6.2	9.5	10.3	16.8	12.·
	シ	3.7	25.3	38.3	3.·	0.(	3.8	2.5	12.1	10.3

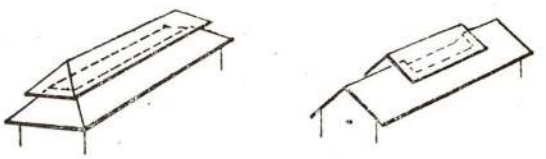
第　6　表

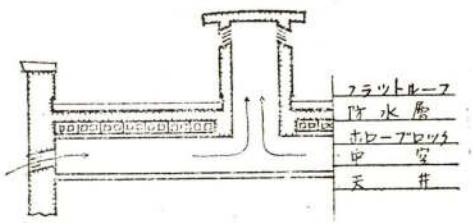
バタビヤ（バ）及びシンガポータ（シ）
に於ける平均風速

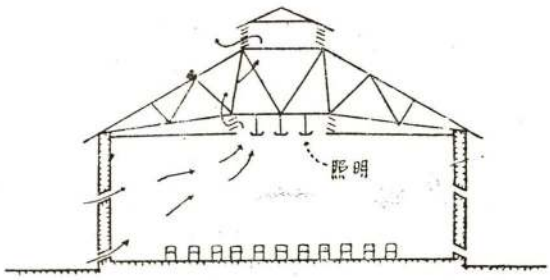
月	場所	平均風速　米/秒							
		北	北東	東	南東	南	南西	西	北西
1月	バ	1.52	0.92	0.59	0.51	0.52	0.84	1.32	1.75
	シ	3.57	4.52	3.·8	2.75	2.95	3.59	3.68	3.46
4月	バ	1.52	1.77	1.50	0.73	0.53	0.82	1.51	1.51
	シ	3.17	2.58	3.10	2.14	2.43	3.70	4.09	3.30
7月	バ	1.58	1.62	1.54	0.79	0.62	0.74	1.01	1.09
	シ	1.99	1.88	2.22	2.25	3.97	4.24	4.57	2.34
10月	バ	2.07	1.82	1.60	0.8·	0.59	0.87	1.50	1.39
	シ	2.47	2.56	1.95	2.43	3.10	3.91	4.50	2.67

である。又屋根面の保溫量を少しでも少くするために量の多いものや、葺土等で屋根をかためることは夜間の熱の發散に都合がわるい。實際シンガポールでは下地に柿板葺をしてその上に樺色のきわめて薄平の藥掛引掛棧瓦を使用してゐる。毎日時をきめてくる猛烈なスコール、文字通り盤を引くり返した様な夕立が來たりやがてわすれた様に晴れわつて燦然とした太陽が照る。あの不完全な屋根でどうして雨洩りがないのだらうと思はれる様な輕快な瓦である。事實しらべてみると柿板迄相當の雨洩りがあるが後の日射によつてその濕氣は蒸發してしまう。日本式のわら屋根が雨で濕氣をふくみそれが日射によつて蒸發し、その蒸發熱をうばふためにかへつて屋根裏が冷くなると同様に少々の雨水の浸入が少しでも屋根面の暑熱を少くする様に思はれた。

屋根面と天井面との間の空間を密閉してはならぬ。常に空氣の流動を保ち然もその氣積を出來得れば大きくせなければならぬ、即ち天井と軒下には必ず空氣の導入口を設け屋根面には排氣孔を設けなければならぬ。臺灣、琉球とちがつて暴風雨の少いところだから屋根面の空氣抜は大たんにする必要がある。第2圖は近代建築に採用されてゐる屋根面換氣の二三の例である。上の二つは普通の瓦屋根に用ひられてゐる様式であり、中は鐵筋









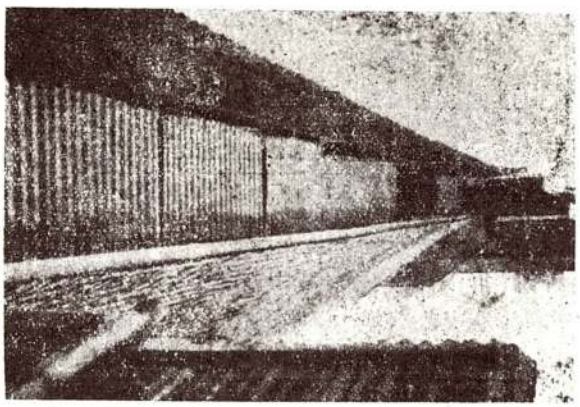
第３圖　シンガポールの中心街

コンクリートの陸屋根であり、下は或る劇場の換氣型式である。

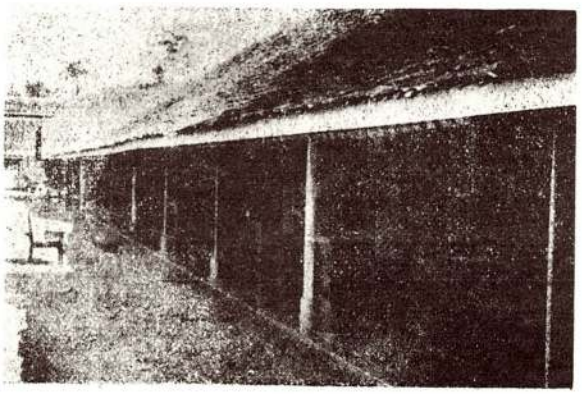
4

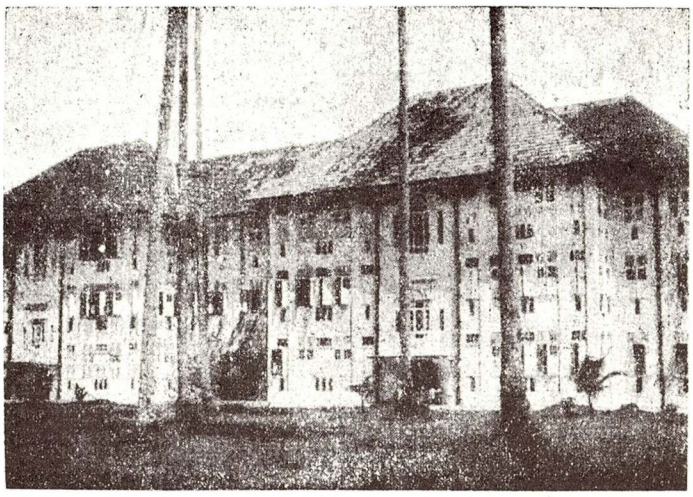
周壁について云へば太陽は春秋二回直上にきてこれを境に南北へ傾くのだから南北兩面とも均等に日をうける事はわかり切つた事であるが太陽の直射をうける面は我國の如く南面でなくてむしろ東西の兩面である。第３表にもある様に太陽の高度が20度の時に於てすらも90度の時の強さの25%位より減じてゐない。即ち太陽光線の直射を室内に入れてはならぬが、其の可能性はことに東西兩面にある事を考へなければならぬ。一般に直射光線を室内へ入れない方法で最も多く採用されてゐるものはビルヂングでも住宅でも外壁面の一柱間をガラリーにする方法である。更にシンガポールのホテル等ではこの外壁面をすつかり開放して。そこに輕快なガラリーを造つて光線をふせいでゐる。又住宅等では白色の厚手の幕や或はヨシズをはつてゐる。

第３圖はシンガポールのビルヂングの標準的なもので外側のガラリーの型式を示したもの。建築物法にて規定して一階のガラリーは歩道に開放して毎日くる夕立の傘の役目をなしてゐる第4 圖はバタビヤのホテルの中庭で日除け幕の型式を示したものである。外壁をコンクリートや煉瓦等で厚くする事殊に東西兩面の壁を厚くする事は保熱力を多くする點で都合が悪い。日中強烈に照りつくされた。厚い壁は日がおちても熱の保有甚大で夜間容易にさめぬ事は近代建築を彼地につくるときに考へなければならぬ事である。又水平方向の通風を良くするために一方向窓の型式をとらずに室には必ず二方向以上の開口部を設けて通風を良くすると同時に、又上下に開口部を設けて空氣の垂直移動をおこさなければならぬ、第５圖はシンガポールにある高級なアパートメントの例である。如何に苦心して水平垂直の通風に努力してゐるか、これは亦文字通の蜂巢住宅である。又第６圖は最もよく出來てゐると思はれる熱帶地方の代表的獨立家屋である。即ち外部には軒を深くしたテレスを設けその中一部を平面圖にみる如く凹ませこの部分のみ開口部をとり、直接外部に面した壁は全々窓をなくして日射並び



第４圖　上下バタビヤのホテル





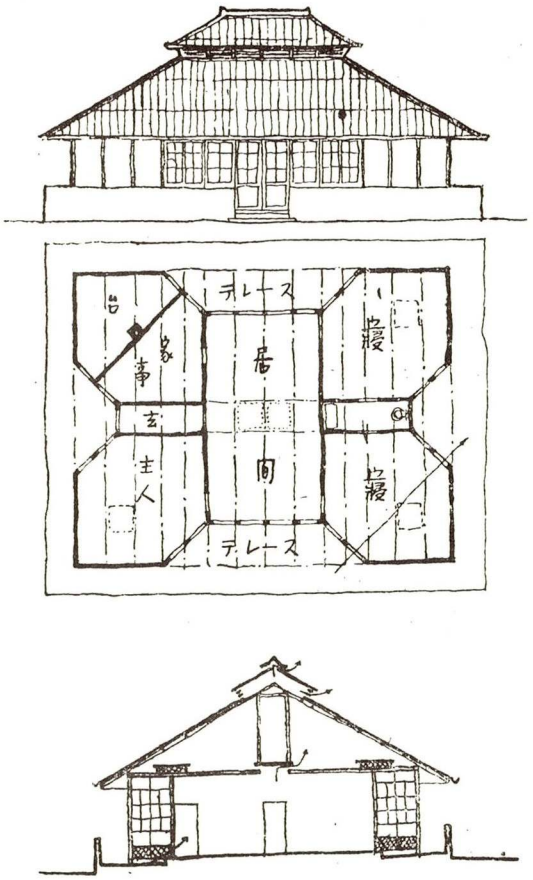
第5圖　シンガポールのアパートメント

にその反射の室内導入を防ぎ、一方各室は必ず二方向に開口部を設けて通風を良くしてゐる又斷面圖にある如く室内より屋根裏へとの換氣も手ぎわ良く出來てゐる。屋根は輕快に出來て亞鉛鍍鐵板ペンキ塗りを用ひ、熱の透過量の惡作用よりはむしろ保熱量の少きをねらつてゐる。

5

要するに建物内の溫度を最低に保つためにはその設計に當り1.には日射を極力さへぎる樣に考量するを要す。第3圖のビルヂングのガラリー第6圖の外壁面の無開口等はこの好例である。2.には熱を屋根、壁等の建築材料中に吸收さす方法は一日中の氣溫の變化がなきために發散さす時間がなく不經濟でさけねばならぬ。第4圖のホテルの日除幕の使ひ方や第6圖の屋根の型式はこの好例である。3.には室の配置と、開口部の型式を考究して室内空氣の水平垂直の移動を良好にする樣にせなければならぬ。第5圖のアパートメントの開口部第6圖の室の配置等はこの好例である。4.には無風又は弱風のためには窓の型式をとらずに室内室外の界をなくして地面の蒸發熱による冷却の室内導入を良くする事も一つの方法である。第4圖のホテルの中庭側の室の型式はこの好例である。

同じ共榮圈でも北滿の家は日本人にとつては何とはなしに他人行儀に感ずる。これに反して南洋の家は何とはなしに田舍を思ひ出す樣な親しみを感ずる。やはり氣候風土がより日本内地に似てゐる譯けであらう。この地にあつて共榮圈が文字通り共榮さすやうに立派な家を建てる事は我々建築技師にあたえられた職域奉公の新分野であらう。



第6圖　獨立家屋の好例

南洋方面の建築事情



1　椰子の木蔭にある南洋家屋

南洋建築研究の必要

小學校の卒業式に子供ながらも感傷を込めて歌つた「螢の光」の文句の中に、「筑紫の極み、陸の奥、海山遠く隔つとも」といふのがあつた。當時の日本の國としてはそれでよかつたかも知れないが、現在の我が國の狀態ではこの歌詞は改訂を必要とする。南は赤道を越えて遠くジヤヴア島まで、西は遙かに蒙古の奥地まで、北は北滿やシベリヤまでといつた風に、學校の卒業生も各方面に雄飛する世の中と變つてゐる。

九州島の果と奥羽の果とまでの間には、その間勿論風土の相違があるにしても、それは枝葉の相違であつて、根本には變りがない。建築の方面から見てもいづれも日本式であつて、地方的の差があるに過ぎない。ところが蘭印と滿洲國との間には根本的の相違がある。簡單に言へば、蘭印の建築は如何にして暑さを防ぐかといふ所に重點が置かれてゐるに對して、滿洲國の場合には如何して寒さを防ぐかといふことが重點である。だから兩者の建築は全然別個のものであつて、夫々の環境に應じて最も好都合のものが工夫され、改良されなければならないのである。

昔の日本は傳統によつて築き上げられた建築をそのまま反覆して行けばよかつたのであるが、今日の日本では、東亞共榮圈の各地に存在する夫々特色ある建築樣式を調査し、研究して、今後の建設への材料としなければならない。北滿へ移住する人達は北滿に最も適應した住居を建築して、其處を永住の地と化さねばならないし、若し蘭印へ發展する場合には蘭印の風土に最も適應した住宅の設計や、住居の方法を考案せなければならぬ。日本は東亞共榮圈の盟主なのであるから、日本の科學はこの地域全體を指導するに足るものとならねばならぬ。從つて日本の建築學は從來の研究より更に一步踏み出して、東亞各地域の建築事情を科學する必要を感じるのである。

南洋の氣候

住宅といふものは元來が風雨を凌ぐといふのが主要目的であるから、地球上いづれの地域にあつてもその土地の氣候に最もよく適合した樣式が選ばれてゐる。南洋の建築樣式は南洋の氣候を理解することなくしては完全に知り得るものではないそれで先づこの地方の氣候に就いて一般的な說明をすることゝする。

南洋と言つても範圍は色々考へられるが、此處には現在問題となつてゐる佛印とか蘭印の地方を考へて、この方面の氣候が日本の氣候と比較して如何に異つてゐるかを述べることゝしよう。

氣候の第一要素は氣溫である。第1表に示した樣に、佛印南部のサイゴンでは一年の平均氣溫が約28°であつて、大阪の眞夏の平均氣溫よりも少し高いのである。佛印は北緯10°邊から北回歸線までの間に位置し、サイゴンは赤道に最も近く、一番暑い地方と考へてよい。四月には平均氣溫が30°を越してゐる。一月でも大阪の七月位である。即ちサイゴンでは一年中どの月でも暑いのであつて所謂常夏なのである。

蘭印のバタヴイヤはサイゴンに較べると、少しだけ溫度は低いが、一年中高溫といふ點に於ては少しも變らない。バタヴイヤも南緯約7°で、赤道に極めて近いのである。

そうすると南洋方面では、一年中日本の眞夏の

※ 筆者は高建工學校教諭



1. 杭上家屋

様な日ばかりが續いてゐる様であるが、實は熱帶の一年には乾季と雨季といふ二季節があるので、これは氣溫のみからは、はつきりと分らない。氣候の第二要素たる雨量の一年中に於ける變化を見て初めて分ることなのである。

第2表に現れてゐる様に、サイゴンでは一月や四月よりも七月や十月の方が雨量が多くなつてゐる。バタヴイヤでは丁度逆で、一月や四月に雨が多くて、七月や十月の方は少い。この雨季と乾季とが季節的に逆になつてゐるのは、北半球と南半球との相違であつて、一年が乾雨の兩季に分れるといふ點では、兩者共通してゐる。

雨がよく降る時には、空氣中に水分も多いから濕度が大となるのは當然である。第3表の濕度の比較表を見れば、このことは諒解出來よう。そして大阪でも七月や八月になると、濕度が大で氣溫が高いから、所謂蒸し暑くて耐え難い様に、南洋でも雨季は健康に悪い影響を與へるものなのである。

南洋方面の建築物が、如何にすれば濕り氣の多い溫度の高い空氣の中で、人間の身體を護り得るかといふ點に最大の考慮を拂ふ理由は、此處に存在する。

南洋建築の特色

さて南洋建築の最も著しい特色は、海岸の椰子やマングローヴの木蔭に造られた水上にある家屋の群であらう。南洋方面の住民をマレー人種と稱してゐるが、別名を海岸島嶼民族と稱する理由も此處にある。彼等は好んで海邊の最も風通しのよい場所を選んで住地を求める。海岸こそは常に風の絶えない唯一の場所である。晝間には海の方から海軟風が吹き、夜間には陸の方から陸軟風が吹く。海陸軟風の交替する朝と夕とには一時風の瞬間があるにしても、海岸ほど涼しい所は他にないことは、吾々も經驗して知つてゐる筈である。

ところで吾々日本人の經驗からすると、海岸は波浪に襲はれる心配があるし、また潮汐干滿の差が相當に大きいから、こんな場所を選んで住宅を建築することは、大いなる不安を感じるのである。然し熱帶の海には暴風雨といふものは無いのだし、潮汐干滿の差も極めて小であるから、彼等には何の心配も無いのであつて、所變れば品變るで要らぬ心配は無用なのである。

第1表　南洋と日本との氣溫比較表（攝氏度）

地名	一月	四月	七月	十月	全年平均
大阪（日本）	4.3	13.1	26.3	17.2	15.1
サイゴン（佛印）	26.5	30.3	27.6	27.5	27.8
バタヴイヤ（蘭印）	25.6	26.5	26.1	26.6	26.2

第2表　雨量比較表（單位粍）

地名	一月	四月	七月	十月	全年平均
大阪	43	124	136	127	1315
サイゴン	22	54	313	219	1963
バタヴイヤ	312	128	61	114	1771

第3表　濕度比較表（百分率）

地名	一月	四月	七月	十月	全年平均
大阪	71	72	77	76	74
サイゴン	71	66	82	80	75
バタヴイヤ	86	85	80	79	83

海と陸との丁度境界の所に住宅を建築するのだから、彼等の家屋は杭の上に建てられる。この杭上家屋こそは南洋建築の最も目立つた特色と言へよう。杭の高さは長いのも短いのもあるけれども大低は大人の身長程の高さを持つてゐる。家へ出入するには梯子を用ひて昇降するのである。

建築の材料としては、全部が植物性のもので、樹幹を以て杭を樹て、ニツパ椰子の葉を以て屋根を葺く。壁も亦ニツパ椰子の葉で造る。高濕多雨の南洋の氣候が、植物を豐富に提供して呉れるからであり、それ以外の材料をば必要としないためである、即ち杭上に造られて、植物性の材料のみから成る家屋こそ、南洋方面に共通する標準の型なのである。

バタク族の家屋

杭上家屋は元來海邊の水上に建てられる場合に發生したものであらうが、假令陸上に移される場合にも、やはり杭上に建築するといふ樣式は傳へられて行く。そしてスマトラ島に住むバタク人の家屋の如きは、外觀頗る雄大であつて、屋根の形は直ちに我が國の宮造りを聯想せしめ、床下の木材の組合せは神樂堂の床下を想はすものがある。

殊に有名なのはスマトラ島北部の山中にあるトバ湖の附近に住むトババタク族の住家であつて、藝術的な裝飾と堅牢な構造とは、わざ〳〵一旅行者をしてこの地を訪ねしめるものとなつてゐる。東印度日報社長の齋藤正雄氏の記事(新亞細亞第3卷第1號所載 東印度の住居と部落の形態)に依ると「床下の高さは概して1.75米突、家の長さは約10米突、幅約5米突半を有してゐる。屋根は高い棟の一線から、鞍形に彎曲しつゝ、鞍形に垂れた軒は著しく前方に突き出てゐる。そのために家の前には廣い軒下が出來て、此處が色々な家事のために使用され、且つ庇狀に突出し屋根は貴重な家屋の彫刻や前部の露臺を風雨に對して保護する形となつてゐる。この突出屋根は屋根の中腹部と下端と二重に繞らされ、その庇裏とこれに接續する壁部は美しい彫刻文樣を以て覆はれてゐる」とあつて野蠻人の名を以て呼ばれる彼等の內にも、貴族的な趣味や藝術的な意識が存在することが示されてゐるのである。

南洋パラオ島のアバイ

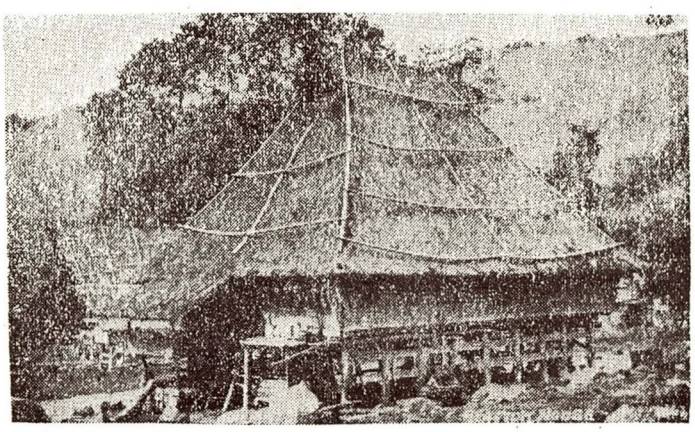
このトババタク族の藝術的な家屋に似てゐるものが、我が委任統治領の南洋群島にも存在する。パラオ島にあるアバイが最も有名であるが、壯大な切妻屋根のアバイが二個竝んで建つてゐる有樣は人目を驚かすに十分である。

アバイといふは島民の集會所とも稱すべく、村有の共同家屋であつて、獨身者達の宿泊所ともなつてゐる。昔は村の壯丁が此處に集つて、村の警備の任に當つたこともあつた樣であるが、今は多く來客の宿舍として利用されたり、村の會議の場所として使用されてゐる。

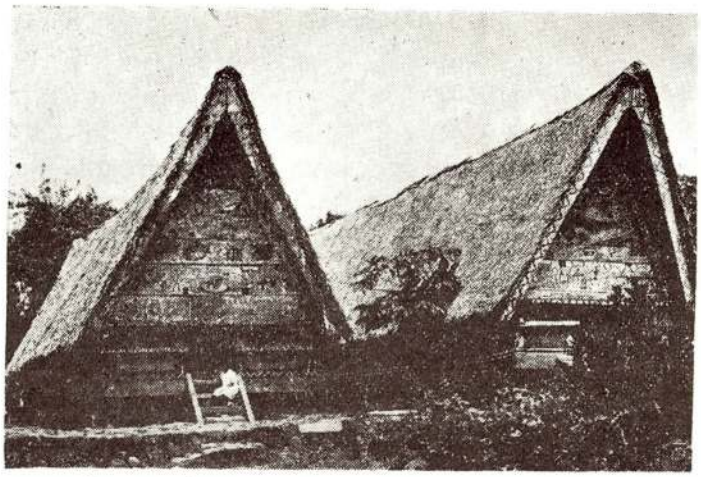
床は地上一米程の高さに設けられ、木材を並べてその表面は滑かに削られてある。中央部には大きな爐が設けられ、室の內部は百人をも收容出來る廣さがあつて、しかも柱は一本もない。また一本の釘を用ふることもなくして、この壯大な木造建築物は造られてゐるのである。

楣風板や柱梁には細密な彫刻を施してあり、文字を持たなかつた島民は、繪畫によつて彼等の思想を表現してゐるのである。この繪文字によつて彼等の生活樣式や彼等の傳說等を視ひ知ることが出來るのである。

椰子の葉で葺いた切妻屋根の面が地平面となす角度は、約60°であり、その傾斜の急な點に於ては、恐らく他に比類を見ないものである。屋根の格好だけを見ると飛彈國白川鄉の家屋に共通した



2. バタク族の家屋



3. パラオ島のアバイ

感じを受ける。こんな立派な建築物を、原始人と呼ばれるカナカ族が造り得るのである。而も彼等にはカイバクと稱する斧を使用するのみである。加工器具の關係で精巧な組合せを行ふことは困難であるから、たゞ索繩を以て、互に木材を括り合すのみである。

簡單な彼等の生活

トババタク族の藝術的な家屋建築とか、パラオのアバイ等は南洋全體から見れば、特殊の例なのであつて、彼等一般の建築物としての家屋に到つては誠に御粗末なものに相違ない。

例へばニューギニー島の奥地に住む侏儒族の村では、直經3 米程度、高さ1米乃至2米位の稻叢形を呈する草屋根の小屋があるに過ぎないし、またタイ國の山嶽地帶に居住するセマン族の住居に到つては、單に椰子の枝を地上に突差して、葉を結び付けたに過ぎないものさへある。甚しきに到つては巖窟を利用し、或ひは樹穴を利用して、そこを居所とする者さへあるので、かゝる民族にとつては家屋といふものは、單に風雨を避けるだけのものである。

このことは彼等の言語にも現れてゐるので、例へば我が南洋群島のパラオ土人は、家のことをブライと呼んでゐるが、ブライといふ言葉の意味は人間を容れる器といふ意味である。彼等にとつて家屋といふものは、單に身體を容れる建物に過ぎないのであり、生活の大部分は大空の下に椰子の葉蔭で行はれるのである。我々の様に家屋といふ概念はその家屋内に營まれる内容を含まないのである。英語でも house と home とは區別されてゐるが、日本語では家といへば、house の意味にも使ふし home の意味にも使ふ。即ち家は内容を含めた建築物を指してゐる様である。

だから日本では一戸一家族の場合が普通であるが、南洋では一戸數家族を收容する場合が決して珍らしくないのである。すべて熱帶では人間が怠惰である。意識的に怠惰であるのではなくて、熱帶の自然が衣食住の心配を與へないから、自然に怠惰となるのである。だから我々ほど熱帶の人達は住居に對しても關心を持つてゐない。ほんとに夜露を凌ぐことさへ出來たなら、それで十分家として役立つのである。

濕熱な氣候の所では、狹い家屋内に居るよりも開放された大氣中に居る方が、どれ程樂か分らない。日光の直射と雨に濡れることさへ防げればそれで家屋の用は足りるといふべきである。だから彼等の家屋では屋根が家屋の主要目的であり主要部分となつてゐる。

家を建てるに當つても先づ屋根を造る。轉居する場合にも先づ屋根を運搬する。轉居といつても家屋そのものを轉居さすのである。ニツパ椰子で造つた彼等の屋根はそう重いものではない。四人も居れば四隅を擔いで易々と運搬することが可能なものである。

移住白人の家屋

そういふ簡單な家を持つて、自然のまゝの生活をしてゐた南洋へ現れて來た侵入者は白人であつた。先づスペイン人が、續いてオランダ人もイギリス人もやつて來た。そして彼等白人は、ヨーロツパ式の建築物を南洋の隨所に殘したのである。古く第18世紀の中葉に植民したスペイン人の建築物が、今もフイリツピン群島のセブ島のコロン街や、ザンボアンガのコロン街に殘つてゐる。

それらの建築物を見ると、面白いことには我が國の北陸地方にある雁木（ガンギ）の様な構造が殘されてゐるのである。勿論我が國の雁木は冬の

雪を防ぐための特殊建築法であるが、南洋にあるこれに似た造りは、臺灣にある停子脚と同様に、日射を防ぎ驟雨を防ぐための特殊構造である。道路に面して歩道の上を覆ふてゐるもので、本國のスペインでは corridor（廻廊）と稱してゐるものとよく似てゐる。

ヨーロツパ人が南洋へ來て一番困るのは暑氣の甚しいことである。スペインは北緯40°の國であり、イギリスやオランダに到つては同50°以北の國であるから、彼等にとつては赤道の附近で日光の直射を受けて生活することは餘程困難であるに違ひない。だから彼等が南洋へ來ると、朝早く出勤して午前中に適當の事務を終へ、中食は各自の家庭へ歸つて攝り、中食後はブラインドを下した部屋の中で晝寢をするのである。熱帶の午後1時や2時頃はすべての活動が停止した休息の時である。一日の內で最も高溫になるこの時間にわざわざ働く必要はないわけで、そろ〳〵氣溫が降り始めてから夕刻までの間にまた一仕事する。そして夕食の後こそは最も氣持のよい時間となるのである。

高溫な外氣から自己の身體を護るために、彼等は厚い壁を建築する。北滿の酷寒を防ぐのと同じ理由から、即ち外氣の影響をなるべく少くするためにヨーロツパ人の熱帶に於ける家屋は壁をうんと厚くしてある。熱帶の土人は、自然に逆ふことをしないで最も簡單な家を建てるが、熱帶に住む文明人は自然を克服する意志によつて、土人の場合と逆な方法を選ぶ。

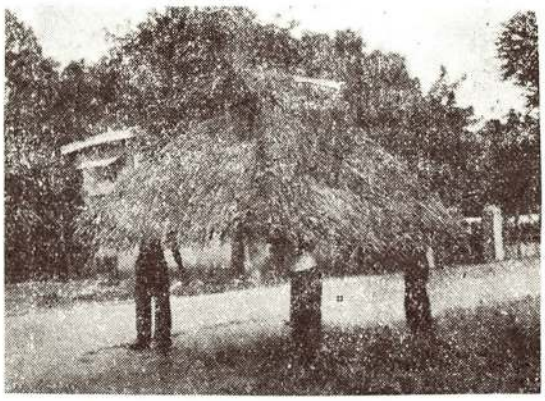
然し文明人と言へども自然に勝てる筈がない。1年毎に定期的の休暇とか、數年後の歸國とかによつて、辛うじてヨーロツパ人は健康を保つてゐるに過ぎない。また彼等は海岸の底地から山間の高原へと移動する事によつて、比較的冷涼な居住地を見出してゐる。例へば蘭印の政治上の中心地はバタヴイヤであるが、總督府の官衙はバタヴイヤに置きながら、總督は山間のボイテンゾルグに官邸を持つてゐるといふ狀態である。バタヴイヤは平均氣溫が26°といふので、最近ではその東南方の高原上にあるバンドンへ役所の一部が移轉したのも、同樣の理由からである。

日本人の住宅問題

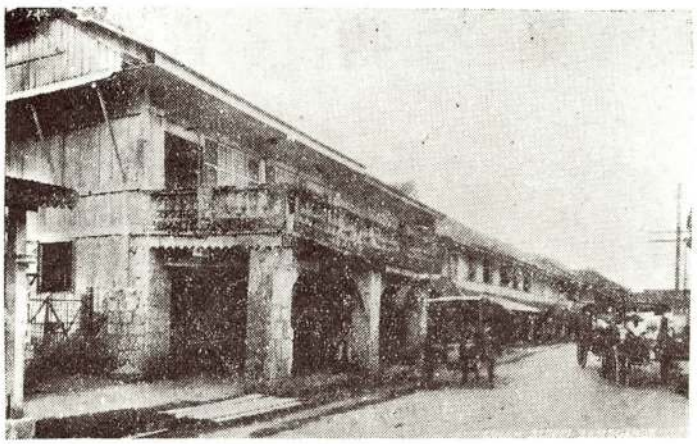
蘭印に在留する我が同胞は昭和12年の統計では約6.500人であり、マレー半島にあるものは約7.000人を算する。蘭印在留の者に就いて調べて見ると、商業に從事する者最も多く約2.000人、水產業と農業と工業とが夫々約300人、その他に無職業が約3.000人ある。男の數は4.000人で、女の數は2,000人である。かく見る時は、蘭印に活躍する本邦人が單なる出稼勞働者ではなくて、家族を有し店舗を構えて生活する者がその大多數であることを知るのである。而らば夫等の人達は如何なる商店を持ち、如何なる住宅に生活してゐるのだらうかといふことが問題となる。

最初から豐富な資本を持ち、自己の設計する建築物を造つて、永住の覺悟と共に出掛けて行つた人達は案外に少い。大低は知人があるので招かれて行つたとか、何時の間にやら流れて來てしまつたとか、そして初めは獨身でコツコツやつて居たが、段々と落着いてしまつたといふ樣な人が多い樣である。だから彼等の住宅の如きも大低は借家住ひであつて、華僑の家主が建てたものを利用したり、それを一部改造して自分が買取つたり、まあ惡く言へば間に合せのものが多いのである。

ほんとうに日本が大東亞共榮圈の指導者であるならば、政府自ら率先して、大南洋の風土を精しく調査し、その自然條件に適合し、更に我が大和民族の趣味に合致した建築物の設計等をも考慮すべきである。日本の移植民事業がとかく巧く行かなかつたのは、最初から根本問題を檢討してかゝらないからである。南洋には南洋風の設計が必要



4. ニツパ屋根の轉居



5.ザンボアンガのコロン街

であり、南洋には南洋特有の建築材料がある。それをよく知らずに、日本風の建築をしてみたり、西洋風の眞似をしてゐたのでは、根本問題は解決出來ない。熱意に燃えて南下する多くの拓士の爲に、ほんとうに自分の家だといふ感じのする建築物を工夫してあげたいものである。

建築學會・競技設計應募圖案募集

建築學會においては第15回建築展覽會のために次の趣旨に依り「**國民住宅**」の設計圖案を懸賞募集することになつたので、會員各位にも規程參照の上擧つて應募あらん事を切望する。

（建築展覽會規程ノ內）

第3部 競技設計

第7條　第3部競技設計ニツキ定ルム所次ノ如シ

1. **課題**　「國民住宅」
2. **趣旨**　我國將來ノ國民住宅ノ確立ヲ期シ特ニソノ意匠、構造、材料ノ上ニ劃期的ナル創案ヲ求ム
3. **條件**　**位置及敷地**　都市ノ住居地域ニシテ2割乃至3割ノ空地地區トス
   規模及內容　家族數ハ7人ヲ標準トシ日本國民ノ中堅階級ヲシテ健全ナル家族生活ヲ營ムニ足ルモノ
   但シ面積ハ凡ソ130平方米迄トス
   戸建型式　1戸建
4. **所要圖面**　配置圖　縮尺1/200
   平面圖　縮尺1/100
   立面圖（2面以上）　〃　〃
   主要部詳細圖（矩計及構造明示）　〃　1/20
   透視圖
   設計特記スベキ點ニ付テノ說明ハ圖面ニ簡單ニ記入スベシ
   用紙ハ製圖用紙半切大（50cm×70cm）圖面ノ仕上ハ隨意トシ、寸法ハ總テメートル法ニ據ル、圖面ノ表裝ヲ爲スベカラズ、但シ入選作品ノ內展覽ニ供スルモノハ本會ニ於テ表裝スルモノトス
6. 應募圖案ニハ氏名及暗號ヲ記入セズ、別ニ應募者ノ住所、氏名ヲ明記セル紙片ヲ封入シタル封筒ヲ添付セラルベシ
   一案毎ニ包裝セラルベシ
9. **締切期日**　**昭和16年9月22日**（月）午後5時迄ニ建築學會事務所ニ提出セラルベシ
7. **審査員**

市浦　健	今井　兼次	大村已代治
岸田日出刀	熊谷　兼雄	小林　政一
坂倉　準三	高山　英華	谷口　吉郎
堀口　捨巳	前川　國男	山田　守
山脇　巖		（五十音順）

8. **賞**　賞ハ次ノ通リトス
   入選　賞牌、賞狀及副賞（金200圓）4名
   佳作　賞牌、賞狀及副賞　若干名
9. 應募圖案ハ總テ之ヲ返還スルモノトス、但シ之ヲ出版スル場合ニハ著作權ハ本會ニ歸屬ス

佛印建築物瞥見

武藤彪

北緯8度から32度に亘る此地方はもうすつかり熱帶で、雨季と乾季の二季よりなる常夏の國である。雨季とはいへ一日に一度驟雨が見舞ふ丈けではあるがそれでも北部東京地方では、雨季の末頃には日本の秋冷を覺ゆる程の凉氣は訪れ蔬菜類も取れるに反し、安南南部、交趾支那及カンボヂヤにかけては畑に野菜さへ作り得ない酷熱の赤道型である。

東洋のバルカンと云はるゝ程、種々の民族が居るので建築物も各種各樣ではあるが、安南人クメール人及泰人に三大別する事が出來よう。

東京地方の風景は椰子や檳榔樹が點綴しては居るが田甫の中に草葺に竹の垣根の田舍屋があり、日本其のまゝの風景が至る所に見らるゝ、然もまま板葺の二階屋の日本家屋そまゝを見受けることが出來るのも愉しい。

元來安南は五世紀頃最初の王朝樹立以來、支那の宗主權の下に、時に隷屬し、時に獨立しつゝ清末に及んだ漢字國であつた、1741年——1799年頃アドラン（サイゴン近郊）の司教の援助により幼王阮氏は潛王を倒し、安南を統一して阮朝第一代の嘉隆帝となつた。其後歷代の王が排佛行動に出て、第四代嗣德帝に至つて遂に佛に屈伏、交趾支那を割讓した、宗主權を主張する支那は安南救援に立つたが佛に敗れ、1884年5月、天津條約により宗主權を放棄し、翌年6月正式にフランスの保護領に編入されたと云う歷史の通り、宗教民俗凡てが支那的であるので、建築物も凡て基調を支那に取て居り、裝飾其他の細部に安南的性格を見い出し得るかも知れぬが、殆んど支那の摸倣と言つても過言ではあるまいと思はれる程である。

ウーエ（順化）の王宮の如き、門の形式は支那の牌樓に似て、更に規摸の小なるものであり、王宮其のものにも何等安南獨特の手法を發見し得ない。其他チユトツクの陵墓、チエントリの陵廟にしても又王室歷代の靈廟にしても、全く支那の廟其のまゝである。只孔子廟の形式は稍安南樣式の強いものと見らるゝが、背後の塔は全く支那的である。

ハノイの文廟門の屋上の樓は、三つのアーチを持ち、屋根が二つあるが、屋上の中央の火の玉を圍んで龍が左右に、鯱鉾の樣に立て、屋根の端が上部に跳ね上つて居り、樓の兩端に小塔が立つて居る形式は支那式にしては少し違て居る樣である。

安南の南部から交趾支那の海岸の所々に見受けられる、先住人占波（チヤンパ）の遺趾は、龍の趾らしく何れも赤練瓦で作られ、ヒンヅーの形式であるが、藝術的價値のない單なる廢趾に過ぎない。

安南から交趾支那に入て熱帶色の色濃きに驚きカンボヂヤに入つて更に風物の一變するに驚くのである。

カンボヂヤは、西歷一世紀頃バラモンの移民がメコン河の低地にフーナヌ王國を樹て、初代の王としてカウンデインヤが即位した。其時他のバラモンのカンブがフーナヌ國の少し北に殖民し、其子カンブヂヤスに依てカンブヂヤス王國が立てられた、之れが我々の云ふカンボヂヤの初めであるから、有名なアンコール・ワツトの廢墟を初め、古い建築物は凡てヒンヅー型である。アンコールワツト、アンコールトーム等巨大な建築物の發見については、1858年ロンドンの科學協會から派遣された、佛蘭西の自然科學者アンリー・ムーオーをして同時代に於いて、世界に比するものなき建築物と呼ばして居る程のものである。

德川時代、印度の祇園精舍と誤まられ、其の見取圖は日本に持來され、現在も水戸の圖書館（？）に保存されて居るとの事である。最近には佛印の映畫として廣く全國に紹介さたので、其の記憶も新たな事と、思はれる其の豪壯な偉容は、到底筆を以て好く盡す所でない。

歷代の王に依つて着手されたアンコールトーム

が完成したのは、西紀889年—900年の頃であつてアンコールワツトは更に降つて、推定1050年—1170年頃に完成されたものとされ、恐らく此等の寺のグループの中で、最後に出來たものとされて居る。

アンコールの意味は、梵語「ナガラ」即ち都であり、ワツトはクメール語の廟の意である。此等の建築物は王居であると共に、隣國シヤム及びチヤンパに對する軍事上の意味でもあり、又一面佛堂でもあのだ。想像せらるゝ所に依ると王族も、將兵も〻僧侶も住居して居たものとされ、方形の内外二重の長廊より成り、廊の全長800メートルに及び其の全部の側壁には、軍隊の行進、隣國との交戰、象による狩獵等が浮彫になつて居る、豪華勇大なもので、佛像、蓮華の佛教的なものより活動（ラヂヤ）善（サツトバ）創造（ブラーマ）生存（タマス）破壞（シバ）の性格を持つトリムルチーの神々、さては四つの顏四つの手を持つヴエーダ、愛の神カマ馬頭の半神キンナラス等々怪奇を極むるバラモン教の神々などがあり、柱の悉くにはテバダス（梵語デバダ）と稱する裸婦の種々の姿體を彫り、礎石及び柱頭には麗しき摸様の彫刻もあるなど、クメール藝術の粹をつくして居るものである。

此の寺を初め、王宮の階段の昇口、塔の前等神聖な建物の前面の左右に、丁度扇を開いた様に立つて居るのは、ナガ（梵語、智者賢者も表す）で七の頭を立てた蛇の彫刻で、此れこそ最もカンボヂヤ的なものである。其他往々、民家の棟の兩端にX形の千木に類するもの〻立つて居るのを見受けるのも、何か日本と交涉があるらしく思はれる此國の首都プノンペンに有る王宮等近代建築と覺しきもの、形式は凡て全く、泰式であつて、取立て紹介に價するものもない。

ラオスはルアンプラバン、ヴイアンチアンと云ふ都市と、同名の小王國があつて、各土酋を頂いて居る。住民は泰族が主であるが、白夷、ルールー、苗など雜多な種族が居る。此邊のメコン河は河底に岩石多く、河は至る所で激湍をなして居るので、雨季の最盛期6、7月頃でないと舟楫を通せぬ、未開の地である。此地も古く印度文化に浴したらしく、建造物は印度風であるが、西藏と印度とが種々と交錯して居る様に思はれる。最後に佛人住宅に就いて一瞥を拂て見たいと思ふ。

最も簡單なものを見ると、入口のテラスから直ぐ大廣間に通じ、之れが食堂であり、家族全體の會談所でもある、大廣間を挾んで左右に、幾つかの部屋がある。左右の端の部屋へは、テラスからドアー一つで通して居て、左の分を應接間として居る大廣間へも、次の部屋へもドアーで通して居る。調理室、物置は裏に別棟になつて居る。床は凡て甎である。

此の形式に日本的性格を盛る事によつて、明朗簡素な新時代の住宅として住宅營團へ推奬し度い氣がしてならない。

特資不足の今日生活の簡易化を痛感する者であるが、デパートの家庭用品部を覗いて如何に複雜多岐を極めて居るかに、驚かぬ者も無いと思ふ。そして生活の改善は、先づ住居の改善から叫び度いと思ふ。（16、6、18）



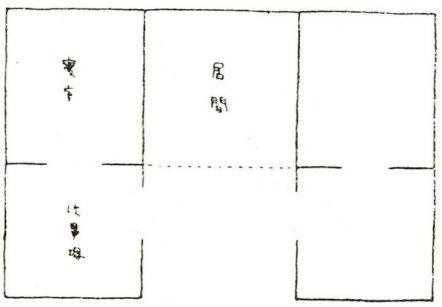
南支の民家

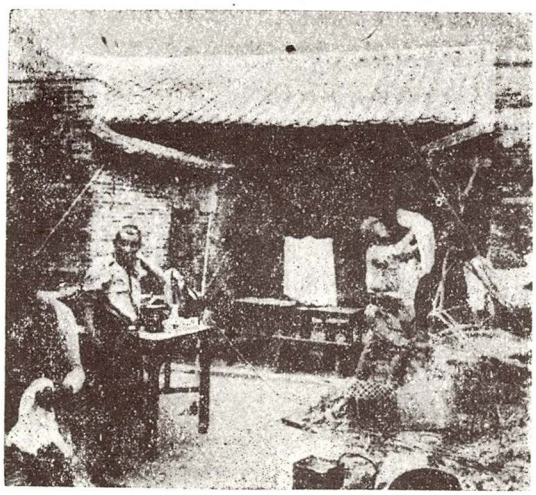
太田傳太郎※

私が南支に居たのは昭和13年10月のバイアス灣上陸より、翌14年にかけてゞあつて、すでに舊聞に屬する。そのゝち岸田博士の御一行も行かれてゐるし、また廣東にはそのほか建築家も行かれてゐると承につてゐるから、廣東市内の新建築を紹介するのは、他に人もあると思ふ。然かし軍人として行つた者以外は、いろいろな事情で市内を遠く離れた地方への旅行は一寸困難なやうに聞いてゐる。そこで、こゝに南支の田舎の建築を民家を主として紹介するのも、無駄ではあるまいと考へ筆をとつた次第である。しかし何分戰闘中の暇を盜んでのことであるから、ごくざつと見たに止まり、誤も多いのではないかと思はれる。

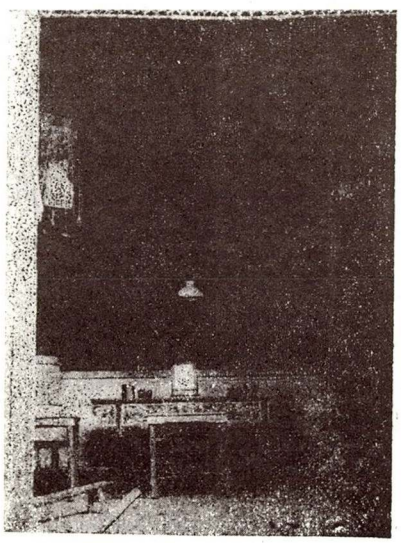
見渡す限りの黃土と、黃塵に包まれた空の北支に戰闘を續けて來た私が、南支に上陸して驚いたことはいかにも內地の景色を彷彿させるその風景である。誰もが久し振りに故郷の田を見た樣な氣持になる。木の間隱れに見える農家、その壁は煉瓦なのだが、日乾煉瓦の肌はあたかも內地の農家の土壁を思はせる、上には薄い屋根が輕やかに載つて、簡素で輕快な感じは私が豫想してゐた支那らしさを微塵も持たない。

農家の平面も、北支とはその趣を異にする。一番簡單なのは第1圖の樣なもので、切妻造一棟のものである。これを三つの部屋に分ける。中央の間は正面突當りに神を祀り、前に卓、椅子を並べて居間に使ふ。この室の前面は桁以下開放で壁も建具もない。左右の二室は寢室と台所で、中央の

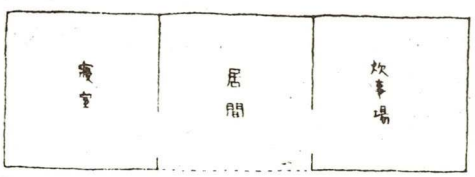




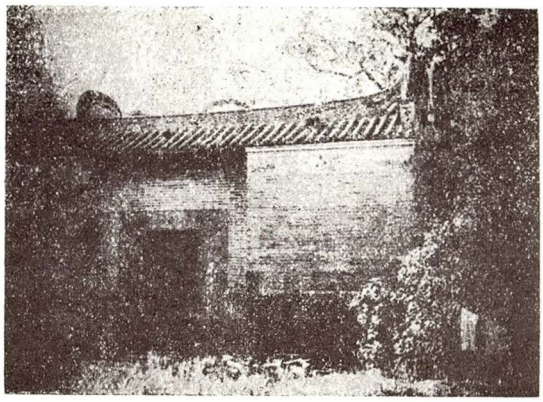
第 2 圖



第 1 圖



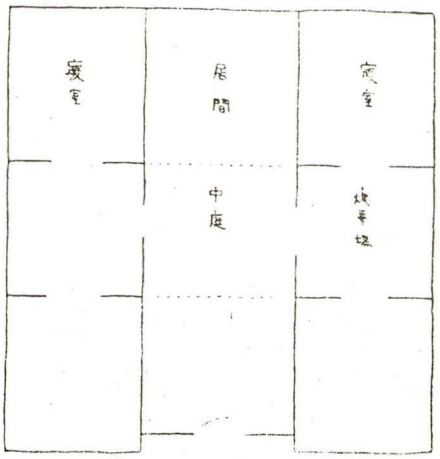
※ 筆者は文部省建築課技師

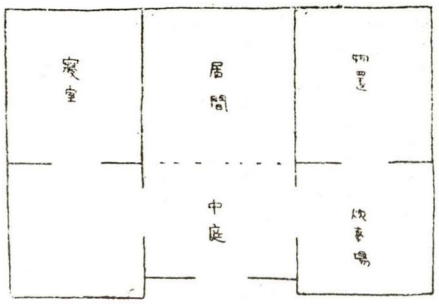


第 3 圖

間に向つて入口を設ける。これが農家平面、基本形である。第2圖はこれの進んだもので切妻造の主屋の兩方に一段低い切妻の袖が直角につく。またこの種のものゝ中には前の兩袖の間に壁を設け門を開くものもある。（第3圖）さらにこれがもう一歩進むと、この前に第4圖のやうな切妻造平入の建物がつく。これで農家の平面は完成する。

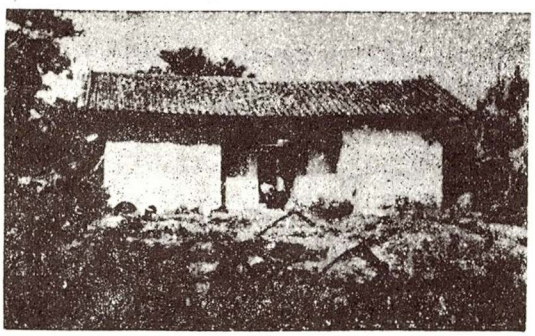
以上のものは窓を原則として造らないため、左右の部屋は眞暗で、日本人には一寸使へない、從つて農家に泊るときには第2圖に見える樣に中央の開け放しの間の土間上に寢る。（中には採光のため天窓をつくるが、それは瓦一枚の代りにガラスを置いた小さなしかもごく簡單なものである）こゝに示した見取圖はごくざつなものである。私達が行つたときは住民は殆んど逃げて居らず、各室の使用法などは不明のところが多い。中央の間は卓椅子などが列べてあり、他に明るい部屋がな

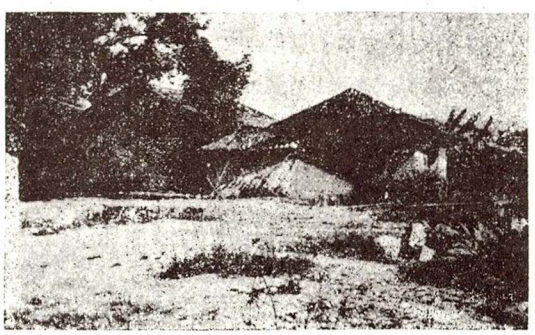




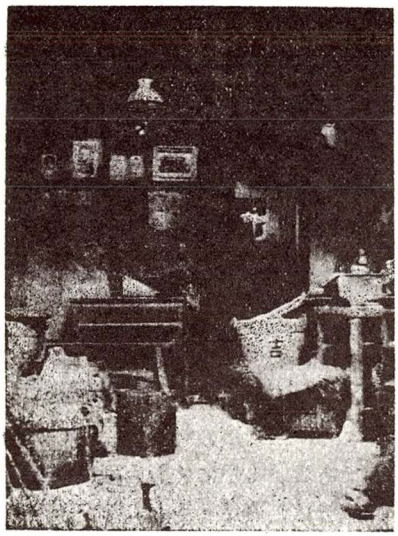
いので居間と考へられる。その左右の奥の部屋には寢臺が置いてあることが多いから寢室であらうしかし不思議なことには寢臺の數が1～2個しか見えなかつたことである。1戸に住む人數は解らないが、寢臺1～2個では到底足りさうもない。主屋の前に附いた部屋のいづれか一方は炊事場として用ひられる。他の室はいづれも倉庫として用ひられてゐるらしい。

立面について言へば、第4圖の如きものと第3圖の如きものゝ二種がある。前者殆んはど火乾煉瓦若くはその上に上塗りを施した程度のもので、軒の出は深く、裝飾を一切施さない。後者は燒いた煉瓦で、軒の出は殆んどなく、棟、破風、軒下に浮彫を施してゐる。從つてこの二者のもつ感じは

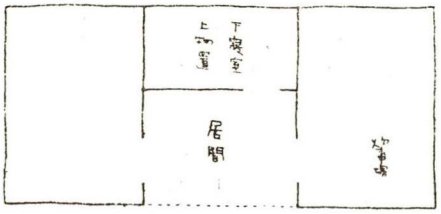




第 4 圖



第 5 圖

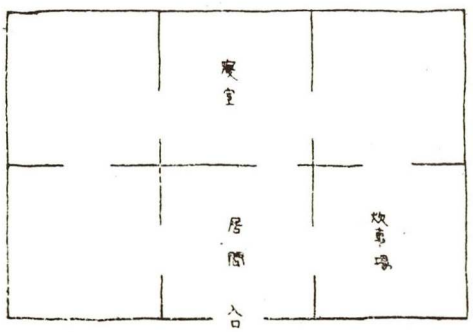


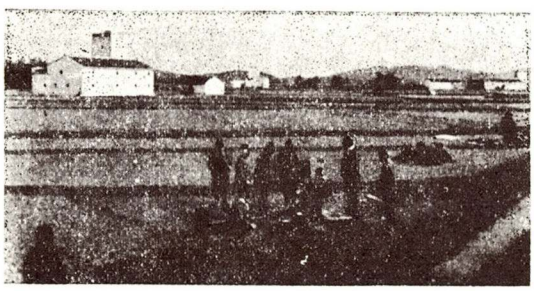
全く違つたものとなる。この装飾の多い方は町、若くは町に近いところに見られ、純農村にはない様に見うけられる。廣東の農家の主流は前者にあるものと考へられる。

前に述べたものと違つた平面を持つたものがある。それはやはり最初の第1圖から出たものであるが、その梁間が廣くなつて、中央の主室には板の仕切が設けられ前後二室となり、後方の部屋は天井を低く張つて下を寢室、上を物置とする。(第5圖)これは次の第6圖の如きものに發展する。この種のものは中庭がなく、矩形平面の切妻造棟でありかつ二階、三階建のものもある。しかもこれは中央前面の部屋以外は眞暗になるので窓を各室にあける。(勿論窓といつてもごく小さいものである)そしてその壁は白く仕上げ、裝飾を全く施さない。從つてこの種の建物はあたかも洋風建築の如き外觀を呈する。この種類に屬するものは九龍半島に於て多く見られた。

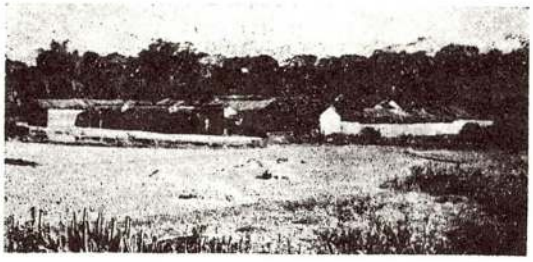
これらの家の壁は勿論煉瓦である。天井は張らず化粧屋根裏で、兩妻の壁の間に桁、母屋、棟木を渡しこれに棰をかける。主室と左右の小室との間仕切壁が上まであるから梁は用ひない。棰は丸太二つ割が多く用ひられ、この上に平な瓦を並べ、その上に瓦を葺くこの様な構造なので、屋根は薄く大變輕く見える。第4圖の種類に屬するものは棟も軒も輕い眞反りの曲線を持ち、輕快で氣がきいてゐる。瓦の葺方は本瓦葺若くはこれに類するもので、丸瓦のかはりに平瓦を用い、平瓦のみを表裏交互に並べて葺いた簡單なものも多い。(これは北支でも見られる)

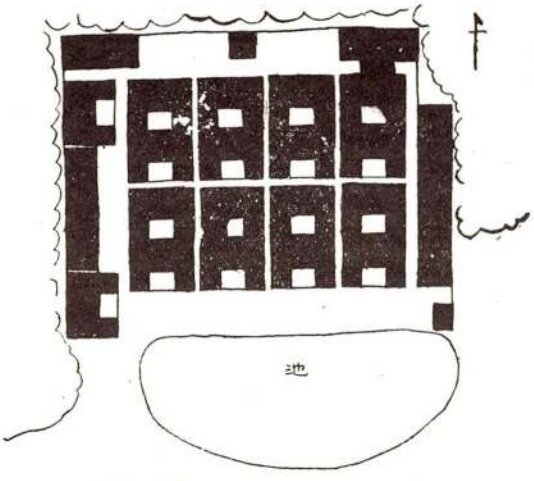
次に農村の部落の形について一言述べて置かう農村の内には規則的なある型を持つたもの、不規則的に集つたもの、一戸づゝ點在してゐるもの、三種が認められる。規則的なものは廣東北方地區に多く見られた。第7圖はその1例で、方位は多く南面とし、前に池を設ける。恐らく灌漑用のものであらう。部落はその後方にかたまつてあり、池との間に平坦な作業場がある。部落の側背の三方は多く林となる。この部落の農家は果してどれだけの大さが一戸となるのか、ゆつくり見る暇がなかつたので明かでない。細い路次に圍まれた一郭が一戸の様に見えるが、實際にはこれが前后の2戸に分れてゐることが多い。南に門を開くのは一番前の例のものだけで、あとは横から入る様にな





第 6 圖





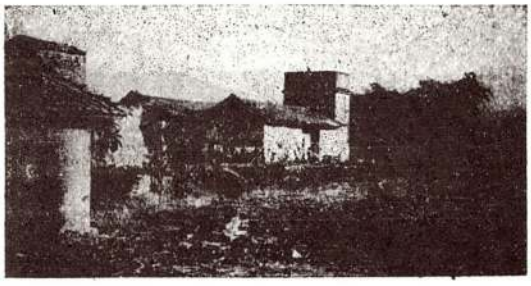
第 7 圖

つてゐる。建物間の路はごく狭く、1米乃至1米半位しかない。周圍にある建物は廐、豚小屋、倉庫等である°

第6圖や第8圖は農家が點在してゐる例である支那の農村には望樓を持つものが多いが、この寫眞にもそれが現れてゐる。中には4～5階に及ぶものがあり、その平面も可成大きいものがあるから或は他に用途があるのかも知れぬ。

次に寺院の例を一つ擧げて置かう。寺の平面は北支のものと余り變化がないが、その立面には可成の異色がある妻の壁の上部は寫眞に見る樣な變つたもので、割合に直線的な感じを持つた民家の間にこの妙な屋根が混つてゐるのは實に妙な存在である。棟にはかなりいろいろな裝飾がつくが、中支の寺院に見る反轉する如き反りは見られない內部の構架は寫眞に見る樣なもので、天竺樣や黃壁樣と非常によく似てゐる。

終りに南支の建築を概括的に批評するならば、その特徵は比較的簡單なあつさりしたところにあるといつてよい樣に思ふ。もちろん日本の建築から見たら、曲線や裝飾が相當に多いものもあるけれども、北支や中支のものに比較したならば著しくさつぱりしてゐる。支那も南方になるほど曲線の應用が多いと考へるのはいさゝか妥當でない。





第 8 圖

北印度の建築に就いて

谷一東※

はしがき。

印度の建築を、全般的に研究することは、誠に興味あることではあるが、あの四千年の歴史と、百八十萬余平方哩の地域とを持つ全印度にわたつて、系統的の研究をすることは、余りにも大きな問題で、それには少なく共、數年間の日時を要することである。そしてその記述も1冊や2冊の小冊子で盡せるものではない。そしてそれは筆者には到底不可能のことである。

故に、こゝでは地理的には北印度のみに限定しこの地方の歴史的及現代の建築物に就き、それも組織立つた學研的なものでなく、一旅行者の見た記として、極皮相な觀察をして見ることにする。

北印度と言へば、アグラ、デリー邊から北方の地域で、東南に流れるガンジス河と西南に流れるインダス河の兩大河の上流一帶の平原地と最北部のカシミヤの山嶽地帶とである。而し筆者は不幸にして、この風光明媚な、カシミヤに旅行する機會を得なかつたので、その建築に就ては、此處には除外しなければならぬ。

歴史的配景

パンジヤブ州は西域を、アフガニスタンと接して居るので、大古から、ペルシヤ、トルコ等の近東諸國との交通が開けてゐた。印度側のペシヤワルから、この國境の有名なカイバル峠を越してアフガニスタンの首都、カブールに至る道は、數千年の昔から、現代に至るまで、近東と印度を結ぶ唯一の陸の交通路であつた。

故に、印度は古くから、此等西方民族の斷へざる侵略を受けて來た。印度の歴史は、實に侵略の歴史であると言つて良いであらう。

西紀前521年から35年間、ペルシヤ帝國が、パンジヤブ州及ジンドを領有してゐた。同じく西紀前326年には、アレキサンダー大帝が、此處まで遠征して來て居る。其后様々のモハメダン王は、不斷の侵略を試み、ヒンヅー教徒である、印度の諸王と主權爭奪の爲めの鬪爭を繰返して來てゐる。

故に建築の遺跡にも、此等侵略者のものが多いしかし、それ等には、左程古いものはない。印度で現存する最も古い遺跡では、佛教全盛時代の遺跡であらう。それ等はネパール國のルンビニや、ガンジス河の中流邊りのブダガヤ等にある。殊に中央印度のサンチには、最も有名な佛教の遺跡がある、それは西紀前270年頃、外敵を退け、全印度を平定した、ヒンヅー教徒のアソカ王が、佛教を信仰して盛んに建立したものである。

この時代になつて、初めて建築に石を使ひ初めた爲めに非常に良く保存されてゐるのである。この以前の建造物は殆んど、日光乾燥の煉瓦であつた様である。

現在、北印度に於て、歴史的建築物として殘つてゐるものは、西紀十六世紀の中頃に至り、全印度を平定し、モーガル王朝の基礎を造つた、モハメダンのアクバル大帝の頃から后のものが多い。

このモーガル王朝は、印度のモハメダン統治者の最后を飾る强力な王朝で、アクバル、シヤージヤハン、ジヤハンギール、オーランジーブ等の諸帝の頃、約一世紀有半の長い間、人類の榮華の限りを盡した、黄金時代を造り出したのである。

モーガル王朝頃の建築物

この頃の豪華な宮殿やモスク或は廟等はデリーやアグラ等に一番多く殘つてゐる。またパンジヤブ州の首都、ラホールにも數ケ所ある。

ラホールにあるものでは、シヤラマー、ガーデン、ワジルカーンのモスク、バドシヤイ、マスジツト及ラホール城が主なものである。

シヤラマー園（第1圖）は、ラホール市から約五哩程の郊外にあり、西紀1637年に、シヤージヤハン帝に依つて造られたものである。數萬坪の長方形の庭園で、各々十尺位いの差をつけて三段になつてゐる。正門から眞直に運河があり、その水が瀧となつて次の段に落ち、中段で大きな池となり

※筆者は建築家

最下段で又運河となつてゐる。池の中には無數の噴水が設けられ、運河の兩側は美しい並木である、また池の眞中や周圍には赤砂岩や白大理石のテレスやパビリヨンが程良く配されてゐる。建物は總て、印度サラセン樣式で纖細な彫刻が施されてゐる。このシヤラマー園はモーガル式庭園の代表的なものとされてゐる。

ワジルカーンのモスク（第2圖）は、ラホールの舊市街の眞中にあり、周圍に人家が立て込んでゐるから外觀は余り良く見へない。而し足を一度び內部の廣場に入れゝば、誰しもその建物の色彩の美しさに一驚するであらう。廣場を圍む高い塀から四隅の八角の高いミナレ等總て煉瓦造であるがその表面は、細かい色タイルの象嵌で包まれてゐる。これはナツカシと言ふ藥掛けのタイルの一種で、その色調は赤、綠、青、黃等強い原色のものが多い。このタイルで幾何學摸樣や唐草摸樣が壁面全體に出來てゐるのである。強い太陽の光線にこれが照り輝いてゐる有樣は、實に壯觀である。

建物の形や裝飾等總てペルシヤ風の影響が強い樣である。このモスクは西紀1634年にパンジヤブ州の總督であつた。アラウヂンと言ふ人に依つて建てられたものである。

バドシヤイ、マスジツト（第3圖）はラホール城の隣にあり、廣い前庭を持つて、拜殿は三個の丸屋根を並べた樣になつて居る。眞中の丸屋根が一番大さい、これは余り裝飾はないが、全體の調和は仲々良く出來てゐる。

ラホール城は舊市街に續いた小高い岡の上にあり、こゝからの景色は仲々良い、建物は大部破壞されてゐる。西方の番人の居る門から這入るとだらだらの上り坂となり、取壞された建物の跡を西洋風の庭園にした處へ出る。殘されてゐる建物は主に住居に使はれてゐた部分で、中には二、三面白いものもある。その中でも殊に注目されるのは、昔王妃達の部屋であつたシツシ、マハルと言ふ鏡の間（第4圖）で、室內全體の壁も天井も、小さな色硝子と凸面の小型の鏡とで象嵌になつてゐる。或る一室の中に這入つて戶も窓も閉めて暗黑としローソクに灯をつけると、何萬と言ふ凸面鏡にローソクの灯が反射して丁度良く晴れた夜の星空の樣である。この城も同じく、シヤージヤイハン帝の時代に造られたものである。

アグラにあるものでは、アグラ城とタジ、マハールが一番有名である。またこゝから二十三哩程の郊外のフアテプリ、シクリにはアクバル大帝が最初に建てた城と市街がある、今は單なる廢墟であるが、非常に良く保存されてゐるので、モーガル王朝時代の王宮と市民の生活樣式を研究するに又とない良い見本である。

アグラ城（第5圖）とタジ・マハールはモーガル王朝の記念物の中でも一番優秀なものであり、又世界的に有名なものである。これ丈け說明するにも優に一冊の本が出來る程であるが、簡單に說明する。

城はアクバル大帝がフアラプリ・シクリの次に造營したもので、ジユムナ河の西岸にあり東側はこの河が自然の濠を爲してゐる。外壁は70尺もあり、總て赤砂岩で出來てゐる。バトルメントはバビロン風である三方に廻された、外濠は巾が30尺深さが35尺ある。今は全然水は這入つてゐない。內部にはモーガル王朝全盛期を語る、樣々の建物が昔の夢をそのまゝ殘つてゐる。南側のアマール・シンと言ふ門を通つて、石敷の坂道を登つて行く、登り切つた處で、右へ曲ると赤砂岩の美しい建物がある これはヂヤハンギリ、マハル（第6圖）と言はれてゐる。その樣式は他の建物が總て印度サラセン樣式であるのとは全然異なりヒンヅー樣式である、柱の表面や蛇腹に特殊の纖細な彫刻が施されてゐる。この建物はジヤハンギールが彼のヒンヅー敎徒の王妃の爲めに建てたものであると言はれてゐる。それから左へ、ジユムナ河に面した處に、全部大理石造のカス・マハールがある。アクバル大帝に依つて初められたこの城も、ジハンギールに依つて完成されたものであるが、このカス・マハールも後者に依つて造營されたものである。このパレスは幅員 280 尺の正方形の庭に面してゐる、今は芝生となつてゐるが昔はモーガル式の花壇であつたものであらう。正面に小さな池と噴水が出來てゐる。東側のジユムナ河に面した方の部屋は壁が全部大理石で、それに高貴な寶石で美しい唐草摸樣の象嵌が施してある。こゝから、タジ・マハールが正面に見える。そしてこの象嵌の中の一つの寶石にタジ・マハールの全景が寫さ

れて見える。案内人は故意に造つたものゝ様に話すけれど、それは恐らく偶然であらう。この建物の天井はドームとなつて居り、全面總て金鍍金の銅板で包まれてゐる。シヤー・ジヤハン帝が自分の愛妻、モンタズ・イ・マハールの廟タジ・マハールをこの部屋から、彼の最后の日まで眺め暮したと言ふことである。

このカス・マハールに隣して、マチチ・バーワン（第7圖）と言ふ廣場がある。こゝは元正方形の池であつた。周圍は二階造りの廻廊が巡らされてゐる。この廻廊は二本併立の細い柱から、サラセン風のアーチ等總て白大理石である。この一隅に三つのドームの付いた可愛らしい小型のモスクがある。これも全部大理石である。宮中の王妃達の特別禮拜所であつたものである。

この廣場の眞西が、デイワン・イ・カス、即ち謁見所である。開放された廣間で一種のポーチである。丸柱の柱列が高い天井を支へてゐる。王座は一段と高い所にあり、マチチ・バーワンの廻廊から這入る様になつてゐる。

以上說明した一連の建物の外に、一寸離れてモテイ・マスジツトと言ふモスクがあるが特に取立てゝ述べる程のものではない。その他の大部分の建物は、大抵破潰されて、今は英國兵の兵舍となつてゐる。而してこのアグラ城は、デリー城に比較して非常に良く保存されてゐる。そしてモーガル王朝の城の中で一番立派である。

タジ・マハールは世界中で一番有名な建物であると言つても、必ずしも過言ではあるまい。實際この建物程美しい物語を持ち、又世界中の詩人や文士によつて、その美を謠はれたものも少ないであらう。

タジ・マハールはシヤー・ジヤハン帝によつて彼が限りなく愛した、皇后のアルジマンド・バヌーに先立たれ、追憶の情止み難く、彼女の記念碑として西紀1630年にこの廟の建造を初めたものである。この工事に要した年月は實に22年間で、その工費は三千萬ルピー（邦貨約四千萬圓）と言はれてゐる。

北から南へ流れてゐた、ジユムナ河が、アグラ城の下手から、大きなカーブを描いて、東北へ曲つて居る處の、その南岸の南北に長い長方形の廣大な敷地の北側の中央に、この廟は建てられてゐる。南側の中央には赤砂岩の雄大な樓門があり、こゝから巾が約三間位の運河が、廟の眞前まで續いてゐる、運河の中には無數の噴水が設けてある運河の西側が石敷の歩道で、その外が二列に植つた、サイプラスの並木となつてゐる。

本堂は、一邊の長さが313呎で高さが22呎の正方形の壇の上に建てられた八角の主體の上に、サラセン式の尖つた丸屋根が乘つてゐる。高さは壇の上から187呎で、全部白大理石で包まれてゐる壇の兩端には、高さ137呎の獨立のミナレが立つてゐる。建物全體は非常に均整の取れた立派なものである。

本堂の內部は、丸屋根の眞下に八角形の廣間があり、その中央丁度建物の中心に、美しい白大理石の透彫のスクリーンに圍まれて、アルジマンド・バヌー——愛稱、モンタズ・イ・マハルの墓標が安置されてゐる。床のモザイクからその他總てのものが整然とした均整式である。唯一つこの均整を破るものは、この墓標に並んで置かれた、シヤー・ジヤハン帝の墓標である。それは床のモザイクの摸樣を見ても明らかに後から置かれたものである。

黑大理石の自分の廟はついに完成せず、こうして愛妻の墓の横に、永への眠りについてゐるのである。それはローマンスの多い、この建物に相應しいものではないか。

タジ・マハールの正門に立つて、この建物を、銀色に光る運河と、綠の並木の彼方に望み見たとき、實に全體の調和の良さに驚くのである。風の無い日にはこの純白の建物が、くつきりと運河に映つて、水の上のが本物ではないかと迷ふ程である。外觀は他の同時代の建物に共通な、ひつこい彫刻はない。非常にあつさりとしたものである、唯腰邊りの處に、唐草摸樣の浮彫が出來てゐるが、非常に優れた技術を持つて居り、その摸樣や技術から見て、ギリシヤ人の彫刻家の作ではないかと思はれる。

本堂の背面、ジユムナ河に面した側は廣いテレスになつて居り、左手寄りの彼方に雄大なアグラ城の全景が見える。それから正面の對岸には、丁度このタジと對時した位置に、黑い建物の基礎丈

けが見える、これはシヤー・ジヤハンが自分の廟として愛妻の廟の白に對して黒大理石に造るべく初めたのであるが彼の死に依つて中止されたのである。

このタジ・マハールを見るのには夕方と月夜が最も良いとされてゐる。日本には「日光を見ずに結構とは言はれぬ」と言ふ諺がある様に、印度には「タジ・マハールを見ずに結構と言ふな」と言ふ諺がある程である。

デリーにあるモーガル王朝頃の建物では、デリー城、フマユンの廟、クタブ、ミナール等であらう。

デリー城(第9圖)は地勢の關係上、アグラ城程外觀に雄大さがない。外壁は完全に保存されてゐるが、內部の建物は、東側のジユムナ河に面した方の一部が殘つてゐる丈けで、他は全部取毀されてゐる、そして其跡に殺風景な煉瓦造の英國兵の兵舍が建ち並んでゐる。この城は、西紀1639年から9年間かゝつて、シヤー・ジヤハン帝により造られたもので、裝飾や建築材料は、總てアグラ城と變りはない。唯この建物でアグラ城と異なる點は、非常に多くの噴水や瀧や泉水を、住居であつた部分の建物の中に取入れてある事である。こゝには香水の噴水や大理石づくめで、周圍に泉水を巡らされた浴室等享樂的な設備が、遺憾なく出來てゐる。そして一つの廣間、——それは謁見室であるが、——にはその昔寶石づくめの孔雀の形の王座があり、周圍の扉は總て銀で出來てゐたとのことである。そしてその壁の一隅にペルシヤ語で「若しも此世に、天國があるものなれば、それは即ち此處である。此處である。此處である」との意味の文字が象嵌になつてゐる。

この素晴らしい建物を見て、如何にモーガル王朝時代の宮殿內の生活が華美であり、敗頽的な空氣に滿ちてゐたかと言ふことが良く察せられる。

フマユン帝の廟(第10圖)はデリー市の郊外にあり、大體の形はタジ・マハールと良く似てゐる而してこの建物の方が先に建てられたもので、本當はタジ・マハールがこの廟を見本にしたものである。

建物はブハリマ園と言ふ廣い庭の中にあり、豪壯な門と塀で圍まれてゐる。中央の廟は、赤砂岩の高壇の上にあり、下部の廣さは、156呎ある。高さはドームの最高部で125呎ある。中央は八角の塔で、屋根は綠の藥掛タイルを張つた丸屋根になつて居る。四方の隅に、大ささが不同のミナレがある。外部は赤砂岩で積まれて居るが全體に白大理石で象嵌が出來てゐる。窓には赤砂岩の大理石との美しいサラセン模樣の透彫が嵌めてある。外觀は使用材料の持つ重厚な赤色の爲め男性的な感じである。タジ・マハールの優雅な女性的なのと良い對照である。內部はタジ程精巧な裝飾はない、中央の、八角形の室の中央に、フマユン帝の墓が安置されてゐる。

この廟は、モーガル王朝最后の皇帝が、英國軍との戰に破れて、その敗殘の身をこの廟の中にかくしたと言はれてゐる。

このフマユン廟から南へ、デリー・ムツトラ道を、約九哩行つた所に、有名なクタブ・ミナールがある。此處の一番最初の建物はクワツト・ウル・イスラムモスクで、西紀1193年に初められたものである。此處にはサラセン樣式は未だ見えない印度風のひつこい緻密な浮彫が壁面全體に施してある。また、こゝには有名な鑄物で出來た鐵の柱がある。直徑が約一尺四五寸あり、高さが24尺程ある。この柱の起原に就て種々の傳說があるが、製作年代は確實には判らない樣である。而しこのモスクの建築よりづつと古く他から持つて來たことは間違いない。

このモスクの横にクタブ・ミナールの塔(第11圖)がある。これは戰勝記念塔で大きな圓柱の樣な形をしてゐる、モスクと同じ頃、クタブ・ウドデイン・マイバクによつて建てられたものである。これは其時代としては驚異的な高層建築で今頃の所謂スカイ・スクレパーである。五層樓で高さは238呎ある。各階に突出しになつたバルコニーが廻されて居る。平面な圓形で、一階で直徑47呎あり最上階で9呎である。下から三階までは赤砂岩積で、半圓と角形のフリユーライングが垂直に付いてゐる。上部の二階は白大理石が張つてある。この建物は西紀1368年にシヤー・チユーラクと言ふ人によつて改築されまた1803年に地震の爲めに大破し、1829年に再び修理されたものである。

デリーは過去に於ける征服者達が好んで首都を

設けた處で、既に七つの都が興り、そして亡びてゐる、モーガル王朝は實にその第七番目である。

英國は十余年前、印度政廳をカルカツタから、この歴史的の地に移し、第八番目の首都を設けたが果してこの新都の運命は如何なものであらうか。

モーガル王朝時代の建築物では、以上述べた、以外に印度各地に相當の數散在してゐる。筆者の居た、パンジヤブ州南部のパテイアラ侯國にも、ピンジョウ園と言ふ、ラホールのシヤラマー園にも匹敵する庭園がある。又同じくパテイアラ市の郊外にある、バドル・ガード城はアグラやデリーの様に豪華なものではないが、中級の城の見本としては立派なものである。

現代の建築

印度は英國の支配下にあるとは言へ、完全に英領となつて居るのは全土の約六割で、殘りの土地は、大小數百の土侯國である。此等土侯國の支配者は、日本の封建時代に於ける大名の様なもので英國の保護下にあるとは云へ、大なり小なり一國の君主である。だから彼等の宮殿には、仲々立派なものが多い。

パンジヤブ州で一番大きい土侯國は、パテイアラであるが、此處の古い城と現在の君主である。マハラジヤ・ヤダビンダー殿下の宮殿は全印度でも有數の立派なものである。その宮殿の敷地は約二十萬坪程あり、モーガル式の庭園や花壇に圍まれた、三層樓の堂々たる建物である。様式は相變らず、印度サラセン式で、外部は赤砂岩と、その石を碎いて造つた一種の塗壁で包まれてゐる。壁面全體を施された、サラセン模様の浮彫は、壁が未だ乾き切らない柔かい時に、型を置いて、堀り取つて造るのである。

パテイアラの古い城（第12圖）はバザーの中央にあり、モーガル王朝時代のものと同一の構想で出來て居り、外城と內城になつて居る。內城の方は、今は先代マハラジヤの王妃達の住居になつて居り、男子禁制の世界であるが、外城の方には博物館、ダーバー、ホール（マハラジヤの公式謁見所）、其他政府の役所がある。ダーバー、ホールは長方形の廣間で、約二百坪もあらう。天井の高さは、三十尺ある。壁は薄綠色で、サラセン模様が描かれてある。正面の中央は高壇となつて居り、こゝに足にライオンの彫刻の付いた、黃金づくめの王座がある。その背後には薄物のカーテンが張られ、マハラニや他の妃達の座席である。高い天井からは、十數個の素晴しい硝子の大シヤンデリヤが吊つてある。その一個の大きさは、直徑 8.9 尺位はある。佛國、ベルサイユのそれよりはるかに立派である。

このダーバー、ホールでは、今でも毎年數回、あのアラビヤン・ナイトの物語にある様な、王様が臣下の敬禮を受ける儀式の美しい繪巻が繰擴げられてゐるのである。

この様な封建時代其儘の様な生活は、土侯國に多いので、英領印度の方には、余りない。

次に、印度が英帝國の支配下になつてからの建築物としては、殊更取上げる程のものもない。カルカツタのビクトリヤ女皇記念館は、代表的なものであるが、タジ・マハールの美には遠く及ばない最近の大建築は、ニユー・デリーの印度政廳である。古都、デリーの郊外に廣大な地を定め、これに、現代式の都市計畫を實施してゐる。政廳の建物を中心に廣い道路が放射線型に走つてゐる。此處に、全印度を統治する、あらゆる政治的な建物や英人官吏の社宅、または壯麗な王侯の別莊が廣い庭を持つて建てられてゐる。

この新首都の計畫は、西紀1913年に初められ、1931年に完成し、それまでカルカツタにあつた政廳をこゝに移したのである。

中央の政廳は、二棟になつて居り、左右對照の均整を保ち、なかなか美事な建築である。外裝に赤砂岩を使つた處は他の城と同じである。

一般住宅及民家

印度に限らず、どの國でも同じことであるが、その國の本當の民情を知らうと思へば、どうしても都會を離れ、外國の影響の少ない田舍の一般の住家を研究しなければならぬ。其處に、其國の本當の姿を見出すのである。

印度の城、宮殿或は寺院等の大建築が殆んど總てサラセン様式を採用してゐるのに比して、一般の住宅や民家には、そうした外部よりの影響は少なく、地方々々の特色を充分發揮したものが多い。それは、その土地の氣候と、手近に得られる建築材料に、多く支配されるのである。

三一頁から三六頁（目次に記された「城郭と国防」と思われる）は、各所の原本を照合したが、いずれも切りとられている。

表紙に「一部削除」の朱印があることから原本発行時に三一頁から三六頁が削除されたと思われる。

（不二出版）

茶室巡り第八回

大和路の茶室 ・3・ 慈光院の不昧室と中の坊の茶席

岡田孝男※

大和小泉の慈光院にある石州好の茶室は、主人床の席として、有名である。

國鐵大和小泉驛で下車して8、9丁昔ながらの町家の間を、町はづれ迄行けば、小高い丘の上に、茅葺の慈光院が物靜かに建つてゐる。

こゝは、片桐石見守貞昌が慶安年中、その父貞隆の菩提追福の爲に建てた庵寺でその書院に連接して、2帖臺目主人床の席不昧室がある。

躙り口から上ると、普通の席ならば、正面に床の間があつて、一行物の文字が大きく目に入るのであるが、こゝでは、中柱の蔭になつてよく見えない。床の間は點前疊の左にあつて、客の方からは見えにくいに反し、亭主は左をむけば花も、掛物もすぐ身近にあつて、よく見ることが出來る。

これは、石州侯が、獨りを主とし、靜かに點茶しつゝ、床の間のものを觀賞する爲に好んだ由であるが、この主人床の例は、西芳寺湘南亭にも見られる。湘南亭は、利休の子少庵が隱棲して、客もないので、獨りで樂しむ樣に好んだと傳へるが、不昧室の方は、この意味ともう一つ、客がすべて臣下の者だので殿樣として自分を主としたとも云はれる。大和小泉は石州侯の封地であるからそこへ歸つて、ゆつくり臣下を相手に茶事を催した有樣が眼に見える樣である。

× × ×

天井は竹挂椽の平天井で高さ6尺8分、樫皮附の中柱に、二重棚、出爐の構えで、杉面皮の床框のついた奥行1尺7寸の板床は、點前疊のすぐ左にあり、壁は塗り廻しになつてゐる。

窓は北側と東側に少し喰ひ違ひをつけ、風爐先窓も割に大きく、壁も程よく古びて、明朗な中にも古風な雅致に富み風格の高い席である。續きの二帖は次間ともなり又大勢の時は襖をはづして廣く使える。

× × ×

片桐石見守貞昌は、片桐且元の弟貞隆の子で、慶長10年に生れ、大和河內に1萬石を領した大名である。

寛永10年京都智恩院火災後の復興に普請奉行となり、ついで關東郡奉行となつて、水害復舊等の土木工事につくした。

茶の方は道安の門、桑山左近について學び、寛文5年11月8日には、將軍家綱の命により、柳營で點茶してゐる。その時の狀況は、寛文錄によれば、營中黑書院の圍ひで行はれ、午の刻に將軍が圍に入られると、相伴役の酒井雅樂頭忠清、阿部豐後守忠秋、稻葉美濃守正則、久世大和守廣之が續き石州の點前で家綱に奉ると、家綱これを飮み、その殘りを雅樂頭はじめ相伴の諸臣が、茶碗に移して喫したと書いてある。そして道具は、

御掛物　的雲二字無準筆
御花入　花は寒菊但薄板敷青磁砧
御釜　古田織部筋唐銅釜
御水差　繩簾
御茶入　袋段子　若狹盆哉　四聖坊　但御茶上林　峯順　初晉
御茶碗　割高麗
御茶杓　小堀遠江守作

と記してあるが、織部の釜と遠州の茶杓を使つたところに、興味を覺える。織部は二代將軍秀忠の茶道師範であり、遠州は三代將軍家光の師範であり、そして石州は將軍家綱の茶道師範となるのである。

ついで懷紙3ヶ葉に所謂300ヶ條を書し、將軍家の茶道となつてからは、諸大名これにならひ、天下の茶道は、石州流で風靡した。

寛文戊8年に致仕、正寶元年11月20日に年69才を以つて、大和小泉で卒し、大德寺高林庵に葬られた。三寂宗關と號す。

石州侯の歿後は、藤林宗源、怡溪和尙、松平不昧侯、松浦鎭信侯、淸水動閑等の諸派が分れ300ヶ條を根據として、石州流は天下を風靡し、石州

※大阪三越住宅建築部

流に非ざれば、物が云へないと云ふ盛隆さであつたが、明治維新以後急に衰微し、今日ではその宗家すら有るか無きかの有様となり、他の諸派、殊に千家流と位置を轉倒するにいたつたのは、盛者必衰の理に他ならぬ。蓋し、石州流はその愉安に狎れ、自派の維持については、何等の苦心を要しなかつたに比し千家では、僅かに或は紀州侯、或は加賀前田侯、或は高松侯などにすがつて、維持に苦心して居たから、一朝維新後の不況時代が來ると、石州流は一擧にして消滅したに反し、千家流は漸時持ちこたえて、やがて隆盛になつて來たのである。時恰も老英國退陣の時機に際會し、ここでも歴史の一斷面を見て感慨深いものがある。

× × ×

さて石州侯の茶道に對する卓見を二三書いてその面影をしのんで見やう。

侯が煙草盆の火入に唐物を使つてゐたのを或人が、これは火入には惜しい、香爐に使はれたらと奬めたところ、火入としては上の部に入るが、香爐にすれば下の部に入る。かくては道具を殺すものであると云つて退けた卓見、又主客が同じ道具を所持する場合、客のものより劣つた品ならば使つてもよいと云ふ意見はよく知られるところである。

又身分相應の茶を樂しむべしとて、

「茶の湯のさびたるは吉、さばしたるは惡敷。大名などの侘びたる者の眞似して、さばしたるは相應せぬ事に候」

理窟の多い茶をけなして、

「惣じて茶の湯は慰み事にて候へども、道理は無きものと御心得可被成候。理をせめ、理にかなふ如くのみすれば散々に候」

茶の湯は見せ物でないとて

「數寄は皆見せ物と人々存する事にて候も左近等（師の桑山左近のこと）は一切見せ物にて無之由、人々にも物語被仕候」

等明識卓見の傳えられるものが多い。

× × ×

中の坊の茶室は、丸窓の席として有名で當麻寺の宿院、中の坊にある。石州侯の好みと傳えられるが確かな記錄はない。（寺の方にも石州侯の方にも）しかし、石州侯所持の道具や寫本數百點が明治の中頃、大和小泉の慈光院や、片桐家から讓られて當寺に保存してある。

席は四帖半で、直經5尺4寸の丸窓は、次の間との境にあり、引違の障子が建て出入も出來る。これはお附の者が控へる次間との連絡をはかつたものだと云はれる。

床の間はその左に南面してあり、疊を斜に切つて、奥行の淺いバチ形の板の蹴込床で、竹の柱、竹の落掛、竹の貝の口から出來てゐる。その左の西側は、下地窓と1間3枚障子建の貴入口があり、南側は中連窓と躙り口がついてゐる。躙り口は片開の板戸が外側につき、內側に片引の障子が嵌められ、他では見ない手法であるが、この席の様に貴入口の障子が腰なしで下部まで紙貼の場合にはそれに續いた躙り口が粗野な板戸では、調和がよくないので、紙障子にしたものらしく、意匠としては感服できる。

この室に坐つて見ての感じは、大丸窓と、貴入口のあるせいか、落ちつかぬ感じである。どちらか一つを無しにすれば、もつとしつくりするのではあるまいか。この丸窓と、竹を使つた貧弱な床の間の形式は、よほど後のものであるから、若し茶室の建造が石州侯の時であるとすれば、後に改惡したものであらう。

又疊の寸法を實測して見ると、不昧室は3.15×6.3の普通の疊であるが、中の坊の茶室は3.01×6.05 の少し寸のつまつた疊であるから、或はこの席は、始めからこゝに建てられたものでなく、他から移された際に寸を縮められたとも疑はれるし又もとの建物が茶室としてでなく持佛堂などではなかつたか。持佛堂の丸窓を次の間の方へむけてくつゝけ、その餘つた壁面に竹を以つて貧弱な床の間を設へたのではあるまいかと思はれる。しかし記錄がないから確實なことは判らない。

この隣りに五帖の席がある。これはその南側に明治になつてから倉庫が建てられたので、多少變つては居やうが、出書院のついた茶室である。ここの疊は普通の寸法である。茶室はもう一つ、二帖中板の席が居間の裏の方にある。よく整つた席であるが、時代はすつと下る様である。

不味室と中ノ坊茶室の寸法

不味室寸法

（昭和15年11月岡田實測）

平　　面

二帖台目出爐　次ノ間二帖。

疊　3.15～3.22×6.33　床ノ間奥行1.05×間口3.98　柱杉面皮.35

天　　井

廻椽面皮セイ.12～.10　竹縁竹徑.07　野根板　床ノ間天井杉1枚板　次ノ間天井竿縁.07×.07杉板張　天井高6.08　床ノ間天井高6.91

西　　側

床柱面皮見附.22　床框面皮.28×.15　落掛面皮.11×.25　内法高4.97　壁塗廻し　中柱樫皮　附徑.17　小壁下ノアキ2.05　無目スス竹徑.13

北　　側

爐先窓内法高1.93巾1.73　敷居.09タタミヨリ.67上り　鴨居.085　釣棚厚.04タタミヨリ2.2上り　釣竹徑.05　中連窓内法高2.42　敷居.1タタミヨリ1.94　鴨居.095

東　　側

躙り口内法高2.35巾2.20　方立.09　小壁.45　中連窓内法高2.52　敷居.1　鴨居0.1

南　　側

次ノ間ト取合襖引違内法5.68　茶道口高5.3巾2.1

中ノ坊茶室寸法

（昭和16年3月岡田實測）

平　　面

四帖半台目切　疊巾3.01～3.05長6.06～6.05　柱徑.28丸

天　　井

平天井ハ高サ6.5　廻縁白竹徑.14　竿縁面皮.1×.04蒲天井　掛込天井ハ棰カイフ丸太3本徑.15　男竹4本徑.13　女竹8本徑.06　小舞女竹.06及杉及白竹ヲ混ズ　杉皮葺

西　　側

貴人口内法高5.26　障子框.06×.07　桟.04×.02　鴨居.1　下地窓内法高2.7巾1.82

北　　側

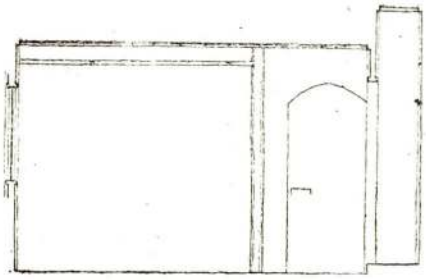
床ノ間内法高5.1巾2.35　床柱竹徑.3　落掛變形竹徑.22　板床厚.11　貝ノ口竹.28　柱釘高2.65及3.75　中釘高3.58　丸窓徑5.44　タタミヨリ小壁.13

東　　側

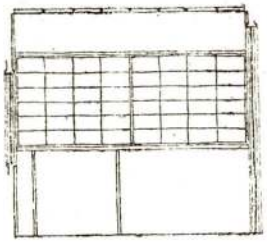
五帖ト ノ取合襖内法高6.3　巾違襖2枚2.0及3.7引違　茶道口内法高5.0巾2.2

南　　側

躙り口内法高2.35巾2.22　障子框.035×.08　桟.02×.04　中ノ小壁.67　中連窓内法高1.71巾3.7　中敷居.12　方立.09　鴨居.09　上ノ小壁.44　軒桁磨丸太徑.35



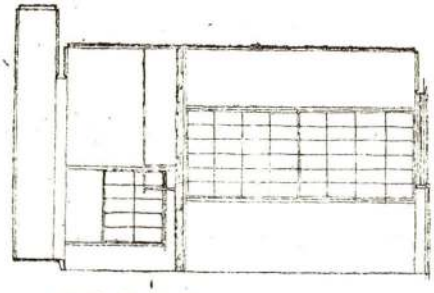
不昧室南側



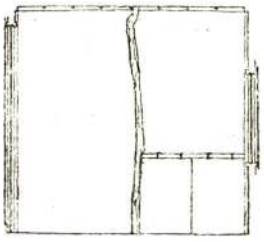
不昧室東側



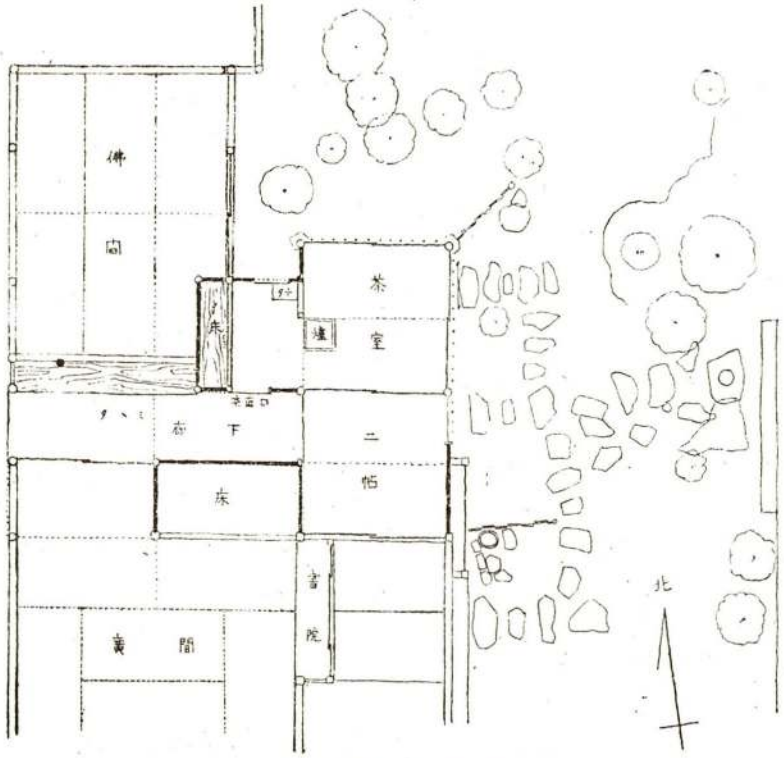
不昧室床ノ間



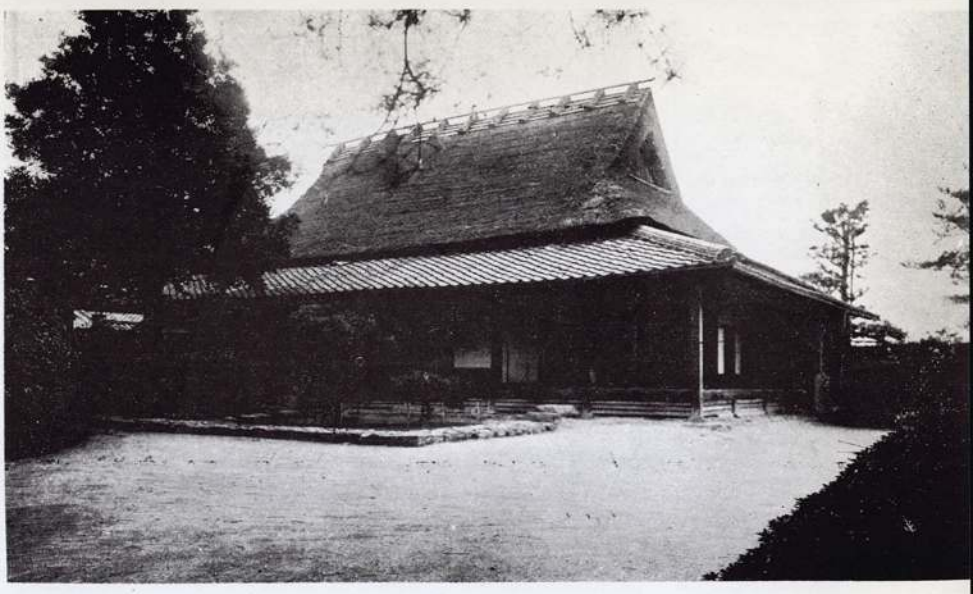
不昧室北側



不昧室西側



慈光院不昧室



第1圖　慈光院
（岡田寫眞）

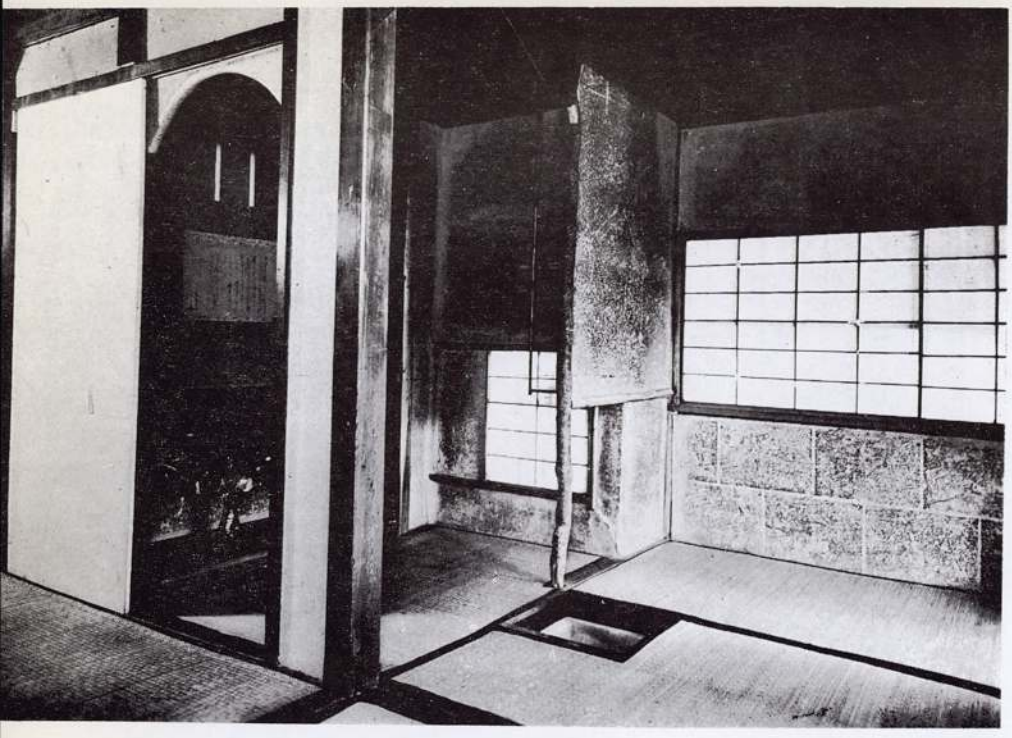
小高い丘の上に建つ茅葺の堂で、寫眞は南より見た姿である右の端の方、書院の椽續きに不昧室の席がある。東の方が開けて、遠山の眺めが非常によい。

大和路の茶室・3・不昧室と中ノ坊茶室・岡田孝男



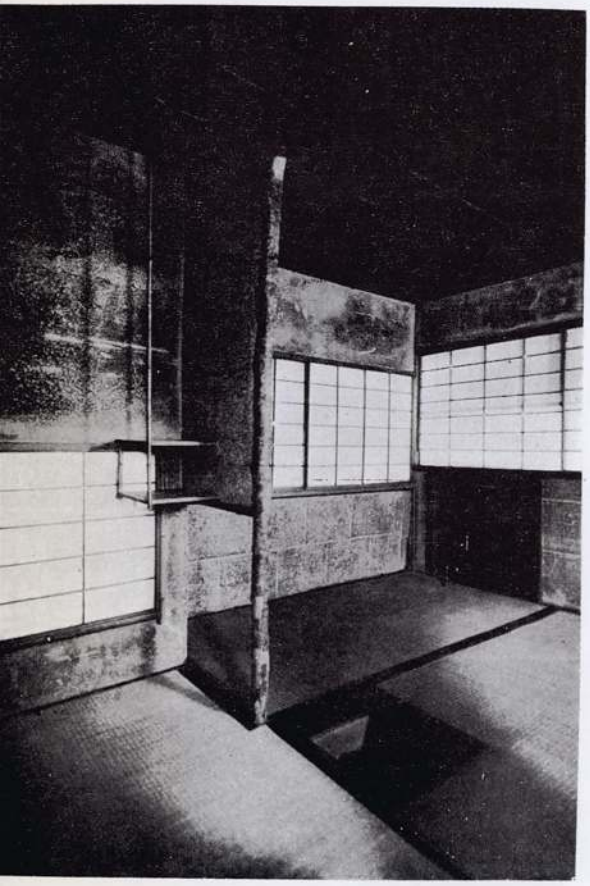
第2圖不昧室外觀
（岡田寫眞）

椽續きにある茶室で突上げ戸の下が躙り口である。庭もこゝだけは、茶庭の樣に植込である。左窓のところの刀掛は低い樣であるが、これは後に窓を大きくした爲に下げたものと思はれる。



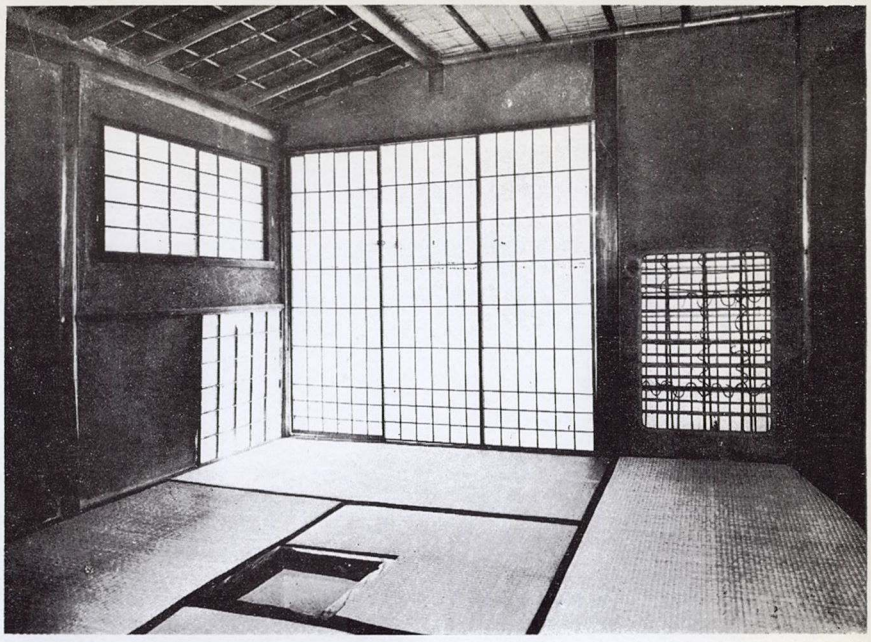
第3圖　**不昧室内**より、床の間を見る（岡田寫眞）

次の間二帖の襖をはずして、床の間の方を撮つたものである。左が疊廊下、手前に二帖の室が少し見える。廊下から華燈口で茶室へ入ると、點前疊があり、中柱、釣棚爐先窓、出爐等は定石的であるが、その左の床間が異例で、客の方からは床の間の掛物や花が、見えにくいのに反し、點者は身近くに掛物も花もあつて、ゆつくり觀賞することが出來て主人床の稱がある。



第4圖　**不昧室内**躙リ口を見る（岡田寫眞）

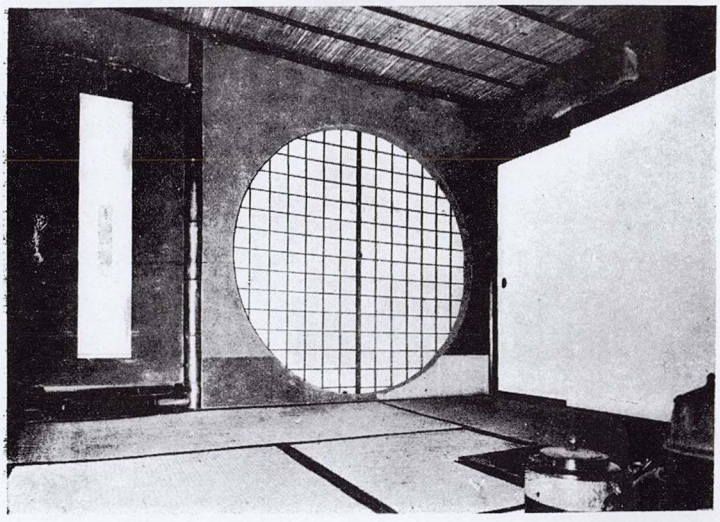
躙り口の左右にある中連窓は2寸5分程喰ひ違つて、面白く、明朗な中にも古風な雅味と、石州侯好みらしい品格の高さを感じる。



第5圖　**中の坊丸窓の席**

（岡田寫眞）

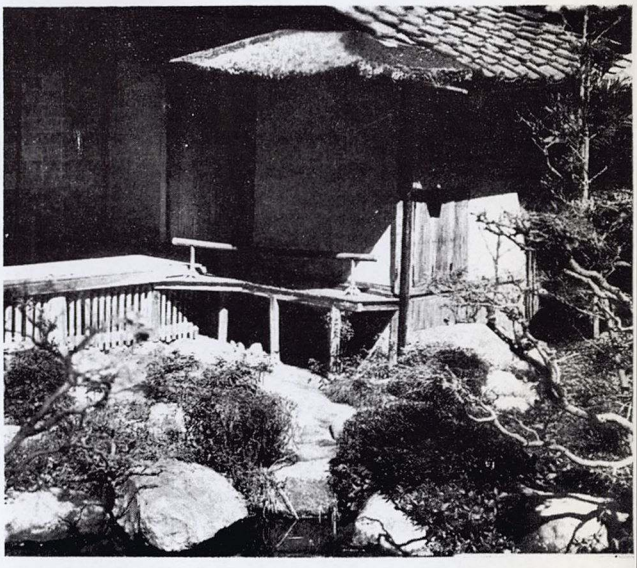
1間3枚の貴人口と、その左隣りに、紙障子の躙り口がついてゐる。こゝには外側に片開の板戸がつき、内側に紙障子をたてたもので、意匠的には佳は考であると思ふ。右の方に貧弱な床の間が少し見える。



第6圖　**中の坊丸窓の席**

（數寄屋聚成ヨリ）

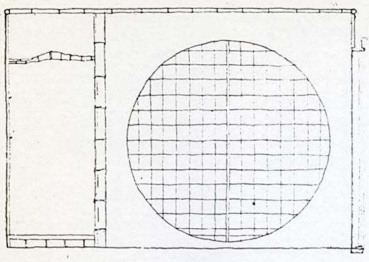
床の間は竹の柱、竹の落掛、竹の貝の口の貧弱なもので、その右の丸窓は有名ではあるが、樣式的には時代が下る。丸窓は他に京都高臺寺の吉野太夫の席にも吉野窓として、この位の大きいのがある。



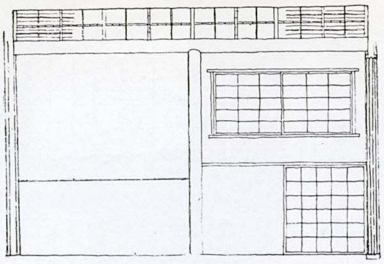
第7圖　**中の坊丸窓席外部**

（岡田寫眞

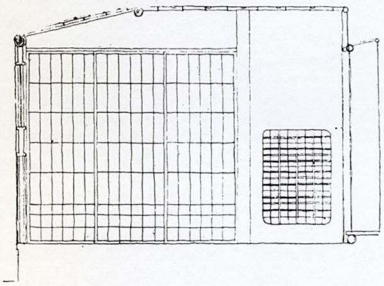
池にのぞんで檜皮葺の庇のあるところが四帖半の茶室で、濡椽と躙り口が見える。左の廣椽の内側は國寶の書院である。



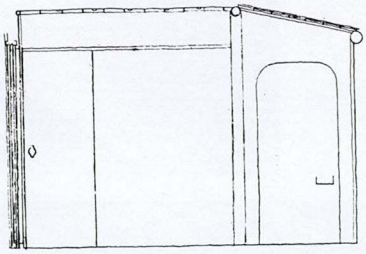
中ノ坊　丸窓席北側



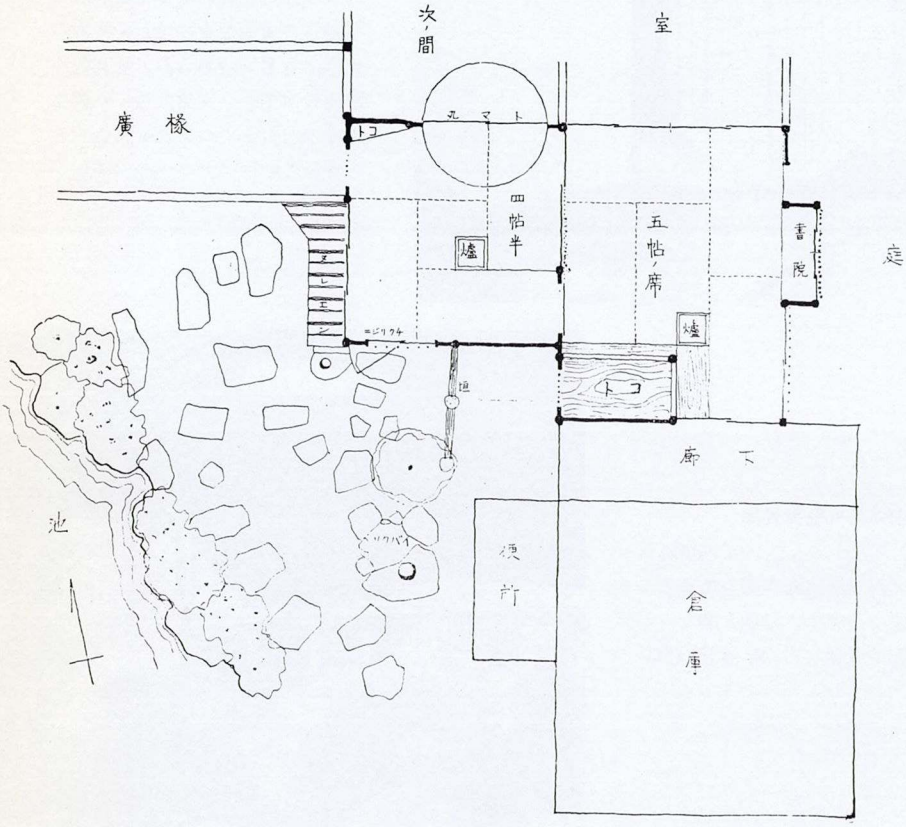
中ノ坊　丸窓席南側



中ノ坊　丸窓席西側



中ノ坊　丸窓席東側



當麻寺　中ノ坊茶室圖

建築資材界を返り見て

規格統制に補足を提唱する

古塚正治※

時局の何たるかを解せざる徒輩、時局に便乗派と稱して得意滿面たる奴輩、過去の夢を連續的に見てゐる彼等の連中を一日も早く迷夢から醒めさせなければならない。……何うだ此時局の サ中に料理屋や待合の復盛つたら……これで東亞の新生が期待出來ると云ふの？。現在の日本は外の問題が急迫を告げてゐる許りではない同時に、或ひは考へ方に依つては內の問題にもより重、且つ大なる幾多の問題が其儘に殘されてゐるとも考へられる。

またよく聞く話ではあるが、統制經濟に入つて未だ日なほ淺い今日に完全なる組織化を望むことは無理だと……斯う云ふ見方も一面の道理はあるが、實情は言ふは易くして隙間がかゝると言ふ譯で、未着手の儘に殘されてゐる部門が餘りにも多過ぎてゐる事を物語るものである。御多分に漏れず吾々建築界にも多くの部門が名稱こそ何々組合つてな案配化はせられて來たが、其實舊體制其儘に繼續した理念のものが餘りにも多い事は誠に遺憾千萬の極みである。

吾々建築界に指導的立場を占めると自負する面々こそ自ら反省三顧各々其職域奉公の萬全を期す可きである。

一片の鐵屑にさえ統制下にある今日、幾多の貴重なる建築資材の使用に當つて果して經濟的に、合理的に費消せられてゐるの？何う？。そして若し總ての建築資材が眞に合理的に經濟的に費消せられるとしたら、何んな結果をもたらすもの？。

此建築資材の部門こそ率先して合理化實踐に邁進しなければならぬ一大經濟問題であるからである。

煙草の空箱回收に依つてさえ１ケ年數10萬圓の金額に上ると當局が發表してゐるのに比べて建築資材が合理的に處理せれるとしたら私の極めて大ザツパな推算に於てさへ少く共２、３ 億圓の驚く可き富の餘剩をもたらす大きな問題である。斯くも極めて重大なる資源餘剩が何故に今日まで社會は注意すらせず、政府當局は等閑に見逸つて來たのが不思議千萬な話である。此の理由こそは建築資材の複雜性に據るものであつて、餘りにも多岐多樣なる爲め其合理化した經濟系統に置くと云ふ技術は所詮建築界の最も有能練達の士に待つ他に道が無い。にも不拘政府當路には建築界の事情に餘りにも疎々して返り見ないと云ふ弊があり、他面斯かる重大事實にこそ當路に建議す可き筈の既存の學會や協會は舊體制其儘に日を送つて其爲す可き國家への奉公の道に左思右想の狀態に日を送つてゐると云ふのが現狀であると云つても好いのでは無い？。

何が今日一番速く建築界に提唱し、實踐に移さなければならない問題なの？。此點にも數限りない問題が其儘になされてゐるが、其內の一つである資材確保の點を取擧げて私の提唱に識者の一考を煩はさうと思ふ。そして茲には繁を避けて其の內での極めて僅かな引例に依つて解り易く說明を進めることゝしよう。

先づ現在最も多く建築せられつゝある工場建築に引例すれば

極めて特種な場合を除けば大體に於て工場建築の梁間と軒高さと云つたものには個々夫れぞれが微妙な（私は强いて此の微妙と云ふ言葉を使用して世の建築家を嘲笑する氣持にさえなる）寸法の生ず可き譯さえないと考へてゐる。若し設計圖と規格を以てすれば十種類位にしか當るものではない。規格化することに依つて設計依頼の空時と空費の節約が生じて來る。勿論餘剩建築家の別の意味に於ける國家への職域が拓けて來る。

屋根の構造にしても近時採光と通氣の關係に新しい工夫が採用せられて、其種類も幾何か增えたに違ひないが、それさへ實際問題として考へた場

※古塚建築事務所長

合、新工夫と云ふのが最上のものではない、夫れには新しいものへの附きものたる雨仕舞其他に更に考案せられなければならない缺點が考へ合はされる。整理すべきものを整理して標準型を制定するとせば、これまた十種を出るものでは無い。

建築物中比較的單純性のあるそして數多く建築する必要に迫られてゐる工場建築こそ設計基準による規格を制定すれば、監督官廳の手續にも何の手間を要しない、取扱方に依つては配置圖に何號型と明示する丈けで事が運ぶし、工事進行も非常に神速になつてスラスラと運ぶ便利がある。

更に規格化する事に依つて如上の經濟の他に資材に於ても莫大なる餘剩力が生じて來る。假りにスレート壁とスレート屋根葺きとを檢討して見よう。現在までに行はれてゐる如うに軒高や屋根面に自由寸法を許す事なく、スレート寸法に依つて定めた規格化を主張しようと云ふのが、また私の提唱の一つでもある。

現在我國に於けるスレート製產額は一ケ年約六千萬枚、貼り坪に換算して、約壹千三百七拾萬坪を葺き得る數量である。假りに木造工場の壁及屋根全部をスレート葺きとして一棟木造制限による建坪二百坪の建物と假定して凡そ四萬棟を葺き得る製產額に相當してゐる。然るに現實に葺き上げた一ケ年間のスレート葺きが、何千萬坪になつてゐるかと云ふ統計的數字は了らないが、私の提唱する壁高をと屋根葺面に考慮せられないが爲めに現場で切り捨てられて、アタラ土に埋れて行く量が幾許量に達してゐる？、量り知れない多量に上つてゐる。

一面原料資材の不完全さから運搬と施工の內に破損して行く量も可なりに增加してゐる事實も否む譯には行かない。けれ共建築設計規格なき自由無統制の爲めに切り捨てられる量は、スレート業者の側から云はしむれば、貼り上げ實坪數に少く共一割乃至二割もの量を見越して現場へ搬入しておくと云ふのが現狀だと云ふのである。即ち私の提唱するスレート葺き建築物に寸法の規格を實施することに依つて優に一ケ年間約六百萬枚乃至一千二百萬枚、葺き坪に換算して二百五拾萬坪乃至五百萬坪、公定價額に依つて金額化すれば、約參千參百七拾五萬乃至六千七百萬圓の資材が餘剩として浮んで來ると云ふ事實である。

然も此の設計規格たるや極めて簡單なるものにして要は壁面スレート葺きは一枚、一枚半、二枚云々と云つた具合にスレートを止むなく切斷して使用するとしても、長さに於ては出來得る限り½乃至⅓と云つた工合に正しく切斷し得る程度を限度として一尺やそれ以下と云ふ如うな全然再用の出來ない半端ものは全然出さしめないと云ふ事が必要である。大體スレートは切斷することが不經濟になる主要なる原因で、製造業者は既に早く此點を重視し、七尺ものや八尺ものを市販して來たと云ふことが茲に原因してゐた筈である。然るに最近統制上其他の原因に依つて製造業者は六尺物一手に定めて製造すると云ふ事であるが、愈々以て私の提唱せんとする工場建物寸法規格の必要を痛切に感ぜざるを得ない。

屋根も壁に做つて工場建築物は假りに勾配を五寸に規定し、六尺スレート（重ね三寸）何枚葺きと云ふ工合に規格を制定して梁間に幾何かの半端寸法を生ずる其規格化す可きが急務である。これが爲めに木材の長さに影響はあるが、これは多くは相當多量に上る數量なるが故に、山方に於て木材伐採當初に於て工場建築用木材として長さの規格化を制定することに依つて現在行はれてゐる焚き物に捨てられる貴重なる木材の余剩を生ずる結果を生む譯で、此點昭和十四年九月二十七日農林省令として發布せられた用材生產統制規則以下數次に渡つて補整せられてゐる用材規格規定中に斷面のみの規格を定めて長さへの斷乎たる規格を見てゐない等は徹底したものだとは云へない事にもなる。

工場に於ける窓の役目は採光と通氣を主とするものであるから、スレート寸法に支配されゝば從つて窓の高さにも規格の必要が生じて、これを規格化する事に依つて建具材料の規格化が生じ、從つて硝子板にも不經濟な部分が遞減する、斯くの如く觀察すれば、一木造工場新築資材のみに於ても優に一ケ年間一億圓位の余剩を生ずると決定しても、敢て過言ではないではない？。

工場建築に於てさへ美術建築に於けるが如く、過去の建築家がムキになつて意匠だヘチマぢやなんて云々して自己を主張するが如きは國家の急迫

せる現狀を知らないにも馬鹿馬鹿しくて話にならないと考へてゐる。

上記せるところは尤も簡單に解り易い木造工場建築物を引例して私の提唱を說明したに過ぎないが斯う云つた種類の資材檢討を行へば、此の多岐多樣に渡る建築界にこそ、誰れもが氣附かないで居る部門から誰れにも喜ばれなければならない規格統制が數限りなく生れて來る。

何うだ壁下地に貼るセメント製平瓦と赤素燒平瓦等に其强度を規格しては……現在の如うに破壞し易い捨て去られる貴重な原料資材の多くに諸君は其眼を掩つて知らぬ顏で濟してゐると云ふのか

昭和16年7月4日記

建築學會主催
第15回建築展覽會規程

第1條　本展覽會ハ建築ニ關スル造形的技術ノ考究發達ヲ圖リ併セテ建築ニ關シ社會ノ向上ニ資スルヲ以テ目的トス

第2條　本展覽會ノ會期、會場及事務所ハ次ノ如シ

會　期　昭和16年10月中旬1週間ノ豫定

會　場　白木屋(東京市日本橋區通リ1丁目)

事務所　建築學會(東京市京橋區銀座西3丁目1)

出品部別

第3條　出品ハ次ノ4部ニ分ツ

第1部　主題「民　　家」

第2部　會員作品及學生卒業計畫

第3部　競技設計應募圖案

第4部　參考資料

第4條　第2部ノ出品ハ建築學會會員ノ作品ニ限ル、但シ建築展覽會委員會ニ於テ適當ト認メタルモノハ此ノ限リニアラズ

第3部ノ出品應募資格ハ建築會々員タルコトヲ要ス

第5條　第2部ニ出品スベキ作品ハ建築、室內裝飾、都市計畫、橋梁並ニ庭園ノ圖案寫眞、模型等トス

第3部ニ陳列スベキ作品ハ競技設計應募圖案ニシテ審査ニ合格シタルモノトス

第2部中學生卒業計畫ニ出品スベキ作品ハ高等工業學校程度以上ノ學校ニ於ケル建築科學生ノ卒業計畫ニシテ當該建築學敎室ノ推薦ニヨルモノトス

第2部ノ出品ニ對シテハ都合ニ依リ取捨ヲナスコトアルベシ

出品ニ對スル注意

第6條　第2部作品ニツキ定ムル所次ノ如シ

1. 出品ハ陳列ニ適當ナル體裁ヲ整フコトヲ要ス（後記の第2部會員作品出品注意參照）
2. 出品セントスルモノハ昭和16年8月31日迄ニ本會事務所ニ申込マルベシ
3. 出品ハ總テ昭和16年9月30日迄ニ本會事務所ニ到達スル樣差出ルサベシ
4. 出品ヲ受理シタルトキハ直ニ預リ證ヲ交付ス
5. 出品ノ名稱、設計者、施工者及竣功年月ハ本會規定ノ記名票ニ本會ニ於テ記入添付ス

第7條　(「第3部　競技設計規程」 本誌19頁參照)

其　　他

第8條　出品ノ保管ハ最善ノ注意ヲ拂フト雖モ火災其他ノ場合ニ於ケル出品ノ紛失又ハ損害ニ對シテハ一切其ノ責ニ任セズ

第9條　出品ノ荷造及運搬ノ費用ハ出品者ノ負擔トス

但シ在京會員以外ノ出品者ノ圖面及寫眞ニ限リ本會ノ費用ヲ以テ返送ス

第10條　出品ノ陳列法及場所ノ區劃等ハ本會ニ於テ之ヲ定ムルモノトス

第11條　陳列シタル出品ハ閉會後ニ非ザレバ之ヲ搬出スルコトヲ得ズ

第12條　出品ハ閉會翌日午前中ニ會場ニ於テ受領セラルベシ



洋家具の話 (第二編) ギリシヤの家具

平尾敏也

ギリシヤ文化はキリスト教文明と対立する西洋文明の二大源泉でありまして、その文化の進歩は現代の私共にも感歎措く能はざるものがありまして、その文化追及の理想は美と眞にありましたので、建築に、工藝美術に、哲學に、科學に、眞に立派な作品や業蹟が殘されて居ります。オリンピア祭の様な競技會があつて運動競技の外に文藝、美術の競技までありましたから、その藝術的美はエヂプト、バビロニア時代より斷然優れたものであります。

殊に建築は天才的で、神殿の建築の如きは、優麗典雅、莊重なる調和の美を持つてドリヤ式、イオニヤ式コリント式等の樣式を創作致しまして、それに彫刻や繪畫を裝飾致しましたイクチヌス(ICTINUS)(建)プラクシテレス(PRAXITELES)(彫)アペレス(APELLES)(繪)等の巨匠が、その天才的創作を致しましたのでギリシヤ文明とヘレニズム文明とを通じて、燦然たる光を放ちました。

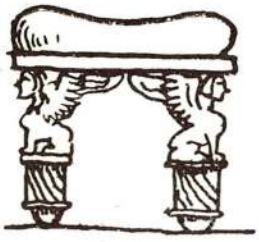
家具に於きましては、清楚な線と調和した構成で、その當時の文化をよく表現して居ります。勿論、紺碧の空や透き通る様な氣候も影響した事と存じます。

楡(ニレ)、檜(ひのき)、ひまらや杉、ひば(シプレス)、いちゐ(ユー)、樫(オーク)、檉(ポプラス)、黒檀(エーニー)等の材木が家具のみならず神殿の神像の顔や手を大理石と併用して使用されました。

私の知つてゐる範圍の最古の椅子は端正な直立した背板(バック)があつて、枘穴(ほぞあな)で脚が取り附けられてあります。



第 1 圖



第 2 圖



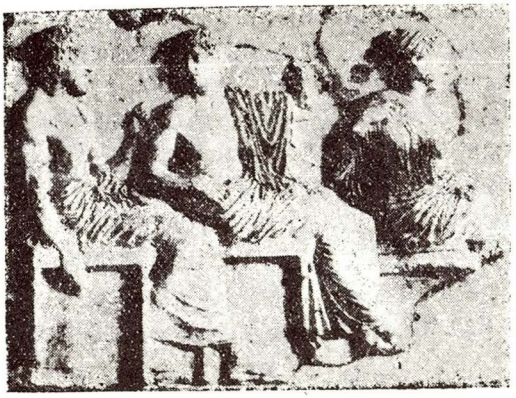
第 3 圖

第1圖、第2圖、第3圖、第4圖

物尺もあつて、揃つた大きさの椅子や家具を製作した事實をも見出します。



第 4 圖



第 5 圖

第5圖

3人とか9人とかを標準に致しました事は、三美像（スリーグレース）、9人の「ミューズ神」でも判ります様に長椅子などまで3人を標準にしてあります。

當時の習慣で坐食する爲、卓などは現在の食卓よりもづつと低いものであります。

長椅子も食卓用と寢臺用とがありまして、陶器繪などで想像しますと最も重要な家具はこの長椅子の様な寢臺であつたらしく、殊に宴會の時などはこの長椅子様の寢臺の上に半臥して飮んだり喰べたりした様で、双方共方形の臺と片蓋柱型の脚で出來て居りますが、寢臺の方は、一端がやゝ高くなつて枕をあてる様になつて居ります。

婦人用の腰掛には背板(又は背當)があり肱掛のついたものなどがあります。これ等の家具はスパルタ以外の地方はやゝ贅澤になつて、白雪の様な大理石で裝飾された室に、立派な彫刻と共にならび、隨分美しかつたと思はれます。

この當時の照明は、松明（タイマツ）を使つた様で、大きい廣間の夜もこの松明が大理石の床や壁に反映して、さぞ莊重優美であつたらうと思ひます。

以上申し上げました様な色々な家具は相當上流の家庭の代表的なものを申したのですが、これ等の家具に似たものゝ數々が一般のアテネの家庭用家具として愛用されました。

これ等の家具は西歷紀元前千五百年から約二百年間續きまして、ローマになるのでございます。

ローマの家具

紀元前十一世紀までは伊太利には原始的な型の家具のみでした様で、エトルリヤ人が到着して（第6圖）ローマの建國の礎を作りました、當時は、ギリシヤ文化が多大の影響を與へて居りましたのも、ギリシヤの藝術家達が寺院や各家庭などを裝飾致しました爲でありました。

初めの内は單純な生活樣式で、ジユピターを中心とする多神敎を奉じた生活をして居りましたが、色々の闘爭戰爭などで領土が擴張され異宗敎異人種を含み初めた折から、キリストが生れたのでネロ王など現れた歷史としては仲々面白いのですが、どうもローマ文明よりギリシヤ文明の方がすべて高度のものであつたと思はれます。

エトルリヤのアーチ式建築とギリシヤの列柱建築とを調和したローマ式建築が起り、パンテオン、コロツセウム等を作りましたが、莊重雄大さはギリシヤ建築には及びません。

唯土木や道路、橋など作り水道を設備した事などギリシヤと異なるものがあります。ポンペイの廢跡など見ますと、所謂文化がある程度まで高度に進むと腐敗し初めることが判ります。

この様な狀態から家具の事に移りますが、家具の說明の前にローマ住宅の建築の說明をしなければなりませんが、建築は專門家の研究がありますから極く簡單に申上げます。

ポムペイの住宅を例に取りまして お話を致しませう。

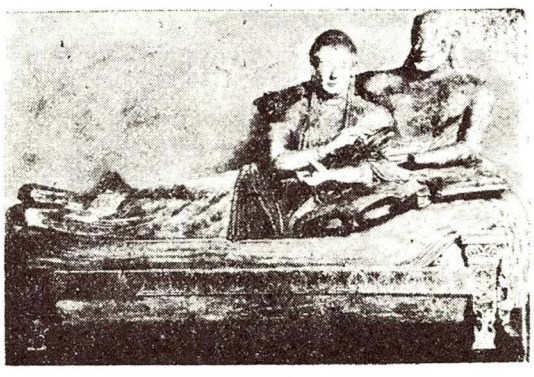
ポムペイは御承知の通りヴエスビアスの噴火で、急に埋沒致しましたので堀り出した家屋や家具は當時のまゝでありまして、建築的にはグレコロマン型になつて居ります。

住宅は　アトリウム（家族の室）
　タブリヌム（事務所兼應接間）
　ペリステイリウム（中庭）

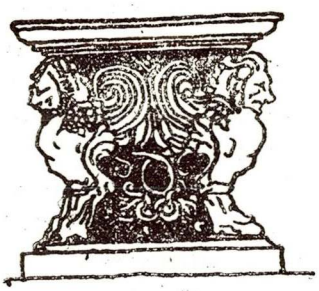
の美しい室が四角に出來て、アラエ（客間）、寢室、食堂（トリクリニユム）、浴室などで回型を構成して、中央には池と申しませうか、泉水と申しませうか、プールがあつてその上は屋根がなく青空が見えます。

四方の屋根から流れる雨水は樋の先にライオンの頭部の彫刻の口から糸の如く幾條もこの泉に流れ落ちる様になつて居ります。

廊下は壁畵があり圓柱があり圓柱の下部は艶めかしく赤茶色（オールドローズ）にぬられ各室は大きいカーテンで仕切られて居ります。



第 6 圖



第7圖

ポンペイが發掘された
大理石の大卓の横面
(木造にて 模造して平館收納作
関西某氏所藏す。)



第8圖

ローマ 三脚の台
トラペゾフォロン
TRAPEZOPHORON

床は普通の住宅でも大理石のモザイックを使ひ色々な模様を畵き、一層美しく裝飾されて居ります。灰色火山岩、大理石、花岡岩を使ひました。

ポンペイは商業都市であつたので住宅の道路に面した所に店舖があつて、私の見たのには藥局や壺屋、喰物屋など仲々面白い店が出來て居りました。これで簡單ですが住宅の御想像が出來ましたので家具のお話を初めませう。

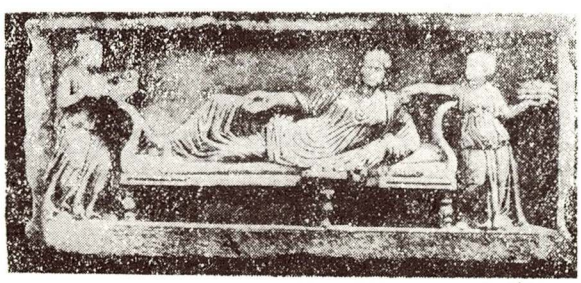
家具はギリシヤの職人によつて最初は作られましたが、永い月日にはローマ人の趣味や必要の爲變化致しました。意匠には空想的動物や渦巻唐草など表現し、家具の主材は木材大理石、金、銀、銅、象牙などに彫刻や象眼や彩色して貴重な石などをちりばめました。(第7圖)

材木は、ひまらや杉(セダー)、楡(エルム)、橄欖樹(オリーブ)、松(パイン)、とねりこ、梅(ピーシ)(ぶな)、玉目紅茶等(パーヴァイメーブル)で、象眼用としては黃楊(ボックス)、黑檀(エボニー)、柊(ホーリー)、てれびん香水(テールビンス)、樫(ヴエリー)、すずかけ(プレーウクア)の木等です。それに象牙や、角、べつこふ等も併用されました。雄辯家シセロは家具に九千ポンドを支拂つたと云はれて居ります。

卓は長方型圓型四角で、中央に1本又は3本4本等の脚で支へられ、上板はベニヤ張りであります。(第28圖)當時の名稱を記しますと

椅子(CURULE)四角で脚がX型
椅子(BISELLIUM)2人掛。5フイート乃至6フイートあつて馬白鳥の頭の飾あり。
主人用椅子(SOLIUM)
婦人用椅子(CATHEDRA)
ベンチ(SCAMNUN) 圓卓、メンサ、デルフイカ
ベツド、或は長椅子(LECTUS) クビクラリウス。
食事用長椅子(LECTUS TRICLINIARIS) ベツト用より低く、後に ACCUBITA となり、より低くなる。(第9圖)3臺のトリクリニアリスを卓の3方からかこみ左腕を枕につき右手で食事をする。
食器棚(ARMARIA)

石の彫刻などで見ますとこの寢臺には床にとどく様な布が掛けられてゐるのですがまだこの當時には布の模樣が餘りありませんのを見ると亞熱帶的なローマ文化もまだまだ初期である事を僅か一片の布に見出す事が出來ます。(第2編終り)



第9圖

ブック・レビュー

堀口甚吉

建築界には新刊書が乏しいが、日本の工業界全體を見渡せば、工學關書の出版されること、おびただしいものである。用紙不足、出版統制といふ叫びと、反比例して一時あてこみ的の一般時勢向の書は數限りなく出る。これにつれてといふのではあるまいが、工學書も正に汎濫時代の觀を呈してゐる。この中でも、機械工學、應用化學方面の書が一きは目立つ。筆者の如きものゝ机上にも丸善書店よりのオン・アップルーバルで配達される工學書は日に數冊を數へる盛況である。これ等の書籍を見て筆者の最も感ずることは、同じ程度の、同じ題目の書が可成り多いことである。これは數の最も多い讀者層をいづれの著者も、出版者も目標におく結果であらうが、日本全體を見渡して考へると少し無駄なやうな氣がする。然し所謂、自由競爭中に著者の希望に適合したものか、後までのこるといふ事を考へれば、これもまた止もう得ないかとも考へれる。又一面工業書は總々三ケ年位の生命のものであることから考へれば多くの書の發行されると又歡迎してよいであらう。

これ等工學書中、我々建築家に有益で且讀んでは損にはならぬと考へられる二三の書を次に記さう。

①**一般力學**　山内恭彦著　A.5判（舊菊判）313頁　定價2.8圓　岩波書店。昭和16年6月版。

本書の著者、山内氏は東京帝大の物理學の方の助教授である。したがつてこの力學の書は建築方面の構造力學、材料力學に直接に役立ちはしないが、建築雜誌等に發表される論文を讀むに對する基礎の書としては、最も手頃のものかと思ふ。本書はもと岩波書店の第二回の物理學講座の一部分として出たものである。岩波の第一回の物理講座には山口昇氏「材料强弱及土壓」論とか、又この一般力學に相當するものは田丸卓郎氏の筆になり得難きものであつたが第二回講座の一般力學は第一回のものよりずつと簡潔で且新し味がある。且數多くの例題の解してあるから、力學運用上の力をつけるには甚だ有益である。内容は

第一篇　質點及び剛體の力學
第二篇　解析力學

に分れ、第一篇はベクトル算法より解き起し、ニュートンの三法則を徹底的に解說してある。第二篇は所謂解析學の知識を活用して振動、多重週期運動等を論じたもので、我々建築家にとつても一讀得る所は多い。

しかし全體の記述が、微、積分を自由につかつてもある故、筆者には少しわかりにくい所もある。

②**高等函數表**　林桂一氏著　B.5（四六倍判）222頁　5.5圓

數値計算　林桂一氏著　B.5判　383頁　5.5圓

兩書共に16年3月版である。林博士は九州帝大の教授で、これ迄、獨逸より四冊も高等函數の表を出してゐられる。これ等は共に良書にて世界の學者が之を使用してその便なるをみとめ、林博士の名はこのため世界にひろがつてゐるのである。然しこれ等は大變高價なことゝ、入手困難なので國内版ともいふべき書を出されたのが「高等函數表」で、これの說明、或は數値計算に對するもろもろの事項について解說されたのが「數値計算」の書である。

高等函數表の内容は圓及び双曲線函數、ガンマ及び球函數、ベツセル函數、楕圓函數、雜數表からなる。これ等も筆者等には常に必要といふのでないが、數表の如きは思はぬ時に必要になり、又この中に必要な數表を見出したときは買つて置いてよかつたと感ずるものである。二項定理の指數が小數の場合等も本書によれば0.01歩みのものを容易に見出し得る。此等を普通の計算にて求める手間を考へれば、本書の如きは最も廉い書籍と感ずる。

③**數値計算論**　宇野利雄氏著　B.5判　90頁　定價1.5圓　岩波書店

本書は解析數學叢書の一篇でパンフレツト式の手輕なものである。「林博士の數値計算」よりも平易で理解しよう。内容は表の使用、補間法誤差論、で、主として誤差論に力をそゝいである。ずつと以前、金澤卯一氏の「近似の計算及省略算」といふフランス流の小さい書物があつて筆者も讀んだことがあるが、本書はそれの一層明晰なる解說書と思へばよい。

計算尺使用上の誤差といふのが最後に記されてゐるが、これはめづらしい。

⑤**微分方程式概論**　池田芳郎氏著　A.5判　296頁　定價3.5圓　岩波書店　16年4月版

微分方程式も建築學會の論文等を讀むには基礎知識として必要である。私は以前、林鶴一博士の數學叢書中の「初等微分方程式」を讀んだが、これは内容豐富又解法が丁寧なので有益であつた。しかし現在は「初等微分方程式」は絶版になつてゐて一冊8圓の公定古本價格になつてゐる。又8圓出してもなか〳〵手に入らない。數學叢書以外のものでは吉江博士のものなどあるが、少しむつかしいやうだ。池田氏のものは10年ばかり以前に出たものであるが、一時品切になつてゐてこの改訂版が今紹介せんとするものである。氏はたしか電氣工學の方の專門家と思ふが、本書の側題も電氣に關係したものが多い。然し側題の半分は主として彈性學からとつてゐるので、我々建築家にとつても充分參考になる。且逐次近似計算の方法の81頁―97頁は甚だ實際家には有効である建築家が讀む

べき微分方程式の書としては本書が第一であらう。

⑥熔接年鑑　工業通信社編纂　B5判　400頁　定價5圓　昭和16年版

本年鑑は本年始めて發刊されたものである。本書は熔接協會とは直接の關係はないらしいが、執筆者は日本の熔接研究家、實際家の著名の人々の殆どを網羅してゐるやうに見える。名は年鑑であるが、熔接百科事典ともいふべきもので、我々建築家にとつてきはめて有益である。

內容は第1篇、熔接基礎、第2篇、熔接應用、第3篇、熔接部檢査試驗、第4篇熔接技術、第五篇熔接、關係資料の5篇に分れてゐて、その記述は可成り敎科書的であつて、本書のみにて、現在の熔接界の現狀をほぼ知り得るやうになつてゐる。本協會員池田宮彦氏の「鋼管熔接構造物のガセットプレートを節約する組方と强度の差異について」といふ論文も載せられてゐる

⑦熔接標準試驗版及試驗法　B5判　15頁　定價30錢　日本學術振興會發行　15年3月。

本書は昨年の出版で、いさゝか舊刊に屬するが、熔接年鑑を紹介したので、ついでに紹介する。これは學術振興會學術部第4小委員會報告XVIIIで內藤多仲博士の主任で出されたものである。熔接試驗版は種々の方式並びに議論があり、我が建築協會にても、淺野新一氏の研究が、「建築學研究」にのつたことがある故、會員諸氏に於かれてもなじみの深きものがあることゝ信ずる。本パレツトは主として東京にて實驗されたものよりまとめられたもので（試案）として出されたものである。建築界に於ても一時の狀況のまゝ進めば、今回は電氣熔接が如何に盛んになつたであらうかと思ひ、深き感慨にうたれる。

⑧耐火物年鑑　B5判　511頁　定價4.5圓　日本耐火物協會　16年6月刊

本書は⑥の熔接年鑑とよく似た編輯である。年鑑とあるがやはり耐火物に關する百科全書である。これは日本窯業協會の一事業である。卽ち建築學會の建築年鑑に相當する。第一篇研究報告、論說、第二篇日本耐火物協會會報、第三篇共同聖緣となつてゐる。我々には第一篇が有益で、この中には（A）耐火物原料（B）耐火物一般（C）各種用途より見たる耐火物（D）耐火物の性狀と試驗研究法（E）斷熱材（F）特殊製品（G）窯爐と爐材（H）文獻調査、と甚だ學術的に編輯され、我々建築家の必讀すべき條項に富んでゐる。この耐火物年鑑の編輯は甚だ優良で、建築學會の年鑑が商品價値少く、內容の乾燥性にとんでゐるのと比較すると、學者の數が比較的少い窯業界が我々建築界に範を示してゐるやうでもある。然しこれは、窯業界の學術及び研究が直ちに資本とむすびついて工業化するのと比較して、建築界の學術、研究が直ちに資本と結びつくもの少きことから源因してゐるのであるまいか、我々建築界のものにとつて建築業の本質を反省せしめる一材料である。

科學振興にのる二題

西山卯三

最近科學振興が叫ばれ、國民の科學的常識の涵養から迷信排擊が叫ばれる。双手をあげて賛成したいところである。

さて、建築は土地に結びついて最も因襲に關係深いもの〻一つだが、そのうちの住宅については、家相といふ迷信が現在でも押しも押されもせずくつゝいてゐる。之に對しては今まで多くの建築家が敢然たゝかつて來たが、いづれも旗色が惡かつたその理由は、住宅を建築家に賴むやうな人はいづれも恒産のある人又はそういふ人相手であるから「金持喧嘩せず」の諺通り惡いと云はれる事は迷信と知つてもしない人が多かつた爲である。だから、賢明な建築家は正面衝突をさけて迎合した。學者も亦「家相は斯くの如く學理的にも正しい事をいつてゐる」などといつたような事を述べ、當人はそれが「學理」を主張しやうとしたのかもしれないが、結果として家相屋の看板をかついだ。これが今までのありさまである。

併し狀勢は今日に於て變つてゐる勿論之が全面的撲滅は急には困難であつて、新聞紙上などでいはれる如く夫には强權の發動が必要であらうが、この時にあたつて我々が特に注意すべきは、勞務者住宅とか國民住宅とかいふものには絕對に家相乃至迷信をよせつけてはならないといふ事である。

我々は從來の因襲を矯正するに急であるため机上論で改革を行ひ、そのため却つて改革に對する不信を植えつけるといふ過をおかしやすいのだが、斯樣な事は勿論さくべきである。從つて舊慣習は愼重にそのよつて來るところを檢討し、そのよきところは殘るところなく新解決に包攝しなければならぬ。しかし、もし建築家なるものが從來の博學ぶり——惡くいへばデイレツタント趣味を發揮して、「こういふ事は某々の土地ではきらはれるから」などとその理由もきわめず、迷信的條項を持ち出すような事があつたら、夫は建築家の社會的任務に忠實ならざる行動である事を銘記せねばならぬ。

居住慣習に關する限り、建築家は敎育家、指導者を以て任ずるといふ心構えが、今我々建築技術者によつて庶民住宅の建設がはじめて行はれようとしてゐる時しかと摑まるべきである。

ドイツ人は湯の熱いぬるいを「何度であるから熱い」などといふそう

である。之は餘り感心の出來る素質ではないが、建築材料なども「これはよからう」などといふ事だけで片づけるのは、來るべき世界に飛躍せんとする國民の常識としては感心出來ない。

建築技術者が事務所や現場で、新材料に出くわす時、又は同種材料の選擇をする場合、各種材料について の確實な資料成績の數字を缺いてゐるのが現狀である。そして、たとへ或種の試驗結果があつても、公表される時はある特定の人々の「生活權の擁護」のため名稱を秘せられるのが當然の事であつた。

しかし、これこそ、今の言葉でいふ所謂「舊體制」の最たるものである。科學振興の叫ばれる今日建築材料の諸元の調査・研究・公表がなされる事、新材料には特に夫が必要條件とされる事——などが實行されるべきである。

つまらぬ誇大廣告をして紙を濫費するよりも、こうした處に費用がそゝがれるようになるのを我々建築技術者は一致して望むべきであらう。

(2601.6.21)



會　員

故光安梶之助氏

正員光安梶之助君ノ死ヲ悼ム

同窓同期生　小笠原祥光

親友光安梶之助君昭和拾六年六月參拾日午後六時貳拾五分急性肺炎ニテ逝去ス、罹病後僅カ二週間ニシテ幽明境ヲ異ニス、御遺族ト共ニ實ニ悲痛慟嘆オク能ハサル次第也

君ハ明治三十年三月東京築地小田原町ニアリシ現工學院ノ前身タル工手學校ノ建築科ニ小生ト共ニ入學シ君ハ遞信省官舍ノ知人宅ヨリ小生ハ鐵道局官舍ノ知人宅ヨリ通學シ、近隣ノコトトテ常ニ相親ミ通學ノ途モ殆ンド同道スルコト多キ間柄ナリシ學校ニ於テモ殆ンド同格ノ成績ヲ得テ明治三十一年七月ニ卒業スルヤ、君ハ東京帝國大學營繕課ニ入リ小生ハ鐵道局新橋事務所ニ入リ爾來約二ケ年間在京中互ニ親交セリ、然ルニ君ハ明治參拾參年六月大阪住友本店營繕課ニ轉シ遂ニ所在ヲ異ニシ約拾五ケ年間親シク其ノ聲咳ニ接スル機ヲ失シタルモ偶然大正四年貳月ニ至リ小生ハ君ノ推薦ニ依リ鐵道省ヲ辭シテ住友營繕課ニ採用サレ再ビ大阪ニ於テ親交スル境遇トナリ爾來在阪約貳拾五年間親交セリ、誠ニ君ト小生ハ不思議ニツナガル緣ナリシ

然ニ去六月貳拾四日君ハ今回更ニ住宅ヲ建築シ其新居ノ槙檢方ヲ職工ニ指示シタル歸途風邪ニ罹リ遂ニ立タス、然モ小生ハ其病狀モ知ラス逝イテ後之ヲ知リ、實ニ驚嘆セル次第ナリシ

嗚呼悲イ哉、茲ニ君ノ小照ヲカカゲ略歷ヲ記載シテ生前知遇諸彥ト共ニ哀悼ノ意ヲ表セントス

故光安梶之助君略歷

明治拾年拾壹月拾五日　福岡縣那珂郡春吉村ニ產マル

明治參拾年參月　東京市京橋區南小田原町工手學校ニ入學ス

明治參拾壹年七月　同校造家學科ヲ卒業ス

明治參拾壹年七月　東京帝國大學營繕掛ニ採用セラレ營繕工務ニ從事ス

明治參拾參年六月　大阪住友本店營繕課ニ入ル

(爾來野口技師長、日高技師長ノ二代ニ渉リ建築設計又ハ監督ニ當リ有名ナル住友男爵須磨別邸ヲ初メトシテ大阪中之島圖書館其他住友本店ノ諸工事ニ關係シタリ)

大正七年拾月　住友總本店ヨリ建築研究ノ爲米國出張ヲ命セラレ同八年六月歸朝ス

(其後ニ至リ現存ノ住友總本店鐵骨五層建ノ建築ニ際シテハ君カ其强度計算ヲ擔任シテ大ニ努力シタルヤニ聞ク)

昭和六年壹月　住友合資會社ヲ依願退職シテ住友末家ニ編入セルレ

爾來大阪市住吉區阪南町ニ其居ヲ新築シ所謂悠々自適ノ生活ヲナシ更ニ本春市外八尾町山本住宅地ニ老後安位ノ新居ヲ建テ正ニ此處ニ移轉セントシテ病魔ニ侵サレタリ

令閨道代氏トノ間三男五女(內男女共一名宛死亡セリ)アリ一男三女結婚濟ニシテ長男光安慶二氏ハ目下東洋紡績株式會社ニ勤務シ居ラレ、今ヤ君逝クトモ家族一同ニ對シ何等ノ憂モナキカト思フ君モ亦臨終ニ際シテ所謂安心立命ノ境ニアリシカト思フ嗚呼

會報

常務會（第12回）

時　6月16日 午後5時40分—7時30分

所　陳列場

出席者　理事　今林副會長、井上副會長

常務　池田主記、北垣主記、玉置主記、中西主記、藪中主記、桐本主計、松久保主計、大下編輯、小林編輯

議事

1. 常務一名補欠選擧に關する件
2. 會費滯納者處置に關する件
3. 職員上半期昇給並賞與の件
4. 會員詮衡

報告

1. 建築學會より用材規格に關する回答の件
2. 5月分會計報告

常務會（第13回）

時　7月7日午後6時30分—8時30分

所　陳列場

出席者　理事　井上副會長

常務　中西主記、桐本主計、芝田主計、松久保主計、大下編輯、岡田編輯、小林編輯

議事

1. 帝塚山學園より住宅展覽會主催方依頼の件
2. 建築學研究會より同誌續刊の辭會誌に揭載方依頼の件
3. 織本道三郎氏より「ヂベル」に關する講演會開催方依頼の件
4. 建築學會より建築展要綱會誌に揭載方依頼の件
5. 東京日日新聞社より會誌寄贈方依頼の件
6. ABCに代る新倶樂部設立に關する件
7. 都市武裝促進幹事會より經費要求の件
8. 同幹事會より幹事委嘱方要求の件
9. 會勢幹事會より同上
10. 元役員逝去に付香花料贈供の件
11. 古雜誌處分の件
12. 書記並助手辭職願出の件
13. 會員詮衡

報告

1. 建築學會より住宅に關する建議に付援助方依頼の件
2. 滿州國建築局長より圖書寄贈の旨申出の件
3. 第四回建築聯合協議會經過報告

評議員會

1. 昭和16年6年19日大阪市北區中之島三丁目三番地朝日ビルヂングに於て評議員會を開會す
1. 出席者下の通り評議員12名

井上新二、今林彦太郎、宇賀一郎、岡本新次郎、北垣熊之介、國部茂、玉置豊次郎、内藤亮一、中西六郎、野中駒市、三浦茂、藪中一良

1. 午後6時5分開會理事副會長今林彦太郎氏議長となり只今出席者12名なるも本日は再度の召集に付定款第24條但書により定數を問はず本會成立の旨を告げ直ちに議事に入る

議案第4號　常務一名補缺選擧に關する件

議長より編輯常務政岡基次君今般應徴のため常務辭任の申出ありたるを以て之を承認し缺員の儘にては會務の運行上支障を生ずる處あると認むるに付補選せんとする旨を説明し互選方法として前例により詮衡委員を設け一任しては如何と諮りたるに賛成々々の聲あり依て詮衡委員側によることゝ決し指名方法等總て議長に一任のことに滿場賛成す

依て議長は下記三氏を詮衡委員に指名し別室に於て直ちに詮衡せられたき旨を述べ其間暫時休憩を宣す

内藤亮一君　野中駒市君

三浦茂君

午後6時10分再會

議長只今詮衡委員より詮衡の結果を報告ありとて下の通り發表す

常務（編輯）增井敏克氏

右の通增井敏克君當選の旨を告げ一同承認

議案第五號　會費滯納者處置に關する件

議長より別紙調書の通り會費滯納者あり拂込方に關しては最善を盡したるも到底收納の見込なく止むなく定款第14條に依り處分致度本案を提出したる次第を詳細説明し各員に於て心當りの向は可然手配方を依頼の上、止む得ざるものは除名處分に附する事の賛否を問ふ

三浦評議員より

集金郵便取扱停止により將來此種滯納者の增加を豫想せらるゝに付更に一層集金に努力し尚會勢幹事會並に出身校團體等を煩して萬全の集金策を講じたる上本會議に提出せられ度旨提案ありたり

議長より

今月に至る迄には凡そ以上の經路を執り善處したるものなるが會勢幹事會にも努力を乞ふ旨回答の後三、四の意見交換ありたる結果下記の通り本案除名處分に附することに可決確定

1. 將來は本人に一層拂込易き方法を講じたる上出身校團體ある向

には其世話係に一應斡旋を依頼し尙會勢幹事會にも集金に協力を乞ひたる後評議員會に提案すること

1.本日提案の別紙調書は列席者の內にて引受者あるものを除き其他のものは前揭の處置を講じたる上尙入金せざるときは除名手續を執ること

1.前揭の集金期間を本日より向ふ一ケ月間限りとし即ち7月19日迄に善處するも入金せざる場合は本日に遡りて除名手續を執ること

1.次で議長より本會議事錄の代表署名者に下の二氏を指名し其の承諾を得たり

宇賀一郎君　中西六郎君

1.議長以上にて本日の議案は全部終了に付評議員會は之を以に閉會する旨を宣し散會す時に午後6時45分

陳列場幹事會（第9回）

時　6月27日午後6時30分—9時
所　陳列場
出席者　幹事長　池田
幹事　野中、松久保、道田
若山

1.建築資材の統制並新興材料に關する座談會開催の件

都市武裝小委員會（第4回）

時　6月30日午後6時—8時30分
所　陳列場
出席者　委員　井上、寺岡、內藤、松井、吉田

1.主要都市に於ける防空防火講演會開催の件

都市武裝促進幹事會（第5回）

時　7月4日午後6時—7時30分
所　陳列場
出席者　幹事長　池田
常任幹事　井上、竹內
幹　事　寺岡、吉田

1.主要都市防空防火講演會具體案決定の件

會勢幹事會（第5回）

時　6月26日午後6時—8時
所　陳列場
出席者　幹事長　谷
常任幹事　大下、川人、坂口
幹事　岩尾

1.講演會開催に關する件

1.幹事追加委囑方の件

材料委員會（第13回）

時　6月26日午後7時—9時
所　圖書室
出席者　委員長　松久保
幹事　楠瀨、瀧
委員　前野、道田

1.木材品等規格中板類に關し引續き檢討

住宅委員會（第2回）

時　7月12日午後6時30分—7時30分
所　陳列場
出席者　委員長　岡田
幹事　小林
委員　中野

1.住宅讀本に關する件

會員動靜

入會

會員

足立　勝君　旭區中宮町188（建築設計監督）
岡　龜男君　住吉區阪南町西4の31（南海鐵道株式會社工務部營繕課）
兒玉　獻吉君　泉南郡佐野町4463（建築業）
柴崎　利一君　泉南郡淡輪村4593（南海鐵道株式會社營繕課）
田中　信一君　北區太融寺町5（西本組）
富林　豊治君　東淀川區西町472（建築業）
牧村　利勝君　住吉區松虫通1の33（間組大阪支店）
松浪久治郎君　泉南郡佐野町中庄731の1（土木建築請負並工務店）
吉井　清君　兵庫縣武庫郡鳴尾村鳴尾字渡瀨62（大林組）
大野　力君　此花區春日出町中4の9（內外木材工藝株式會社）
河合鐘治郎君　中河內郡松原村大字高見ノ里（京阪電氣鐵道會社工務課）
古森　忠夫君　大正區千島町6 內外木材工藝株式會社內（設計部）
二宮　吉彥君　京都市左京區田中關田町34（日本電氣株式會社）
野口　四郎君　吹田市2723（大日本紡績株式會社）
松山　愛三君　泉北郡濱寺町船尾808の1（竹中工務店）

地方會員

入谷正太郎君　滋賀縣愛知川町字814（建築事務所）
杉原　良一君　八幡市黑崎日本アルミ黑崎工場建築場竹中工務店（竹中工務店）
藍岡　正一君　廣島市南段原町632（建築工務所）
松下　滋君　東京市本鄉區根津須賀町7（住宅營團東京支所建設部）
松田　善雄君　朝鮮平安北道新義州府老松町2の6（請負業）
井崎　梁次君　東京府北多摩郡昭和町陸軍航空本部昭和建築工場（陸軍航空本部）
古林　義敦君　廣島市翠彌生通1534（廣島縣立工業學校）
清水　朝行君　呉市吉浦東濱下町24小田方（呉海軍建築部）

奈良崎二彥君　吳海軍建築部吾妻宿舍（吳海軍建築部）
比良　榮二君　吳海軍建築部建築掛
樋口　國郎君　滿州國鞍山市南一條町20の2（滿州鞍山市公署住宅科）
山口　誠志君　吳市吳海軍建築部平原宿舍（吳海軍建築部）
堀井　啓治君　名古屋市東區西二葉町34（愛知縣建築課長）

特別賛助員

今村　清君　神戸市灘區日尾町3の40（有限會社興亞木工製作所）
上田　終平君　天王寺區上本町9の53（大阪府庭樹造園業組合聯合會）
山本　氏徳君　東成區腹見町3の3
和泉榮次郎君　東淀川區十三東之町2の65（和泉榮組）
大平　忠吾君　兵庫縣川邊郡園田村森297（鐵工業株式會社）
後藤　敏郎君　旭區天王田町215（建築材料商）
宮倉　英男君　西區靱南通3の25 大林組宿舍內（內外木材工藝株式會社）

普通賛助員

野村　順一君　京都市左京區聖護院東町10（同志社大學本部營繕課）
福西　信幸君　住吉區山坂町4の56（大阪府勞政課）
神山　明君　布施市永和町3の48
熊田　政男君　八幡市大字穴生日本化成第三工場建築場竹中工務店（竹中工務店）
竹川　省三君　福知山市堀聯隊下（大阪鐵道局福知山保線事務所）
堂山　健男君　天王寺區南日東町114（大阪市役所建築部）
林田　嘉瑞君　八幡市大字穴生日本化成第三工場建築場竹中工務店（竹中工務店）
山本　桂一君　西淀川區佃町1の196
谷口　維郎君　大正區泉尾上通1の41（西本組）

退　會

會　員

扇源助君、佐藤信仁君、田中秀彥君武信正治君、中西濱之助君、福田正雄君、山野信男君、田中成彥君

地方會員

伊藤憲一郎君、伊藤甫君、岩崎陽行君、中山克君、福島葆光君、山岸榮太君、加藤鐵之介君

特別賛助員

管谷六郎君、門井松吉君、越泰之助君、樋口繁君

普通賛助員

清水倉八君、岡肇君、田村幸一君、多田英右君、吉田勝君

轉居・轉勤

會　員

向井壯一郎君　神戸市灘區櫨口町3の1403
藤本　阡夫君　西區北堀江通6の19
石井　春雄君　東京市世田谷區北澤3の88
岡田　樸君　吳市吾妻町2丁目吳海軍建築部吾妻宿舍內
中村　定春君　佐世保市上佐世保俵町326 海軍建築部第一職員宿舍內
廣瀨誠司郎君　北河內郡守口町小春町5の5
藪　清治君　岸和田市別所町255
伊勢村四郎君　新京滿洲第174部隊木佐木隊
天池寫兵衛君　兵庫縣川邊郡立花村三反田字若松30
坪川　忠君　佐世保市俵町326 佐世保海軍建築部第一職員宿舍內
材寄　修君　神戸市須磨區戶政町3の103
西川　鶴吉君　伊丹市稻野御願塚53 1 大林組稻野出張所
大澤　幸平君　住吉區万代西2の34
鋼島　辰雄君　兵庫縣飾磨郡廣畑町、則直京見莊內
小林　健男君　住吉區山坂西ノ町1の26
田中庄太郎君　堺市三國ケ丘町573の9
藤井廉之佑君　神戸市須磨區禪昌寺町1の1
小山亥智郎君　西宮市段上區76
安田　健三君　名古屋市中區長岡町6の9の2
並木　長吉君　兵庫縣川邊郡立花村字尾濱東浦287
森　茂樹君　東舞鶴市森905
河田　明雄君　名古屋市中區廣小路¥6 住友ビル內大林組名古屋支店
荻村　靖君　（勤務先）住宅營團大阪支所
金森　梁雄君　東京府北多摩郡昭和村陸軍航空本部建築工場內臥龍莊
宇都宮邦士君　府下三島郡富田町92富田莊內
笠井新十郎君　池田市今在家151 前田方
松村　知之君　臺北市臺灣軍經理部工務課內
井上　正男君　堺市宿院町東3の15
大津　利雄君　奉天市大和區葵町70
石田　定文君　（勤務先）中部軍司令部經理部工務科

地方會員

多田　武君　廣島市南區千田町正田方
久芳　一雄君　東京府北多摩郡昭和町鄉地229地 藤木工務店宿舍內

梶　正治君　臺灣高雄州鳳山街灣子頭臺灣軍經理部鳳山諸所內

杉本　美夫君　東鮮鎭市舞鶴海軍建築部溝尻東宿舍504號室

松下　克巳君　奉天市朝日區揚武街一段61號

灘山　敏君　長崎市東中町38

佐藤　靜夫君　東京市世田谷區北澤2の103

大島鐵太郎君　名古屋市熱田區新尾頭町1の5青島光治郎方　（住宅營團東京支所建築部工務第二課）

坂本　榮六君　大牟田市大字西米生2230三井化學工業株式會社石油合成三池工場竹中工務店出張所

大岩　貞雄君　靜岡縣盤田郡袖浦村陸軍航空本部天龍建築場

三宅　伍君　大正區三軒家2の11小野越方

宮坂　一也君　福岡縣大牟田市大正町4の46古賀市郎方

特別賛助員

松井　邦彦君　豊能郡小曾根村字長島1210やよひスレート大阪工場

西垣　孝一君　尼崎市西松島町86防空器材製作所內

普通賛助員

尾田　正智君　名古屋陸軍病院東練兵場分院東6番乙室

車角千代治君　臺北市末廣町1の13清水宗孝方（臺灣軍經理部工務科）

芳川　時男君　三重縣北牟婁郡尾鷲町尾鷲驛前大和館氣付

桑田美代治君　佐世保市稻荷町246

平井　謙一君　臺北市三張犁臺灣軍經理部三張犁工事場

板垣　嘉一君　西淀川區浦江南1の56（住宅營團大阪支所建設部　工務第一課）

苅田源治郎君　新京特別市順天大街交通部都邑計畫司計畫科

【改　名】

會　員

宍浦良次郎君（舊名朝太郎）

特別賛助員

田村　德八君（舊名嘉啓）

死　亡

會　員

土地清治君、小坂信一君、光安梶之助君

特別賛助員

小林嘉尙君

普通賛助員

坂東八郎君

（謹んで哀悼の意を表す）

建築と社會

第24輯　第8號

毎月1回1日發行　定價（送）　1冊　50錢（郵稅2錢）　12冊　6圓（〃　24錢）

昭和16年7月25日印刷　昭和16年8月1日發行

發行・編輯　戸川　弘

印刷人　大阪市北區朝日ビル日本建築協會內

印刷所　ブラトン印刷社　大阪市西區江戸堀南通2丁目13番地

發行所　社團法人　日本建築協會　大阪市北區中之島3ノ3　朝日ビル　電話長北濱(23)4501番(9)　振替口座大阪39975番

配給元　日本出版配給株式會社　東京市神田區淡路町二丁目九番地

特約販賣店　柳々堂書店　大阪市西區京町堀羽子板橋西　電話土佐堀2440番　振替口座大阪2084番

禁　轉　載

本號に掲載せるものは、一切これを無斷にて轉載し又は單行本に上梓その他の複製行爲をなすことを禁ず。

廣告掲載料金

グラビヤ（第1頁）	1頁	1回	55.00
グラビヤ（第2頁）	1頁	1回	45.00
後附	1頁	1回	25.00
後附	½頁	1回	15.00
記事中	¼頁	1回	20.00
アート（中掲）	½頁	1回	25.00
表紙2	¼頁	1回	25.00
表紙3	¼頁	1回	20.00
表紙4	¼頁	1回	30.00

廣告掲載御申込は本會へ直接願ひます。本誌購讀御注文はすべて前金で本會直接又は特約店へ、振替貯金又は爲替で御拂込を願ひます。郵券代用は一割增、代金引換はお斷り致します。

●第二四集　第八号　掲載広告一覧（掲載順）

松下電気工業
協和製作所
南満鉱業建材
三菱商事
南満建材工業所
中野石材店
平松釣戸車製造所
関城化学工業
東洋リノリューム